員弁郡大安町

丹生川上城跡発掘調査報告

1985.3

三重県教育委員会

序

三重県では、昭和49・50年度に国庫補助金の交付を受けて実施した開発集中地域中世城跡分布調査等により、中世城館の基礎的資料の作成・刊行を行なってまいりました。これらにより、県民の関心も高まり、県下全域にわたって約1,100ヵ所の中世城館跡の分布と存在が周知されるようになってまいりました。

ここに報告する丹生川上城跡は、国道306号改良工事に先立ちその所在が確認されたものであります。そこで、その保護に努めるよう協議してまいりましたが、やむなく発掘調査を行ない記録保存に努めることとなりました。調査の結果、12世紀初めから16世紀中頃に至る丹生川上城跡の一端を明らかにすることができました。こうした城の遺構等が、当時の生活、社会を具体的に語りかけてくれる歴史資料として学問的にも重要であることは言うまでもありません。今後とも周辺の自然景観をもふまえた城跡の保護、活用が必要であり、広く県民各位の理解と協力をお願いする次第であります。

なお、調査にあたっては、桑名土木事務所、大安町教育委員会各位をはじめ、地元大安町内の多くの方々の惜しみない理解と協力を得ました。ここに末尾ながら記して、心より感謝の意を表します。

昭和60年3月

三重県教育委員会
教育長 横田猛雄

例　　言

1．本報告書は、国道306号改良工事に伴い緊急発掘調査を実施した員弁郡大安町大字丹生川上字正法寺所在の丹生川上城跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県教育委員会事務局文化課

技師　山田　　猛　　主事　杉谷　政樹

研修生　中山　暁　井藤正文　中西正典　（昭和58年度）

主事　久志本鉄也　　同　稲垣　良二　　同　上村　安生

研修生　浅尾　　悟　　（昭和59年度）

調査協力　　大安町教育委員会　　清水　弘之（国学院大学学生）

遺物整理は久志本が行い、報告書作成は杉谷と久志本が担当した。執筆分担については、Ⅰ郭の遺構及びⅡ～Ⅵ郭の遺構を杉谷、それ以外は久志本による。

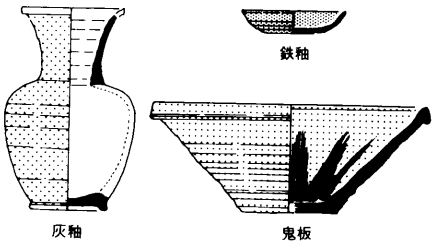
3．なお出土した人骨に関する所見を、羽場喬一教授（三重大学医学部法医学教室）にお寄せいただき別冊付篇とした。

4．本城跡の遺跡標示略記号は９ＴＮＫとし、遺構標示は次の略記号を用いた。

ＳＡ　土塁、柵列　ＳＢ　建物　ＳＤ　溝　ＳＥ　井戸　ＳＫ　土坑
ＳＸ　石列、その他

5．図面上の方位はすべて真北を用いた。磁北は西偏約6°30′（昭和55年）である。

6．遺物の図版は土師器の断面を白ヌキとし、施釉陶器については、次の各トーンで釉の種類を表現し、青・白磁、染付については特定の表現をしなかった。



7.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ．前　　言……1

Ⅱ．位置と歴史的環境……4

Ⅲ．遺構と遺物……8

1．郭　構　造……8

2．Ⅰ　　郭……8

3．Ⅱ～Ⅵ郭……14

4．Ⅶ　　郭……25

5．Ⅷ・Ⅸ郭……42

6．Ⅹ郭ほか……48

Ⅳ．結　　語……53

図　　版

ＰＬ１　遺跡遠景　Ⅶ～Ⅹ郭付近
ＰＬ２　Ⅰ郭全景
ＰＬ３　ＳＸ３
ＰＬ４　ＳＸ１　ＳＸ11
ＰＬ５　ＳＸ12　ＳＸ13
ＰＬ６　Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ郭　Ⅳ・Ⅴ郭
ＰＬ７　ＳＢ23　ＳＫ26
ＰＬ８　ＳＸ31　ＳＸ31遺物出土状況
ＰＬ９　ＳＸ41　ＳＸ41下層
ＰＬ10　ＳＸ18　Ⅱ～Ⅵ郭調査後全景
ＰＬ11　Ⅶ郭調査前全景　Ⅶ郭調査後全景
ＰＬ12　ＳＥ42付近
ＰＬ13　ＳＥ48　ＳＥ48断面
ＰＬ14　ＳＢ51推積状況　ＳＢ51
ＰＬ15　ＳＸ58
ＰＬ16　ＳＸ59　ＳＸ73
ＰＬ17　ＳＥ82付近
ＰＬ18　ＳＥ82
ＰＬ19　ＳＸ65　ＳＤ84
ＰＬ20　ＳＸ91　ＳＡ80
ＰＬ21　ＳＫ89　Ⅶ郭下層
ＰＬ22　Ⅷ郭全景
ＰＬ23　ＳＸ93
ＰＬ24　蔵骨器出土状ＳＸ93　Ⅷ郭流出状況
ＰＬ25　ＳＸ97　ＳＤ95・ＳＸ96
ＰＬ26　Ⅹ郭全景　ＳＤ99埋土状況
ＰＬ27　ＳＡ98　ＳＤ100
ＰＬ28　ＳＤ100　ＳＤ100埋土状況
ＰＬ29　ＳＸ101　ＳＸ102・103・104
ＰＬ30　Ⅰ・Ⅱ～Ⅵ郭遺物
ＰＬ31　Ⅱ～Ⅵ・Ⅶ郭遺物
ＰＬ32　Ⅶ郭遺物
ＰＬ33　Ⅶ郭遺物
ＰＬ34　Ⅶ郭遺物
ＰＬ35　Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ郭遺物
ＰＬ36　Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ郭遺物
ＰＬ37　Ⅵ・Ⅶ郭遺物
ＰＬ38　Ⅸ郭遺物

挿　　図・表

第１図　地区割図
第２図　遺跡位置図
第３図　遺跡地形図
第４図　郭配置図
第５図　Ⅰ郭遺構配置図
第６図　ＳＸ１・13・14実測図
第７図　ＳＸ３・11・12実測図
第８図　Ⅰ郭出土遺物実測図
第９図　Ⅱ～Ⅵ郭遺構全体図
第10図　ＳＢ23実測図
第11図　ＳＫ26実測図
第12図　ＳＸ25実測図
第13図　ＳＸ41実測図
第14図　ＳＸ18・31実測図
第15図　Ⅱ～Ⅵ郭出土遺物実測図
第16図　Ⅶ郭遺構配置図
第17図　ＳＢ66実測図
第18図　ＳＥ48実測図
第19図　ＳＥ42・ＳＸ43・44・45実測図
第20図　ＳＥ42・ＳＸ43・44・45実測図（その２）
第21図　ＳＸ65・ＳＥ82実測図
第22図　ＳＢ51実測図
第23図　ＳＸ59実測図
第24図　ＳＸ58実測図
第25図　ＳＸ73実測図
第26図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その１）
第27図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その２）
第28図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その３）
第29図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その４）
第30図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その５）
第31図　ＳＥ82木枠実測図
第32図　Ⅷ・Ⅸ郭遺構配置図
第33図　ＳＸ93実測図
第34図　ＳＸ97実測図
第35図　Ⅷ郭出土遺物実測図
第36図　Ⅸ郭出土遺物実測図
第37図　Ⅹ郭遺構配置図
第38図　ＳＸ102実測図
第39図　ＳＸ103・104実測図
第40図　Ⅹ郭・Ⅹ郭以南出土遺物実測図
第41図　中世末期の北勢と保内
表　遺物一覧表

Ⅰ　前　　言

1．調査に至る経過

員弁郡大安町のほぼ中央部北寄りに位置する「丹生川上城」は、近世の地誌類に散見されてはいたが、その明確な所在地については全く不明であった。このため、昭和49・50年度に実施された県下の中世城館の分布調査においても、所在地不明の城館としてその報告書に記載されているにすぎない。

昭和57年度の県下の各種公共事業の照会に対し、県土木部道路建設課より、国道306号の改良工事計画の回答があったのは、同年4月10日であった。そこで、事業地内の埋蔵文化財の有無について、既刊の遺跡地図及び遺跡台帳等と照会したが、周知の遺跡は確認出来ず、この旨を文化課より道路建設課へ通知したのであった。

しかし、工事が開始された8月に入り、三重県文化財調査員である田中欣治氏より、工事路線地内に城館跡のあることが報告された。これが、丹生川上城の発見であった。早速、現地を確認するとともに、8月16日、県文化課と桑名土木事務所北勢出張所との間で協議がもたれることになった。

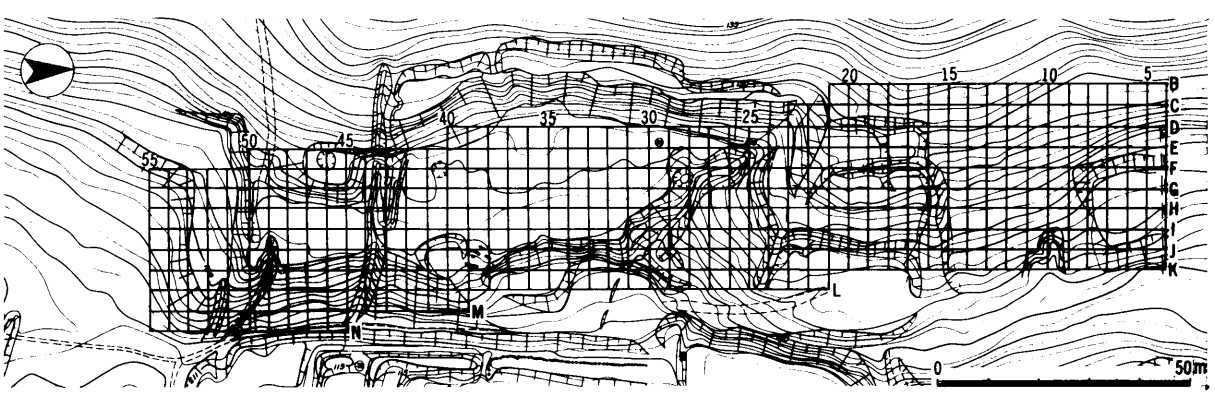
現地は、標高120m前後の丘陵の山林で、幅約35m、南北約200mに亘って縦断する形で道路計画がなされており、未だ伐開は終っておらず、各所に幅2m、高さ1.5m程度の土塁が走り、明らかに城館の郭の一部が数個所認められるとともに、五輪塔の一部も散乱していた。路線外にも広がる相当大規模な城館であることが確認され、地誌類に記された丹生川上の「古城跡」とほぼ断定し得るものであった。

当該地域の工事は、翌58年度以降の着手予定であったが、南北両側は既に工事が実施されており、路線変更による現状保存は不可能であった。そこで、協議の結果、発掘調査を58年度以降に県土木部から調査事業の執行委任をうけて、県文化課が行うこととなった。

昭和57年11月、県土木部より文化庁長官への発掘通知が出されるとともに、その後も文化課との間で幾度も協議がもたれた。そして、本格的に現地での発掘調査を開始したのは、昭和58年9月8日であった。調査は58年度2,800㎡、翌59年度4,000㎡とあわせて6,800㎡に亘って実施した。

2．調査の方法と経過

計画道路の中心線を基準とし、4m×4mのグリッドを設定した。そして、南北方向に北から数字を東西方向に西からアルファベットの記号を与え、北西杭をもってグリッド名とした。調査地は幅35m、延長200mと狭長であり、そのうえ、路線の両側が山林であり、排土も路線内にしなければならなかったため、4区にわけて実施した。4区とは18．26．44．55の各ラインであり、50ライン以南を除き、各地区、南から北へ作業を進め、北へ排土した。



第1図　地区割図　　（1：1500）

調査日誌（抄）

1983年

9・8　地形測量開始。受注業者長崎建設より杭等の説明。
9・9　同上。（長崎建設、倒木の整理を始める。）
9・12　午前中小雨、町事業課・教委へ挨拶。午後測量継続。
9・13　同上（菰野町教委神田氏応援）。プレハブ設置。
9・14　午前、津分室より器材搬入。午後、遺跡遠景撮影。
9・19　作業開始（25名）。ベルコン搬入（8台）。
9・20　雨天のため作事中止。
9・21　会議のため現場中止。
9・22　雨天のため作業中止。午後、地区杭打ち。
（以後、台風の影響等で雨天続き、作業出来ず）
9・29　18ライン50cm南より北へ向って発掘作業開始。
10・1　17ライン継続。ＳＫ26検出。発掘ニュース①刊
1・3　同上、ＳＸ31検出。
10・5　16ラインへ、ＳＸ25検出。
10・6　同上、ＳＫ27直上で山茶椀完形出土。
10・7　ストのため午前中止。
10・8　雨天のため作業中止。町教委、小学校を回る。
10・11　台風一過風強し。ＳＡ21内側ほぼ完了。
10・12　土木監査のため現場中止。
10・13　同上
10・14　ＳＡ21内側了
10・15　同内側清掃。午後雨、作業中止。間竿等発注。
10・17　同清掃後写真撮影。ＳＤ22掘下げ。ＳＸ31実測。
10・18　ＳＡ21内側遺構掘り下げ。ＳＸ31からは山茶椀・土師器皿等。中世墓か。15Ｄ西の石の下から白磁小壺。
10・19　同内側遺構掘り下げほぼ了。ＳＸ31断面等了。ＳＸ18撮影実測。午雨、作業中止。
10・20　15ライン掘り下げ。ＳＫ26実測。菰野町教委来跡。
10・21　大山田実測のため現場中止
10・22　ＳＡ21内側、Ｈライン以東掘り下げ開始。
10・24　同上
10・25　同上。17Ｈ地山直上にて刀子出土。
10・26　同上（Ⅴ郭）、ＳＡ21北セクション実測。大安町教委、町史編纂室、事業課来跡。
10・27　同区、13ライン西方にトレンチ２ヶ所設定。
10・28　重機により11ラインとⅠラインにトレンチを入れる。
10・29　トレンチ清掃。
10・31　同上。Ⅰ郭へ地区杭を打つ。６ラインにトレンチ
11・1　Ⅰ郭掘り下げ開始。６ライン東方へもトレンチ。
11・2　同上。
11・4　係会議のため現場休み
11・5　Ⅰ郭掘り下げ継続。ＳＸ１・２・３など検出。
11・7　ＳＸ４検出、中世墓と考えられる。
11・8　Ｅラインを掘り下げ。
11・9　同了。Ｆライン掘り下げ。
11・10　Ⅰ郭平坦面に入る。ＳＸ３写真撮影。
11・11　Ｈラインまで表土除去。
11・14　ＳＸ12・13・14などを検出。
11・15　Ⅰラインまで表土除去。ＳＸ２・３平面実測。
11・16　ＳＸ12出土状況平面実測。
11・17　18ライン以北平板測量。18ライン以南草刈り。ＳＸ11検出。ＳＸ３・12立面実測。
11・18　18ライン以南調査前地形測量。ＳＸ11出土状況実測。ＳＸ３掘り下げ。
11・19　Ⅰ郭清掃。写真撮影。18ライン以南地区杭打ち
11・21　現場休み。
11・22　18ライン以南掘り始める。Ⅶ郭調査前地形測量。
11・24　同上。ＳＸ２立面、ＳＸ13平面実測。
11・25　同上。Ⅰ郭北端平板測量。午後雨のため作業中止。
11・26　同上。ＳＸ３出土状況平面立面、ＳＸ13平面実測。
11・28　鈴鹿山脈冠雪。同上。ＳＸ２・ＳＸ13立面、ＳＫ１平面実測。
11・29　ＳＸ２石取り外し。ＳＸ１平面立面実測。
11・30　雨のため作業中止。
12・1　午前中雨のため中止。午後Ⅰ郭セクション帯除去。
12・2　ＳＸ１立面了。Ⅰ郭土木へ引渡す。ＳＢ23検出。
12・3　Ⅲ郭掘り下げ継続。ＳＸ25検出。
12・5　Ⅲ郭清掃。ＳＸ24検出。
12・6　Ⅵ郭掘り下げ。
12・7　同上。ＳＸ41検出（梵字を刻んだ地輪出土）
12・8　Ⅵ郭、ＳＸ41清掃。Ⅵ郭掘り下げ。
12・9　埋文担当者会議のため現場休み。参会者当地見学。
12・10　ＳＸ41付近掘り下げ。Ⅳ郭掘り下げ継続。
12・12　雨のため作業中止。藤原岳が白い。寒い。町教委へ。
12・13　Ⅴ郭掘り下げ。ＳＸ24・41清掃。写真撮影。
12・14　同上。ＳＸ41平面実測。
12・15　同上。ＳＤ22南清掃。
12・16　Ⅴ郭清掃。午後雨のため作業中止。
12・17　ＳＡ35検出。ベルコン・発電機搬出。
12・19　Ⅱ～Ⅵ郭全体清掃、写真撮影。ＳＸ41立面了。器材プレハブへ撤収。作業員投入は本日で一応了。
12・20　雪ひどく実測中止。間竿を作る。
12・21　係会議。
12・22　みぞれ。ＳＸ24平面立面実測了。現説資料作成。
12・23　みぞれ。ＳＸ41掘り下げ。
12・24　トラバース組み。
12・26　Ⅲ・Ⅴ郭平面了。18ラインセクション帯より銭貨。
12・27　霜柱すごい。平板測量。

1984年

1・5　雪かなり降る。ＳＸ25平面実測。
1・6　ＳＸ25断面見通し実測了、
1・7　午後２時より現地説明会。約85名の参加を得る。調査終了部分まで土木に引渡し。
1・9　調査区外に出ていたものの戻し。遺構ダメ押し。ＳＡ21セクション帯よりさらに銭貨出土。記念撮影。
3・5　調査前地形測量南から開始。北勢出張所長来跡。
3・7　出張所より、調査は北側から行なってほしいとの事。
3・8　平板測量継続。ただし春雷によりしばしば中断。
3・9　ＤＰ７～８間平板測量了。
3・12　長崎建設に早い内に北側掘削を依頼。
3・26　現場再開。キンキレンタル、ベルコン搬入遅れ作業出来ず。
3・28　ベルコンセット。倒木撤去。地区杭設定。午後３時Ⅶ郭南西端より表土除去開始。排土搬出法未確定。
3・30　春らしい日和。ウグイスの声。排土はキャリヤーで。
4・11　再開。本年度担当久志本。
4・12　ベルコン４台増設。全12台となり壮観。
4・13　ＳＢ51の礎石検出始まる。
4・14　同上。礎石さらに検出。
4・16　雨天のため中止。
4・17　埋文担当者会議のため中止。
4・18　ＳＢ51の礎石さらに検出。プレハブを移転。
4・19　雨のため10時で中止。
4・20　会議のため現場休み。
4・21　表土除去はⅦ郭北端まで進む（ただし西半のみ）
4・23　とても暖かい。ＳＸ49検出。
4・24。25　同上。
4・26　33Ｅ付近に焼土、Ⅶ郭北斜面の土判りにくい。
4・27　Ⅶ郭については二時期を想定しなくてはならない。
4・28　朝、山中に野猿。ＳＢ51の北辺、北斜面判りにくい。
5・1　雨天のため中止
5・2　山の新緑が美しい。Ｇライン以東の表土除去開始。ＳＢ51の東廂？検出。同東辺にて基壇状立ち上がりを検出せんとするも能わず。

5・4　36ライン東西セクション実測。
5・7　終日ブト（虫）に悩まされる。40E付近の掘り下げ。
5・8　SX57付近表土除去。SD62検出。
5・9　SE82への流入土除去。表土除去はIライン付近。
5・10　小玉係長視察。41DにSD検出。
5・11　SX53以北不可解。36ラインセクション除去。
5・12　ベルコンHラインへ移動。大安町史編纂委員来跡。
　　SD64の掘り上げ開始。大安町教委来跡。
5・14　昨夜の雨のため。36ライン以北の表土除去など。
5・15　雨のため作業中止。
5・16　雨のため作業中断。菰野町・四日市市教委来跡。
5・17　SD64・SE82付近に集中。SD64より火輪（大）
　　2基出土。SE82木枠井戸検出。SD83検出。
5・18、19　同上。
5・22　セミの声を聞く。SE82付近写真撮影。
5・23　SD84西端より掘り上げ始める。SD64東端継続。
5・24　SX59表土除去。SD64切り上げる。
5・25　SD84中断する。36ライン以南清掃。
5・26　現場休み。
5・28　SE84付近遣り方設定。36ライン以北検出作業。
5・29　SE82付近実測開始。
5・30　SB51清掃。SE48掘り始める。
5・31　Ⅶ郭清掃了。
6・1　ベルコンをⅦ郭東斜面下へ降す。SB51写真撮影。
6・4　東除面の表土除去。
6・5　SX58確認、同東斜面で灰原検出。
6・6　SB51平面実測。Ⅶ郭東斜面継続。
6・7　同上
6・8　雨のため中止
6・9　雨のため現説中止、されど12名来跡。
6・11　SD46掘り下げ。
6・12　東斜面、SX59南北に集中。SB51平面了。SX58
　　実測開始。
6・13　東斜面継続。田中欣二氏来跡。社会科サークル来跡。
6・14　セスナによる空撮。
6・16　午後現地説明会（約40名）
6・18　SX59平面実測開始。石槫小生徒約70名見学。
6・19　SX43検出。SX59平面了。SB51・58写真撮影。
6・28　Ⅶ郭南半平板測量。SE42、SX43、44・45確認。
　　SB51の西限確認のため、調査区外へトレンチ。
6・30　SD46、SE42付近に集中。
7・2　同上。
7・3　SB51西限確認。SX59立面了。
7・4　SD46、SE42付の続行。
7・5　SE42付近一応終了。
7・6　ベルコンを再びⅦ郭上へ引き上げる。
7・9　Ⅶ郭下層にかかる。Eライン付近にトレンチ。
7・10　36ラインのトレンチ下げ始める。SK79検出。
7・11　SE42付近、SX59写真撮影。地歴サークル来跡。
7・12　下層継続。
　　（この間雨のため中止）
7・18　Ⅶ郭上層北半平板測量。
7・19　SB51下層掘り下げ開始。39ライン以南地山明瞭。
7・20　やはり地山以外の地で遺構検出は困難。
7・21　雨のため中断。
7・23　ベルコンGラインまで移動。SE42付近実測開始。
7・24　雨のため中断。
7・25　下層掘り下げ継続。
7・26　SD84、堀の可能性が強まる。SX73検出。
7・27　埋文展準備のため午後休みとする。
7・28　39ライン以南、Gライン以西で遺構検出に努める。
7・30　同上。本日より稲垣加わる。
7・31　同上。SX65より石仏出土。菰野町佐々木氏来跡。
8・1　同上。36ライントレンチ下げる。調査区西壁実測。
8・2　Gライン以西ほぼ了。
8・4　40F付近次第に明らかになる。
8・6　SK89・SX69・SA80検出。
8・7　36ライン以南メドがつく。SD67検出。東藤原小6
　　年生20余名来跡。
8・8　40ライン以南了。36ライン以南もほぼ了。西壁図了。
8・9　SE42、SX43立面。36ライン以北にかかる。
8・11　同上。SX49付近掘り下げ。
8・13　同上。
　　（盆休み）
8・17　SB66検出。東半は成果乏し。南セクション実測。
8・18　南セクション（40ライン）除去。
8・20　同上。北トレンチ、中央トレンチセクション実測。
8・21　係会議のため休み。
8・22　小雨。南平坦面の草刈り。SB51南北トレ掘り下げ。
8・23　南平坦面に東西2本のトレンチを入れる。2×25m
　　SD84東端まで追う。南北トレ了。SX47・63・73
　　平面。南北セクション実測
8・24　SD85検出。SE48立面。SX73除去。南トレ継続。
8・25　SE48掘り方掘り上げ。Ⅶ郭肩口サブトレ3本。
8・27　南北セクション除去。北トレンチ埋戻し。
8・28　Ⅸ郭へベルコン移動。Ⅶ郭清掃。SX59石の地区外
　　への移動。SD85を追う。東地区外からの戻し。
8・29　Ⅶ部下層遺構の撮影。南平坦面試掘トレ継続中。
8・30　西地区外からの戻し。テント移動。SD85掘了。
8・31　Ⅷ・Ⅸ郭調査前撮影。Ⅶ郭下層平板測量。
9・1　南平坦面トレンチ掘り下げ。
9・3　同上。発電機の移動。地区杭打ち。Ⅶ郭引渡し。
9・4　Ⅷ郭へベルコン設置、表土除去。SX93検出。
9・5　同上。Ⅷ郭の流出土除去。
9・6　同上。SX93より骨壺3点出土。内1点は完形。
9・7　同上。
9・8　雨のため中止。
9・10　SX93冠水。Ⅸ郭のみ継続。
9・11　同上。
9・1　Ⅷ郭ほぼ了。
9・13　Ⅸ郭作業継続。東北トレンチ掘り下げ開始。
9・14　Ⅸ郭東半表土除去。SX93南北セクション実測。
9・17　SX93東半掘り上げる。SX93西辺石列出ず。
9・18　雨のため現場中止。
9・19　Ⅹ郭表土除去。Ⅸ郭東半継続。SD95埋土除去。
9・20　同上。
9・21　係会議のため現場中止。
9・22　Ⅷ郭了。Ⅹ郭了。
9・25　Ⅹ郭東方表土除去。Ⅷ郭流出土セクション実測。
9・26　ベルコンをⅨ郭東斜面へ移動。Ⅷ・Ⅸ郭清掃。
9・27　Ⅸ郭東斜面表土除去。Ⅷ郭の遺構撮影。
9・28　埋文会議のため現場休み。
9・29　Ⅸ郭東斜面継続。SD100かなり深い。Ⅶ郭実測準備。
10・1　同上。SX93実測開始。
10・2　東斜面表土除去ほぼ了。東西トレンチを下げ始める。
10・3　Ⅸ郭再度遺構検出を試みる。整地土の境明瞭。
10・4　Ⅸ郭了。SD100セクション実測。礎石、神社へ搬出。
10・5　Ⅸ郭東斜面了。ただし東西セクションは残る。
10・6　ベルコン移動。南へ排土。Ⅹ郭以南表土除去。
10・8　同上。土木、本工事にかかる。
10・9　SX103検出。Ⅹ郭南北セクションを下げ始める。
10・11　同上。Ⅸ郭東斜面にSX97検出。
10・12　同上。南北セクション実測。
10・13　同上。
10・15　55ラインまでほぼ了。発電機撤去。
10・16　ベルコン搬出。SX93立面実測開始。
10・17　雨（1ヶ月ぶり）のため作業中止。
10・18日　遺構検出作業仕上げを行なう。
10・19　仕上げ了。テント、道具類撤去。（以下略）

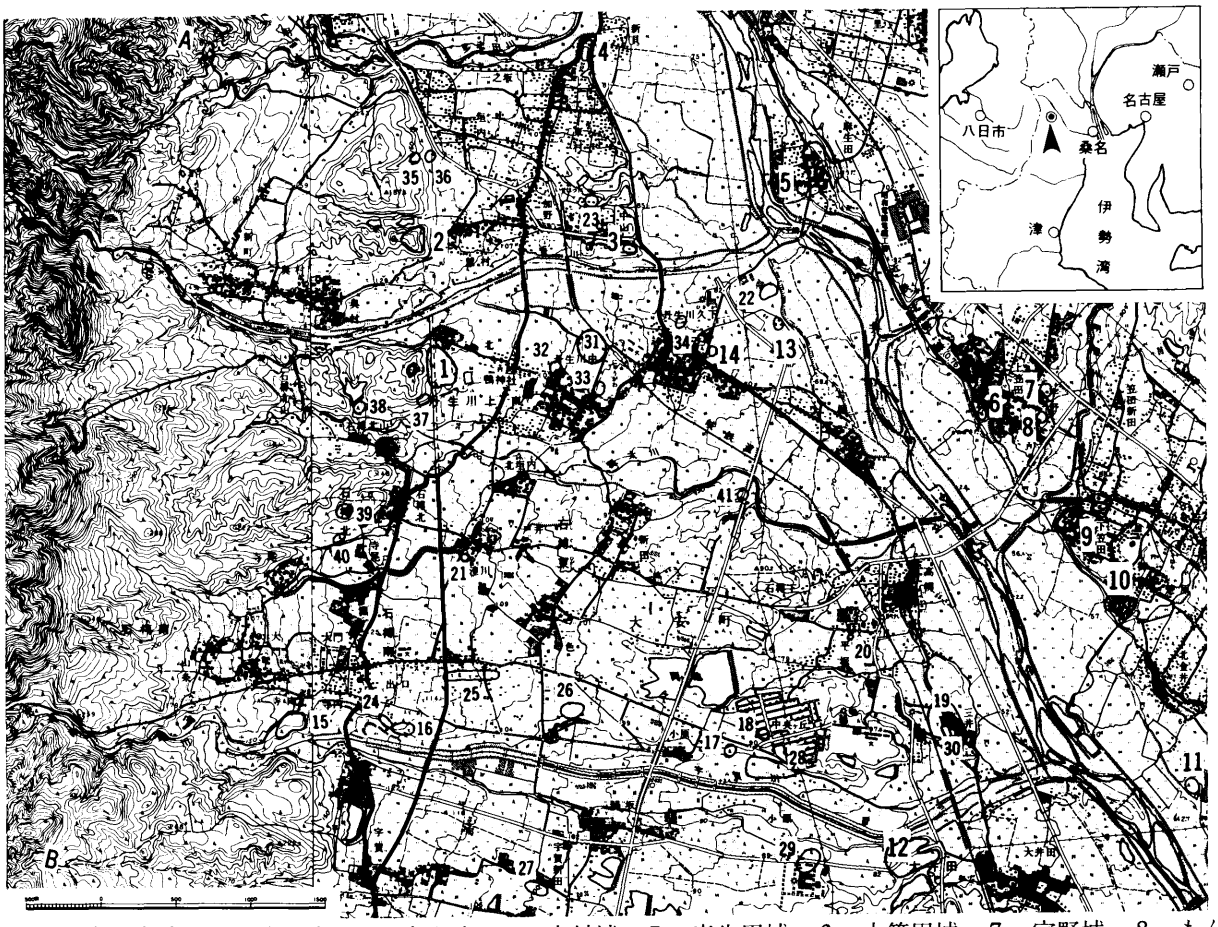
Ⅱ　位置と歴史的環境

1．地　形

丹生川上城は員弁郡大安町大字丹生川上字正法寺に位置している。同郡は三重県最北の郡であり、北は養老山地をはさんで岐阜県と、西は鈴鹿山脈をはさんで滋賀県と接している。郡内を員弁川が東南流し、大安町はその中流右岸を占める。第2図を見てわかるように、同町の主要部分は、員弁川の氾濫原と鈴鹿山麓の間に広がる丘陵地であり、雨水は伏流する傾向にある。同郡の中世城館の多くは、員弁川に臨む段丘上に位置しているが（3～13)、丹生川上城（1）や治田(はった)城（2）などは鈴鹿山脈東麓の丘陵に位置している[1]。丘陵東縁に見られる直線的な地形は麓(ふもと)村断層であり、巨視的にはA－Bを主軸とする一志断層系に包摂されるべきものである[2]。本遺跡のある正法寺山においても今回の調査部分付近から急激に高まる地形は、この断層によるものであろう。したがって段丘の代りに断層地形を利用した立地ということができる。

2．原始・古代

この地域の歴史は縄文早期にさかのぼる。照光寺[3](15)・野々田[4](16)といった県下でも著名かつ良好な縄文遺跡を有し、他に下小原[5](17)・中大野[6](18)・下松崎[7](19)・三里村[8](20)・湟川(はりかわ)[9](21)・宮山[10](22)・中山[11](23)などが知られる。当時としてはかなりの人口を擁していたと思われる。同地域は間近に鈴鹿連山を仰ぎ、中央高地の景観にも相通じて



1．丹生川上城　2．治田城　3．中山城　4．東村城　5．麻生田城　6．上笠田城　7．宇野城　8．もんのしろ館　9．下笠田城　10．御薗城　11．金井城　12．大井田城　13．大久保城　14．野田丸城　15～23　縄文時代の遺跡　24～30　古墳群　31～41　中世の遺跡

第2図　遺跡位置図　　（1：50,000；国土地理院）

おり、縄文人が物心両面において好んだ生活の場であったと言えよう。続く弥生時代には、ほとんど見るべきものがない。おそらくその理由は、先に述べた水利によるのであろう。ようやく古墳時代後期に入り、野々田（24）・南林[12]（25）・上小原（26）・宇賀新田（27）・下小原（28）・大辻（29）・尼ヶ谷（30）などの古墳群が形成される。個々は小規模ながら、宇賀川流域に集中している事は注意を払うべきであろう。同川流域に育った一定の勢力の存在を認めないわけにはいかない。

ところで、この地方の記録上の初見は『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』[13]（747年進上）である。それによると、天武2年（673）造寺司を任命し、百済大寺を高市の地に移すとともに、墾田地932町を同寺に施入している。[14]その中に「員弁郡宿野原伍百町開田卅町未開田四百七十町」と見える。[15]宿野原という地名は現在残っていないが、「東鴨社、南坂河、西山、北丹生川」という四至から、現在の丹生川上を比定する事が妥当であろう。[16]続いて天平16年（744）、同郷「阿刀野百町」が施入される。[17]この地名も現在残っていないが、「東百姓墾田御井、南武賀河、西高山、北阿胡登山道」という四至から、宇賀川左岸地域を比定することが妥当であろう。[18]すなわち、先に古墳群築造勢力を想定した宇賀川筋の大安寺領化は、宿野原（丹生川）に対して遅れたというふうに解釈する事もできよう。(このように文字史料の初現において、同地域がひとしく大安寺領であった事から、戦後の町村合併時に大安町の名が採択されたのであった)。

ところで、宿野原施入が大官大寺（後の大安寺）造営とかかわったように、阿刀野施入の年、笠間郷（現大安町南部）猪名部美久の戸口、猪名部真人を優婆塞として造仏所に貢上する事が正倉院文書に見える。前年の大仏建立の詔勅を受けての事であった。

応神紀初見以降、一貫して木工を職掌とした猪名部であってみれば、大官大寺造営の際にも動員された事は十分考えられよう。

3．古代から中世へ

その後猪名部氏は、『続日本後紀』の撰者春澄（本姓猪名部造）善縄、その女で才女の誉れ高い春澄高子（洽子）を出すに至る。[19]さらに『吾妻鏡』に見える員部大領家綱、[20]その息員弁郡司進士行綱は、[21]猪名部氏の末裔と考えられる。以後同氏は史上から姿を消す。

一方員弁郡は、天慶3年（940）、神三郡以外では最も早く神郡化されていたが、[22]その後律令制の衰退に伴って多くの神宮領荘園が生れる。14世紀後半に成立したと考えられる『神鳳鈔』は、この地域の神宮領として、丹生河（180丁）・大井田（20丁）・石榑（50丁）・片火（8丁）・宇賀（10丁）・高柳（24丁）などの内宮御厨を挙げている。今我々が問題にしている丹生川は、規模の大きな御厨であった事がわかる。

4．中　世

式内鴨神社（旧丹生川郷社）は、その頃の古文書を伝えている。[23]第一の文書[24]（1346年）からわかることは、由貴御膳所としての丹生河御厨に対し、濫妨無道をはたらく勢力の存在である。先の員部大領家綱の場合も地頭眼代の狼籍に対する訴えであったが、中世においてはこうした土地領有をめぐるトラブルはこの地方においても少なからず生じていた事が知られる。第二の文書[25]（1364年）に見える高岡山正法寺は、まさに今回調査した丹生川上城付近を指すものと考えられ、御祈願所となっており、仏殿・法堂・庫裏・僧堂を備え、円満僧員10余名が止住していた事が知られる。第三の文書[26]（1369年）は檀溪上人宛の片火村（現片樋）の知行に関する綸旨であり、第一の文書に見られたトラブルがなお尾を引いている事を想像せしめる。檀溪上人は『本朝高僧伝』[27]によると「勢の正法寺ヲ開ク」とあり、また『東福寺誌』[28]によると文中3年（1374）8月8日の条に「東福三十七世檀溪心涼、伊勢鶏足山正法寺に示寂す」と見出しを掲げ、引く所の『檀溪和尚伝』には「応安7年八月八日滅、塔院在勢安国曰長慶　在正法曰鶏足。又曰勢州丹生河高岡山正法寺ハ師入定処也」とある。第四の文書[29]（1372年）は、高岡山の塔頭の別当職に関する南朝からの沙汰である。この文書の2年後に檀溪心涼は入滅するわけである。

檀溪心涼の師は、『元亨釈書』の著を持つ学僧虎関師錬（東福寺15世住持）である。同師は元弘2年(1332)以前に、後に伊勢安国寺（現四日市市西日野町）と

なる本覚寺を開いている。[30] また『沙石集』の著で知られ、東福寺とも浅からぬ関係にあった無住道暁は、長らく長母寺（現名古屋市矢田町）にいたが、[31] 延慶元年（1308）頃より桑名の蓮華寺に住し、正和元年（1312）その地で没する。[32] つまり年代的に見るならば、無住の後を受けて虎関が、さらに弟子檀溪がというように、東福寺派の高僧が継続的に北勢に住した事が知られる。したがって、正法寺を理解するためには東福寺と北勢、[33] あるいは室町期に入ってからは、幕府の保護するいわば官学としての臨済宗、あるいは古代の国分寺にも擬せらるべき安国寺構想といった視点、枠組が必要であろう。

以上述べてきたように、今回調査した遺跡は、その小字名（正法寺）の如く、中世寺院としての蓋然性が濃厚である。地域伝承も同様であり、[34] 城館としてのそれは稀薄といわねばならない。この点については結語で再びふれたいと思う。さらに当山にまつわる金鶏伝説[35]であるが、それは他に多くの類例があり、[36] 別途考究されるべきものであるが、[37] 当山の別号鶏足山（本来釈尊十大弟子の一摩訶迦葉入定の地に因む）は、先行する伝説からアナロジカルに派生したものと考えられる。

同時代の他の遺跡としては、丹生川中（31）・下街途（32）・松ノ木（33）・野添（34）などが知られており、丹生川郷が他に比べて開けていた事がわかる。丹生川中遺跡は良好な遺跡である。寺院跡・墓地としては、興正寺廃跡（35）・法盛寺廃跡（36）・正法寺中世墓（37）・阿弥陀寺遺跡（38）・真光寺遺跡[38]（39）・細瀬古中世墓[39]（40）・経塚中世墓[40]（41）が知られており、当時の人々が集落背後の山中に他界を求めた事がわかる。

(註)

① 石榑北にも北城という字と伝承地が残る（石加神社付近）

② 太田陽子・寒川旭「鈴鹿山脈東麓地域の変位地形と第四紀地殻変動」『地理学評論』57－4　1984

③ 平岡容「照光寺遺跡の考察」『猪名部』41号　員弁高等学校郷土研究部　1951、篠木三郎「員弁郡石榑村照光寺西南遺跡出土遺物」『　同　』9号　1955

④ 岩野見司「石榑村の上代考」『猪名部』創刊号　1950　並河豊「野々田遺跡と遺物について」『　同　』4・5号　1951　『三重考古図録』三重県教育委員会　1954

⑤ 中川正秋「石榑村小原縄文式遺跡」『　同　』7号　1953

⑥ 江上辰男「石榑村中大野発見の磨製石斧」『　同　』6号1952

⑦ 田中欣治「三里村下松崎遺跡について」『　同　』5号　1951

⑧ 岩野見司「三里村縄文遺跡の研究」『　同　』4号　1951

⑨ 岩野見吾「伊勢国員弁郡石榑村湟川発見の石棒に就て」『同』8号　1954　堀川常三郎「員弁郡石榑村湟川発見の凹石」『　同』9号　1955

⑩ 田中欣治「丹生川村宮山遺跡調査報告」『　同　』4号　1951　岩野見吾「員弁郡丹生川村宮山遺跡発見石器」『　同　』9号　1955

⑪ 並河豊「治田村中山遺跡」『　同　』2・3号　1950　江上辰男「治田村中山遺跡新発見の石器」　二井弘「治田村中山遺跡発見の遺物」『　同　』6号　1952

⑫ 「南林第三号古墳調査概報」『　同　』9号　1955

⑬ 『群書類従』巻435

⑭ 天武即位年である。前年の壬申の乱の報賽か。

⑮ 他に、紀伊国170町・若狭国100町施入。伊勢国662町　内員弁郡宿野原500町は際立っている

⑯ 丹生川は現青川、山を正法寺山、坂河を現源太川に比定するのが通説であるが、その場合500町は到底不可能な数字である。当時の鴨神社の位置を片樋の大神社付近に求めるか、山を鈴鹿山脈とする他ない。後者の場合、後述する阿刀野の四至西「高山」という用語の別が意味をもたなくなる。

⑰ 同年施入墾田地全994町、内伊勢国は664町を占める。

⑱ 武賀川を現宇賀川、高山を鈴鹿山脈、御井を三井に比定する。阿胡登山道は不明である。

⑲ 『三代実録』巻17（貞観12年2月）他

⑳ 文治3年（1187）6月、10月、文治5年（1189）7月

㉑ 建仁3年（1203）12月、元久元年（1204）2月、5月

㉒ 『神宮雑例集』巻一

㉓ 佐藤哲英編『丹生川の歴史と学校のあゆみ』丹生川小学校1976

㉔ 伊勢国員弁郡丹生河御厨内片火」村雑掌実然申、頼光并奥次郎」光員所致造沙汰掠申守護方上下」致濫妨事申状如此、子細見状也」当所者自往古以来為内宮六月十二日」御祭由貴御膳所□無外方之□之」処光員等濫妨之条、太無道也。早停止」其妨、任先例可専神税上分勤之由致沙汰」□子細□為触申守護方被注進」由依内三位長官仰執達如件」貞和二年九月十二日権祢宜俊憲奉」尾崎福寿大夫殿

㉕ 伊勢国高岡山正法寺雑掌」道円申御祈願所事。絵図」如此。仏殿法堂庫裏僧」堂以下円満僧員十余人」止住之候所申無相違否哉」起請之詞可被注申之状依仰」執達如件」貞治三年二月五日日、沙弥在判」土岐大膳大夫入道殿

㉖ 伊勢国丹生河御厨」内片火村知行。不可」有相違。者」天気如此。仍執達」如件」。応安二年七月十一日、左少弁（花押）壇溪上人御坊」

㉗ 『大日本仏教全書』(1931) 所収

㉘ 1930年刊、いわば東福寺の正史である。

㉙ たかをかでらのさんかじの」べとうしきの事、もとの御け」いやくにまかせて、ことしより」ふせられ候。こうりうのさたを」いたして、ちぎゃうをかれ候べき」よし、おほせ事さた候ぬ」けんとく三ねん三月廿四日（花押）

㉚ 『東福寺誌』

㉛ 下村信博「中世地方禅院に関する一考察、尾張長母寺を例として」『名古屋市博物館研究紀要』第5巻　1982

㉜ 『本朝高僧伝』 ただし長母寺で入定とする説もある。

㉝ 南勢方面では、安養寺（明和町上野）・光明寺（伊勢市岩淵）が拠点であった。特に前者は東福寺9世住持癡兀大慧を開山とする。

㉞ 例えば松宮周節（1787～1845）の『伊勢輯雑記』は、高岡山正法寺廃跡の他に阿弥陀寺廃跡、丹生山釈王寺廃跡、千堂野などを同地付近に挙げている。城については、古城跡として「正法寺ノ艮ノ麓ニ有、城主ヲ服部将監ト云（中略）日能大膳トモイヘリ」とする。桑名藩文政10年（1827）『御領分郷村案内帳』は「服部轢源屋敷但氏神神主屋敷」とも伝えている。

㉟ 三羽光次「金つぼ五つぼ」『三重県の民話』偕成社 1982（要旨）信長の軍にせめられて正法寺が滅びるとき、金銀財宝を五つの大きな壺に納め山中に埋めた。元日の早朝金鶏が鳴きその財宝の在りかを教えてくれる。その声を聞いた者はその年幸せに暮せるという。しかし、まだ誰も聞いた者はいない。

㊱ 『日本伝説名彙』(1971) に拠れば、多治見市・山県郡（岐阜）、岡崎市、久居市、粉河町・由良町（和歌山）、高槻市、亀岡市、福部村（鳥取）、伯太町（島根）と、近畿一円に分布している。

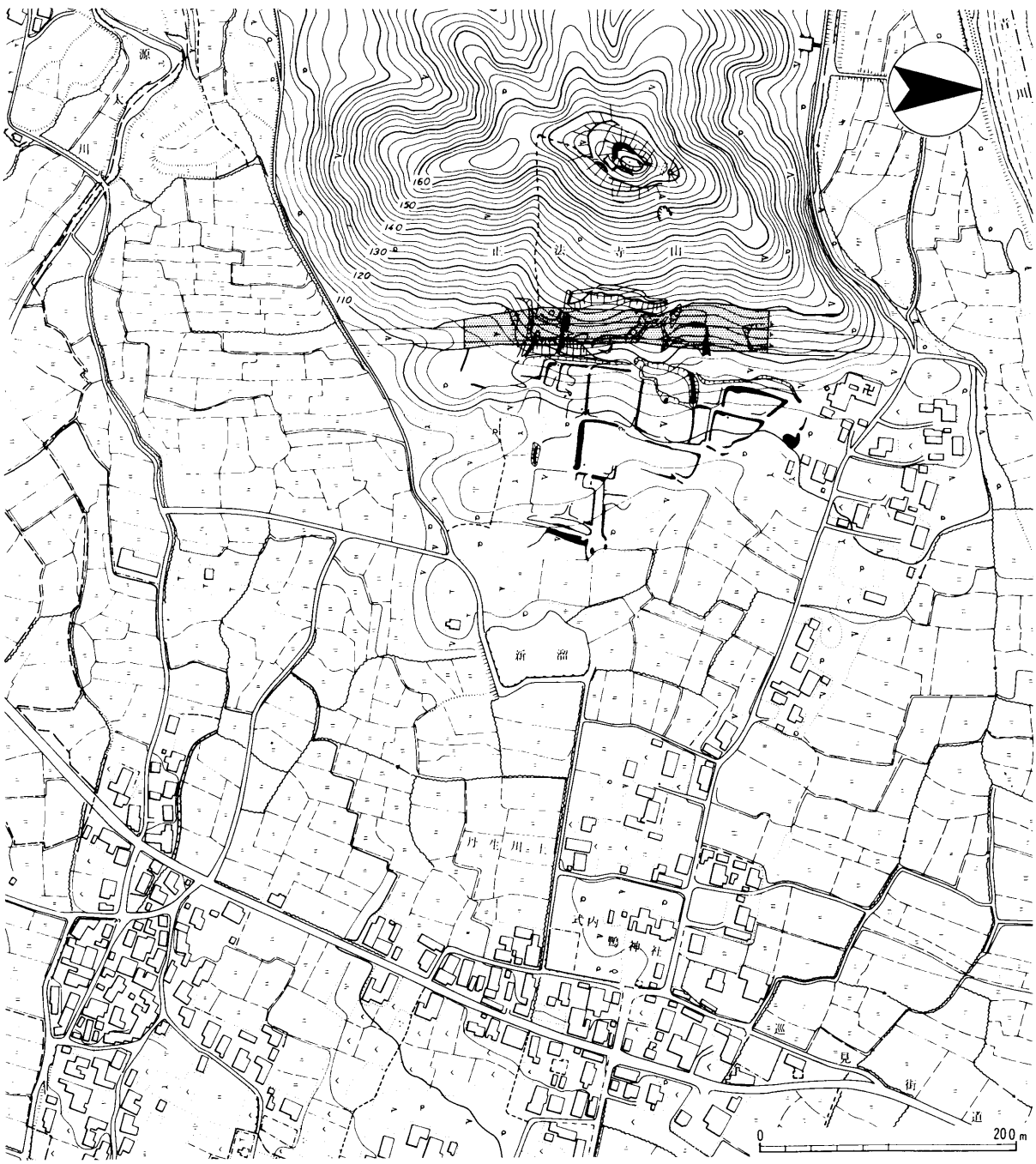
㊲ 例えば、『三国史記』『三国遺事』に記す新羅王室の始祖伝承、国号「鶏林」の由来説話にまで遡り得るだろう。

㊳ 平岡容「真光寺趾研究報告」『猪名部』2号 1950

㊴ 平岡容「真光寺跡研究報告その2」『猪名部』3号 1950

㊵ 1973年、三重県教育委員会発掘調査

㊶ その他、大門・寺内という小字を残した照光寺。さらに宇賀川上流に行仙寺、永源寺という小字がある。



第3図 遺跡地形図　　調査部分　　（1：5000）

Ⅲ　遺構と遺物

1．郭　構　造

本城跡は山麓の居館群と山頂(標高182ｍ)の詰城より成る。その比高は約70m、傾斜は30°に近い。居館群は今回調査部分と、それより10m程低い東部分とに分ける事ができる。今回調査した地区は、本城跡居館群の西の端であるが、最も奥まった場所であり、かつ一段高い場所である。すなわち重要な位置を占めていると考えることができる。さらに調査区はＳＤ46を境に、自然地形の多い北半と、人為的に削平された南半とに分けられる。北半はさらにⅠ郭とⅡ～Ⅵ郭に区分でき、南半はＳＤ64によってⅦ郭とⅧ・Ⅸ郭、ＳＡ98によってⅩ郭とに区分できる。本報告書の記述も以上の区分によった。調査区以東では、山に近い方が土墨等比較的立派である。また遺跡は東面しており、中央東に大手道と考えられる通路があるが、その延長は鴨神社南の道と重なり合う。新溜築造時に改変を受けた事が推察される。またＳＥ82から東に向って井戸が点々と造られており、おそらく水脈に沿って設けられたのであろう。

2．Ⅰ　郭

1．遺　構

Ⅰ郭は、居館群中最北西に位置する郭である。東向き斜面の西方を切り込み東側に橙褐色土を整地して形成された約14ｍ×12mの平坦地で土墨等は伴わない。調査前、郭の北端の一部は道路建設のため削り取られ、また上面も全体に攪乱を受けていた。そのため郭内の状況は不詳な点があるが、明らかにこの郭に伴う遺構としては、斜面上方に延びる階段（ＳＸ１）がある。その他、整地土（橙褐色土）下からＳＸ11・12・14などが検出され、郭外にもＳＸ３・４などがある。

(1) 階　段

ＳＸ１　郭北西から斜面上方に延びる石組の階段である。石材がかなり欠落しているが、主に長径40cm～50cmの川原石が使用され、幅約1.5mで現状で6段まで認められる。階段の両側面には外側に面をそろえて石が配され、その中に段がつくられている。段は１段の長さが0.8m前後、高低差0.4m前後である。

(2) 土　坑

ＳＫ５～10　いずれも不整形で規模の不明な土坑群で遺物の出土も全くない。整地土中で検出したＳＫ７・８・10と、整地土下で検出したＳＫ５・６・９とに分けられる。

(3) 中世墓ほか

ＳＸ２　Ⅰ郭上方の斜面で検出された集石である。川原石が約2.5m×2.0mの範囲で集められている。

ＳＸ３　Ⅰ郭南西側の斜面で検出された中世墓である。斜面につくられているため東側の石材が流失しているが、上部には、長径40～50cmの川原石が約1.8ｍ×1.1mの長方形に配されていた。配石の下には、約1.8m×1.4mの略方形の墓坑が掘られ、墓坑の東辺沿いに約1.4m×0.8mの長方形の棺跡が検出された。棺跡の長軸方向はほぼ磁北を指す。棺底は上部の配石から約0.8ｍの深さである。棺内部から副葬品として、棺北半中央で棺底に接して切先を南にむけた状態で刀子（８）が検出された。また、棺北半西壁に接して山茶椀２（６・７）が横位置で重なり合い、その両側に土師器皿２（４・５）が貼り付くような状態で検出された。おそらく、棺を使用し、頭を北に向けた埋葬が行われ、その上面に棺の位置を意識して長方形の石組が配されたものと考えられる。

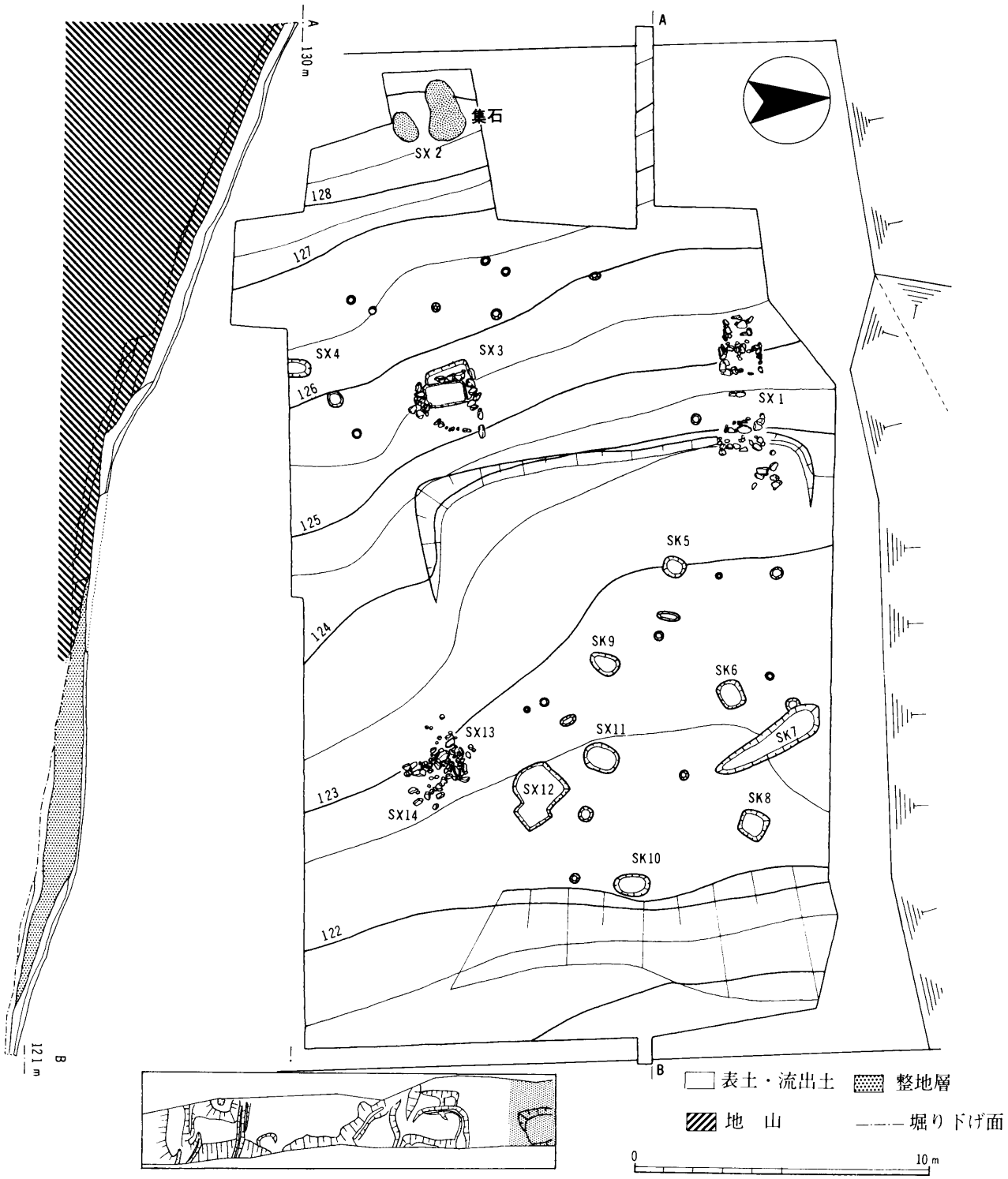
ＳＸ４　ＳＸ３の南側、調査区端で検出された幅約

第4図　郭配置図

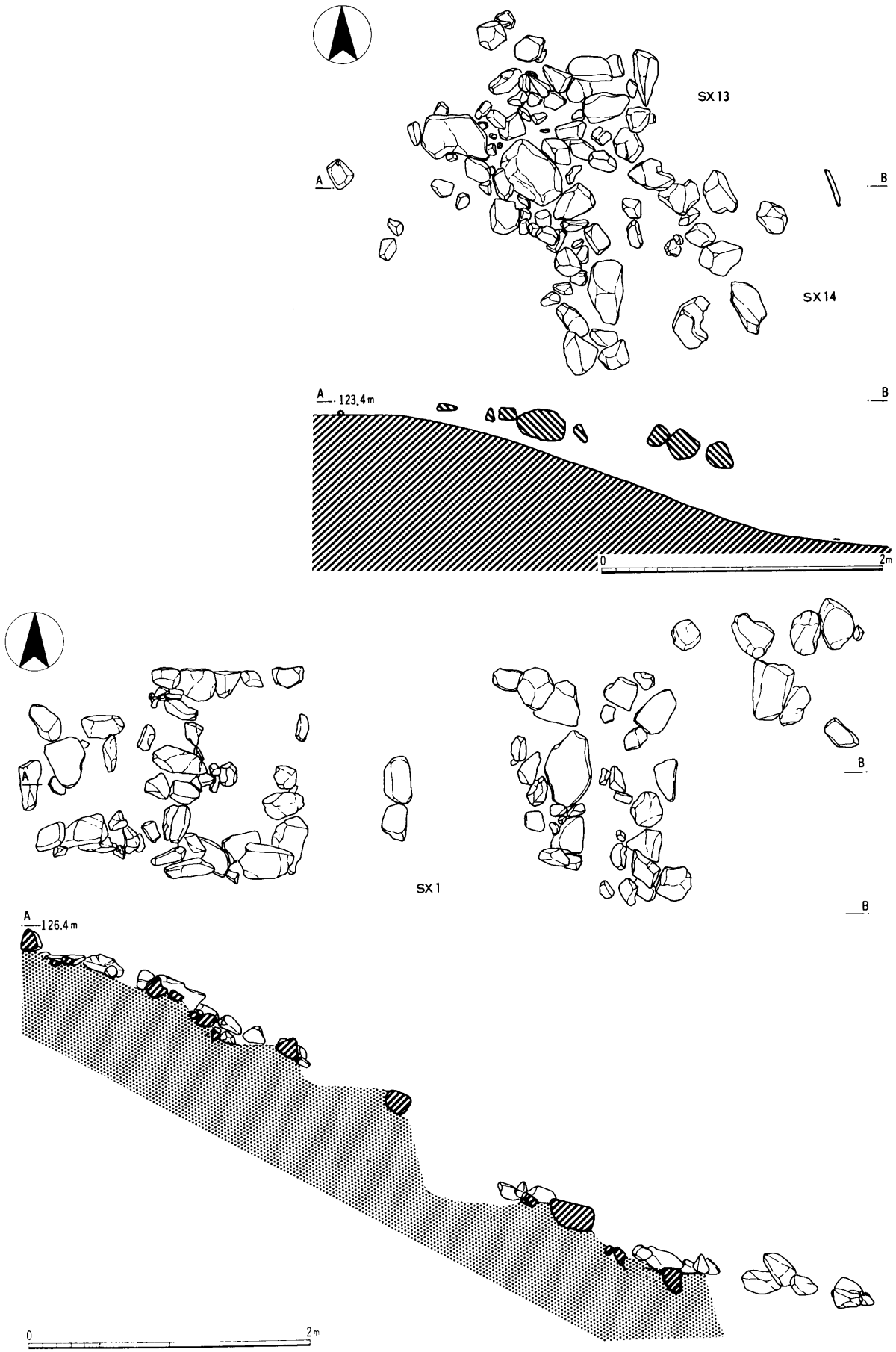
0.6m×長さ0.8m以上、深さ約0.4mの土坑である。内部より山茶椀1（12）、土師器皿3（9・10・11）が出土した。上部に配石を伴わないが、おそらく中世墓であろう。

SX11　Ⅰ郭中央南よりの整地土下で検出したものである。長さ約1.2m×幅約0.9m深さ約0.2mの楕円形の土坑である。土坑中央より山茶椀2（16・17）土師器皿片（13・14・15）が出土した。中世墓の可能性がある。

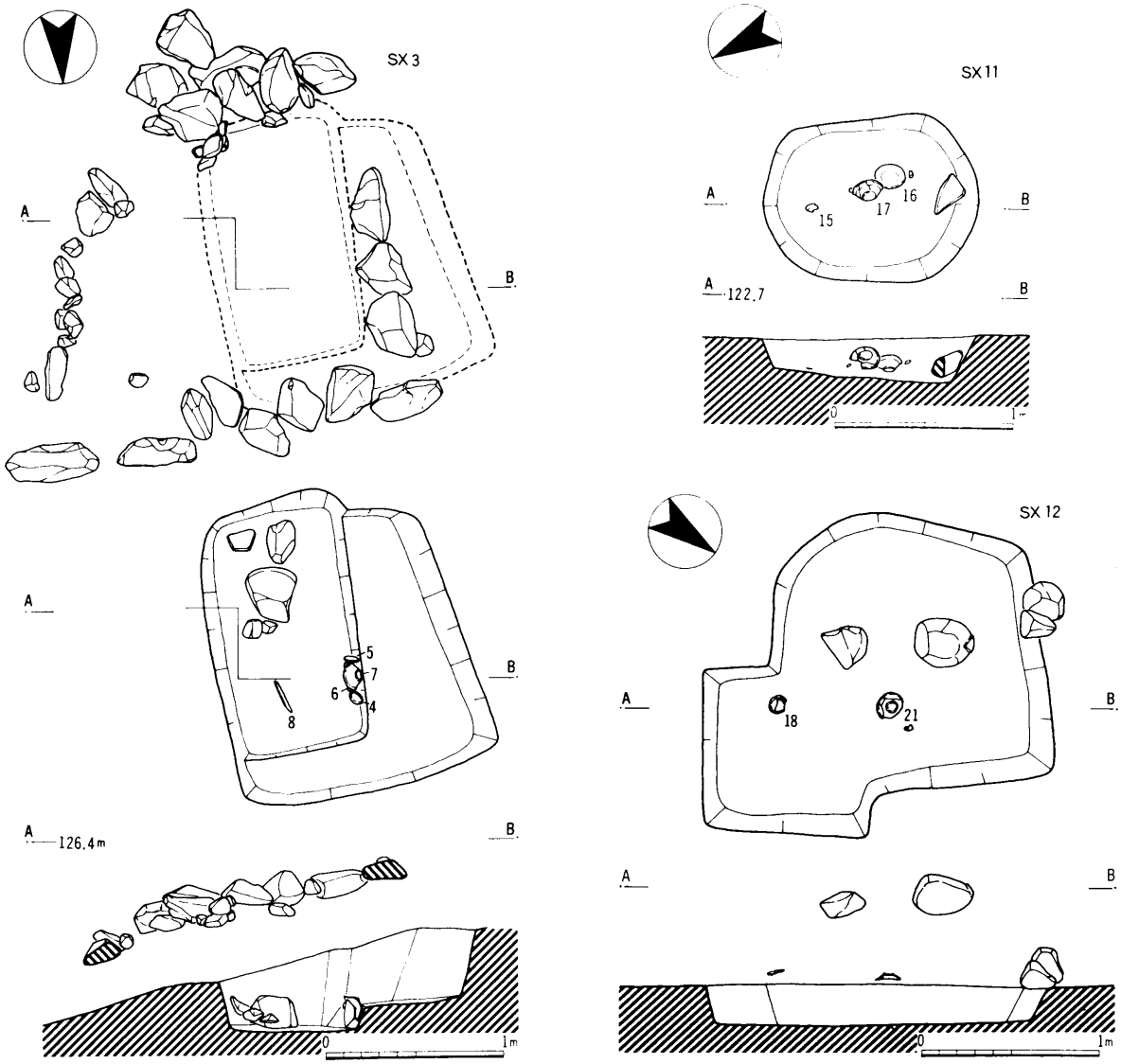
SX12　SX11の南東の整地土下で検出したものである。一辺約1.5mの略方形の土坑で、南側は一辺0.9mの小穴を切った状況で検出された。山茶椀(21)、土師器皿片（18～20）が出土した。中世墓の可能性も残る。



第5図　Ⅰ郭遺構配置図　（1：200）



第6図　ＳＸ１・13・14実測図　（1：40）



第7図　ＳＸ３・11・12実測図　（１：40）

ＳＸ13　Ⅰ郭南側の郭外で検出したもので、長径約50cmから乳児頭大までの石が約3.0m ×1.5m に亘り無造作に集められているにすぎない。

ＳＸ14　ＳＸ13の東側に位置する。掘形は不詳であるが、地山に接して刀子（25）が、その上から山茶椀（23・24）、山皿（22）が出土した。

２．遺　　物

土師器皿の分類に当っては、底部に糸切り痕を持つものをＡ類、器厚がほぼ均一で底部に丸味を持つものをB_1類、底部が平底のものをB_2類、B_2類の内、口縁外面にヨコナデによる面を持つものをB_3類とし、器厚が口縁下で最大値を示すグループの内、体部が弯曲しているものをC_1類、C_1類中口縁外面にヨコナデによる面を持つものをC_2類、体部が直線的なものをC_3類とした。また、きわめて薄く作られているものの内、底部から体部にかけて丸味を持つものをD_1類とし、立ち上がりがややきつく、体部に屈曲を持つものをD_2類とした。

山茶椀の分類は、口径に対して器高低く、腰のふくらむものをＡ類。腰のふくらみを残しつつも、器高の高い点で異なるものをＢ類、腰の張りが消え底部から直線的に立ち上がるもののうち、高台の付くものをC_1類、高台のないものをC_2類とした。なおきわめて精良な胎土を持つ炻器質のものをＤ類とした。

山皿については、高台を有するものを小椀とし、高台はないものの底部が突出し、明らかに高台を意識したものをＡ類、突出はやわらぐもののまだ器高の高いものをＢ類、全体に扁平化し、皿らしいもののうち、口縁部断面が四角いものをC_2類、そうでな

いものをC_1類とした。また山茶椀と同じく、きわめて精良な胎土を持つものをD類とした。

以上の分類に対応する型式は藤澤編年による。[1]

(1) 土師器

皿A類（9） 底部に糸切り痕を持つロクロ水挽き成形の皿である。明らかに山皿を模したような印象を受ける。底部・器壁共に肉厚、口径9.5cm、器高2.2cm。

皿B_1類（10・11） 内面や口縁部はナデられているもののB_3類のように面を持たず、押サエによる底部も扁平ではなく丸味を持つものである。口径9.0cm内外、器高2.0cm内外。共に暗灰色を呈する

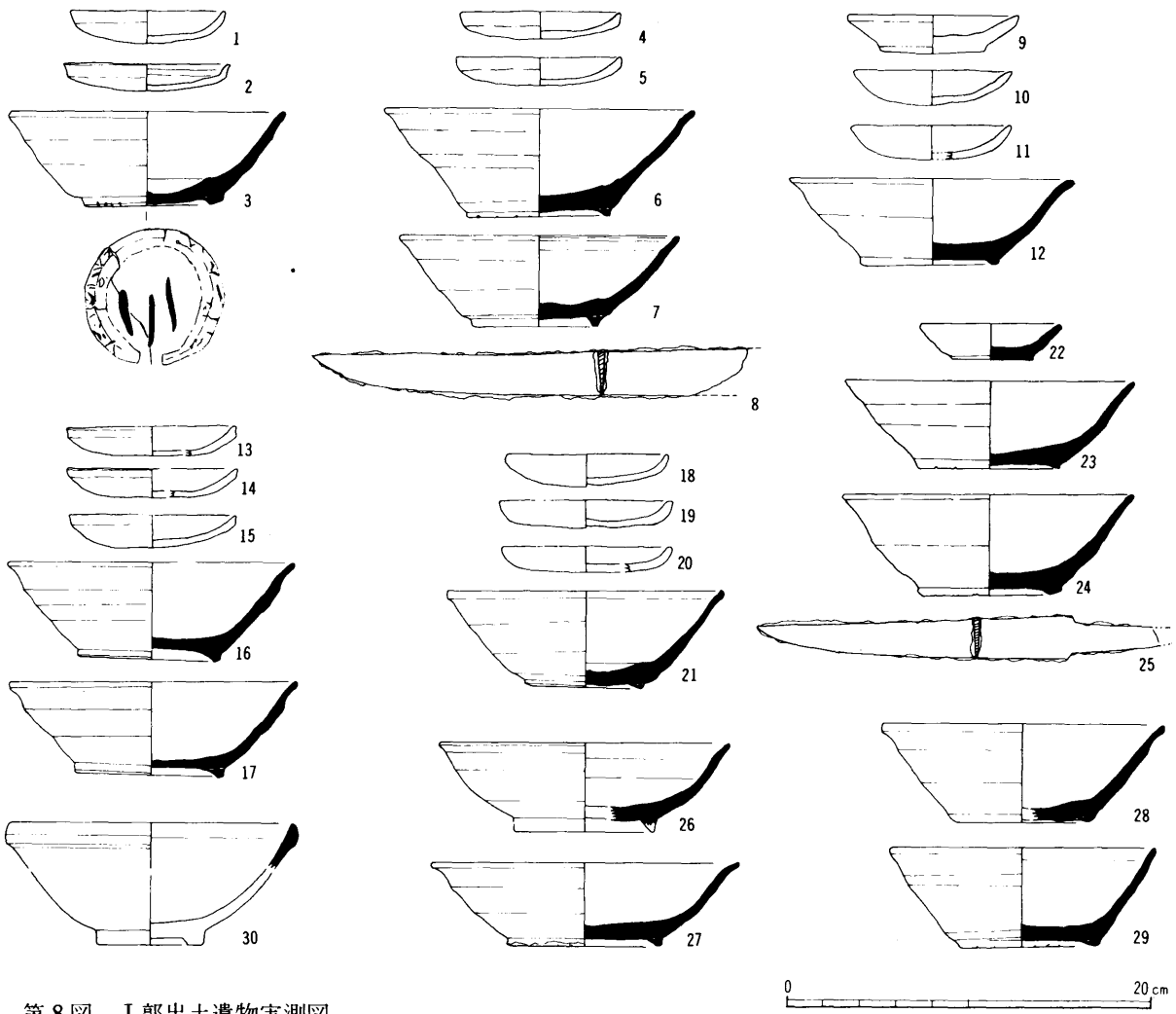
皿B_2類（19・20） C_1類に似るが、平底のものである。口径9.5cm内外、器高1.5cm内外。共に明褐色。

皿B_3類（1・2・4・5・13～15・18） 口縁部に意図的にヨコナデを施し、外側に面を持つものである。口径8.9～9.4cm、器高1.3～1.8cm。

(2) 山茶椀

山茶椀A類（26・27） 共に扁平な器形で腰に丸味を持ち、26は内面口縁下の稜が明瞭である。自然釉がほぼ全面に見られ、部分的にコバルト色に発色している。27は口縁の外反がはっきりし、高台に籾殻痕が認められる。底部は余り厚くないが一応第4型式と考えられる。26は口径16.1cm・器高4.9cm、27は口径17.0cm・器高4.5cm。共にⅠ郭西の自然斜面より出土。

山茶椀B類（3・6・7・12・16・17・21・23・24） 高台は小型化または扁平化し、腰はまだかろうじてふくらみを残し、口縁もわずかに外反する。内面底部はやや凹む。第5型式の後半と思われる。法量は、口径15.2～17.4cm・器4.7～6.0cm。3には高台内に墨書が見られる。



第8図 Ⅰ郭出土遺物実測図

（1：4）

SX2（1～3）、SX3（4～8）、SX4（9～12）、SX11（13～17）、SX12（18～21）、SX14（22～25）

山茶椀C_1類(28・29) 共に腰の張りがなく直線的に立ち上がる。特に28は口縁下に調整の際の凹帯が明瞭に見られ、底部内面のコロシもはっきりしており、第7型式と考えられる。口径は28が15.7cm、29が14.7cm、器高は共に5.4cmである。共にⅠ郭西の自然斜面から出土。

(4) その他

白磁碗 (30) 口径15.4cm、玉縁口縁、13～14世紀のものと考えられる。調査区北東端から出土。

刀子 (8・25) 8は現存刀身24cm・幅2.4cm、25は22cm(内刀身17.2cm)・幅2.3cmである。

3. 小　結

上記のようにⅠ郭は中世墓によって特徴づけられる空間であるが、郭内と言えるのはSX11・12のみであり、西端の地山を削り込んだ部分に墓坑が見られないことからⅠ郭は中世墓より後の時代に墓域を破壊して造られたと考える方が妥当である。その際、SX11・12は盛土整地される側にあったために残ったが、山側にあった墓坑は削平され、消滅したものと考えられる。

この地区に営まれた中世墓は基本的に自然地形の山腹に方形土坑を掘り、長軸を磁北方向に向け、土師器皿・山茶椀・刀子のセットを副葬品としている。

時期は12世紀後葉(平安時代末)の単時期である。一方、Ⅰ郭の築造年代は包含層出土遺物にやや新しいもの(28・29)があり、13世紀期中葉かも知れない。郭としての性格は不明である。

3. Ⅱ郭～Ⅵ郭

1. 遺　構

斜面上方にあたる西、及び北・南を土塁(SA21・34)、空堀(SD22)によって区画されたⅢ・Ⅳ・Ⅴ郭とそれに付属するⅡ・Ⅵ郭からなる小郭の集合部分である。北側のⅠ郭とは約30mはなれ、その間は自然地形のままとなっている。南側は、小さな谷を隔てて、Ⅶ郭に面している。

これら小郭群の内、Ⅲ郭が最高所に位置し、標高約128.5mで、居館群中でも最高所にあたる。Ⅲ郭は斜面上方(Ⅱ郭にあたる部分)を切り込んだ土などを掻き上げて形成されたものと考えられ、その上面に地山の黄褐色礫混土などが整地土として盛られている。東西約7m×南北約11mの小規模なもので、東側のⅥ郭との比高は2m強であり、この斜面に遺存状況は悪いが石垣(SX25)が貼り付けられていたものと推定される。上面には、礎石建物(SB23)が存在する。

Ⅳ郭はⅢ郭の東側に位置し、Ⅲ郭をとりまく帯郭で、幅約4mである。調査前、上面は攪乱を受けていた。Ⅴ郭との比高は約2.5mである。

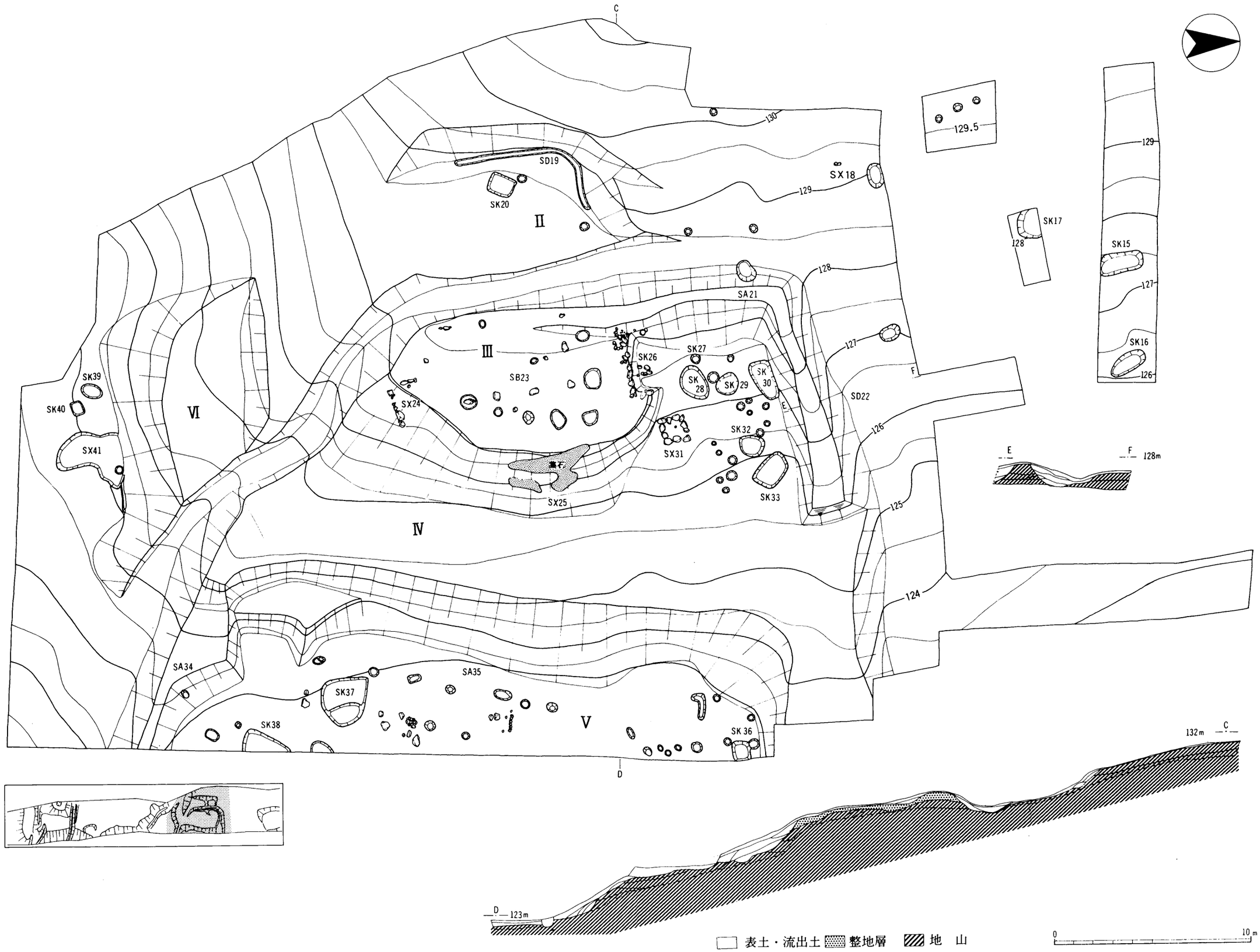
Ⅴ郭は、Ⅳ郭の東側に位置するもので、その西半のみ調査区に入っているが、さらに東に広がるものである。南北は調査区内で約30mで東西は約9mの内西端から約5mまで調査を行った。郭内に柵(SA35)が存在する。また郭南西隅の斜面に約6m×2mの小さな平坦地があり、その東側の斜面が約3m×2m凹状に後退している。

Ⅱ郭は、Ⅲ郭の西側に位置し、地山を削り込んで形成されたもので、東西約6m×南北約9mの小規模な平坦地である。郭の西・北辺に細い溝がめぐる。

Ⅵ郭は、Ⅳ郭の南端から、SD22を隔てて同一高で、地形にあわせてほぼ直角に西方にのびるもので、幅約4m、長さ約8mである。Ⅳ郭と一連の機能をはたすものと考えられるが、遺構は確認されなかった。

(1) 土　塁

SA21 Ⅲ～Ⅴ郭の西及び北側を画するものである。Ⅲ郭西方沿いに北に延び、約8mでほぼ直角に東に折れ曲り、東方へ広がりながら延びる。場所によって各郭との関係で高さ等は異なるが、北側中央付近で、基底幅約2.8m、上端幅約0.7m、高さ1.1mである。土塁盛土は、場所によって異なるが、褐色土及び黄褐色礫混土で、さして締っていない。このため流出土が多く、土塁本来の規模はもう少し大きいものと推測される。なお、Ⅵ郭北側の部分は攪乱の



第９図　Ⅱ～Ⅵ郭遺構全体図

（１：200）

ため、一部土墨が削り取られている。また、Ⅲ郭西側でＳＢ23の北西側の土墨盛土（黄褐色礫混土）より銭貨45枚（63～74）が出土した。銭貨は、はなれているものもあったが、一部には縦に重なって銹着しており、紐などに通されていた可能性もある。

ＳＡ34　Ⅳ郭の南端から一段下がって南東に延びるもので、Ⅴ郭の南側を画する。基底幅約３ｍ、上端幅約0.5ｍ、高さ0.6～0.8mである。土墨盛土はＳＡ21と同様である。

ＳＤ22　Ⅲ～Ⅴ郭をとりまく空堀である。幅約２ｍ前後で、上記郭群の西・南側では地山を掘り込んでいるため明瞭であるが、北側では掘り込みが地山まで達しておらず明瞭ではない。防禦・排水・通路などを兼ねたものであろう。

(3) 石垣・柵

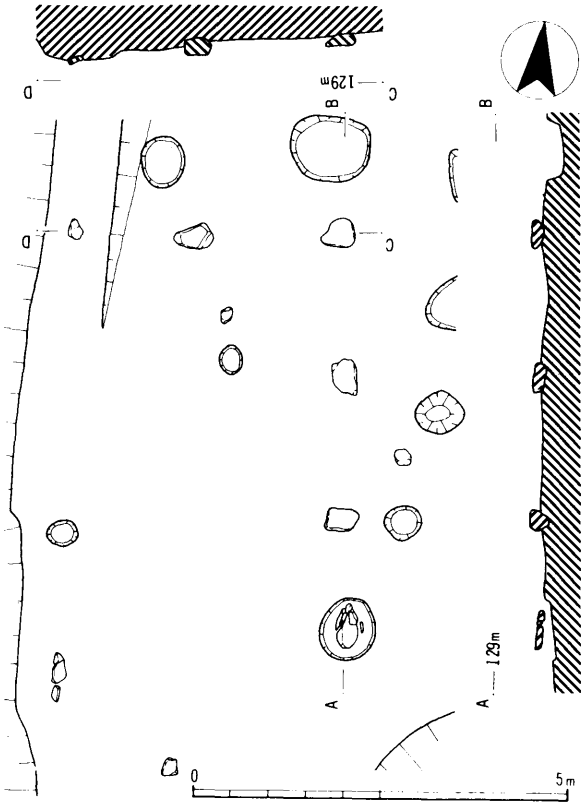
ＳＸ25　Ⅲ郭の東斜面にて検出した。かなり崩れていたが、一部に積み上げられた痕跡も残り、一応石垣と推定した。流出土から土師器皿（34・37～39・41）、山茶椀（54）、刀子（62）が出土した。

ＳＸ24　Ⅲ郭南東端で検出したもので、長さ約２m、の石列である。当初、中世墓の痕跡と考えたが墓坑はなく、あるいはＳＸ25と一連のものと考えられる。土師器の皿（33・35・36・40・43）が出土した。

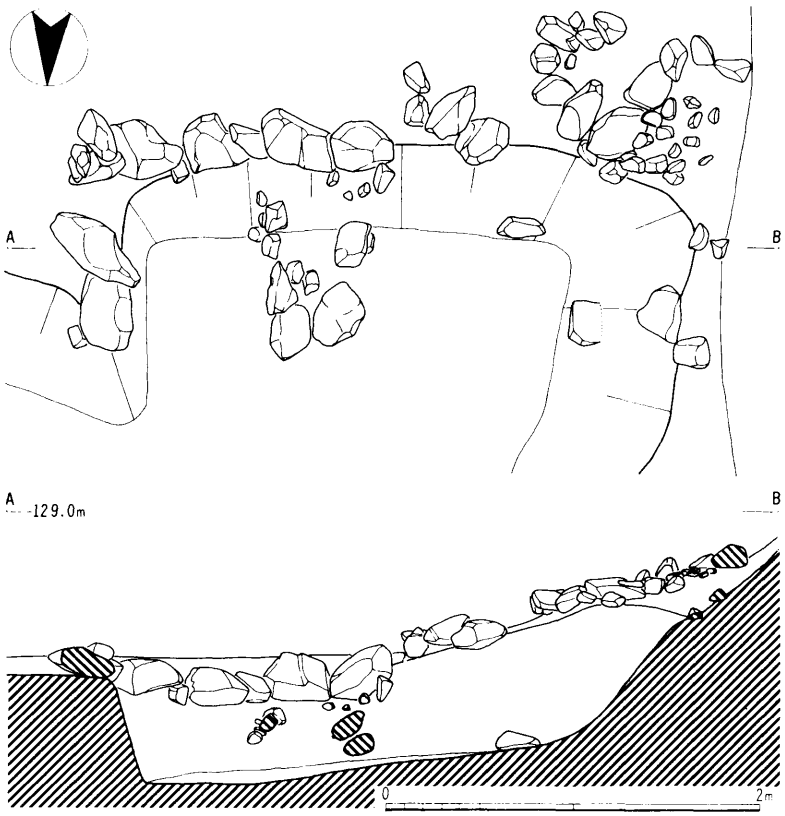
ＳＡ35　Ⅴ郭の西端近くで検出した柵と考えられるものである。柱間は2.0～2.5mで４間分約9.2ｍ検出され、Ⅳ郭の東斜面と平行する。柱掘形径50cm、深さ40cmである。

(4) 建　　物

ＳＢ23　Ⅲ郭上面に存在する礎石建物である。礎石の欠損しているもの、あるいは不確実なものがあり、北東隅の北側１間分、東側２間分のみの検出である。棟方向は不明であり、柱間は1.8ｍである。礎石は長径40～50cm程の川原石で平坦な面を上にして整地土中に据えられており、掘形は不明であった。東側列２間分から南にある石材は、焼土の入った小穴上にあり石自体も火を受けて割れてい



第10図　ＳＢ23実測図　（１：100）



第11図　ＳＫ26実測図　（１：40）

る点他と異なり、また建物の礎石と考えられるものの柱間1.8ｍに比べ、1.5 ｍの位置にあり、同一建物の礎石とするには躊躇せざるを得ない。以上の各点から、ＳＢ25の規模は南北は２間と考えられるが、東西については推定し難い。

(5) 土坑・溝

ＳＫ15～17　小郭群の外に、北西側で検出した約１ｍ×２ｍの土坑である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ20　Ⅱ郭で検出した約 1.2m×１ｍの土坑である。青磁碗片（59）が出土した。

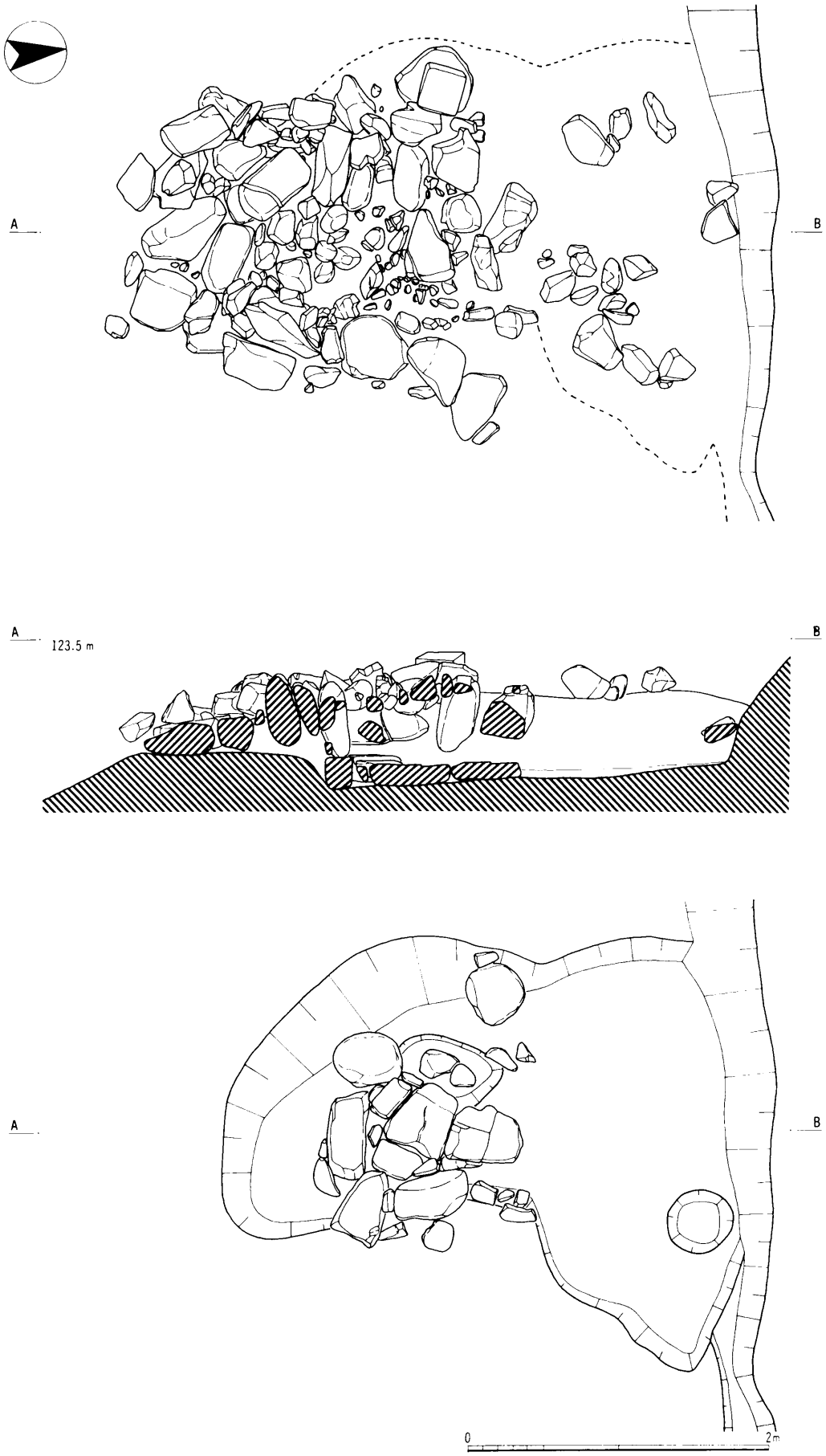
ＳＫ26　Ⅲ郭北端で検出したものである。約2.8ｍ×1.4ｍで「コ」の字形に掘られたものである。土坑上端部に長径40cm前後の川原石が配される。銭貨（祥符元宝）が1枚出土している。

ＳＫ27　ＳＫ26の北側の一段低い部分で検出した径0.5 ｍの円形土坑で、山茶椀（52）が出土した。

ＳＫ28～30　ＳＫ27周辺で検出したが、遺物は出土しなかった。

ＳＫ37　Ⅴ郭の南半で検出した約2.3m×2.3mの不

第12図　ＳＸ25実測図　（1：40）



第13図　ＳＸ41実測図　（１：40）

整形の土坑である。灰釉皿（49)、擂鉢（58）が出土した。

ＳＫ36・38　Ｖ郭で検出した土坑である。ＳＫ36は1.2m×1.0m、ＳＫ38は2.4m×1.5ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ39・40　Ⅵ郭の南側斜面で検出した。ＳＫ39は1.1m×0.7m、ＳＫ40は0.6m×0.7mである。ＳＫ39から土師器皿（42）が出土した。

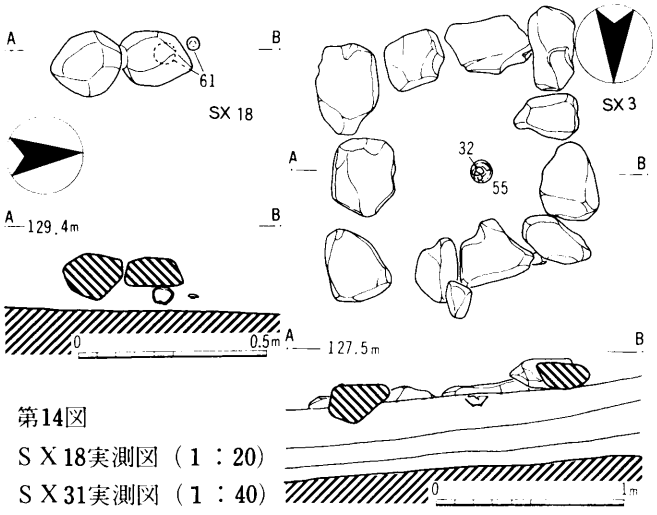
ＳＤ19　Ⅱ郭の地山を切り込んだ斜面ぞいに西・北にめぐる幅約0.3ｍの溝である。土師器（45）が出土した。

(6) そ の 他

ＳＸ18　小郭群の北西外側に位置する。地山まで深いため掘形は不詳であるが、人頭大の石が２個ならべられ、その一方の下から白磁小壺（61）が正位で出土し、小壺から約５cmはなれてその蓋が正位で出土した。内容物は不明である。また、川原石の横からは白磁碗（60）が出土した。

ＳＸ31　Ⅳ郭中、Ⅲ郭の北東斜面近くで検出したものである。長径50～60cmのやや扁平な川原石が一辺約２ｍの方形に配されており、そのほぼ中央から、配石の下端と底部がほぼ同じ高さで、山茶椀(55)が出土した。この山茶椀の中に土師器皿（32）が蓋をするような形でおかれ、山茶椀の中には炭化物がつまっていた。山茶椀を納める掘形は確認されず、配石の上面はⅢ郭盛土下の旧地形の土層と対応する高さである。また、配石上部から、他にも山茶椀（56）が出土している。中世墓の可能性がある。

ＳＸ41　Ⅵ郭の南側斜面下方で検出したものである。



第14図
ＳＸ18実測図（１：20）
ＳＸ31実測図（１：40）

径3.5m×1.8mの楕円形を呈する土坑で、表面には10数個の礫がならべられているが、北部分が新しい土坑で切られている。土坑底部に50cm×30cmの扁平な礫が７個敷かれ、その周囲には長大な礫をたてるようにならべている。その内側には、拳大の石が無造作に集めておかれていた。土坑埋土は炭化物を多量に含んだ黒色土と黄褐色土が重なっており、石材は火を受けた痕跡のあるものが多く、中には割れているものもあった。なお、上面の集石北西端に扁平な川原石の上に梵字を刻んだ地輪（77）が据えられていた。中世墓と考えられるが、石材の配され方、火を受けた石材・炭を多量に含む埋土から、あるいは燃焼に供する何らかの施設かも知れない。塼（75・76)、鉄製品が出土した。

2．遺　　物

(1) 土 師 器

皿D_1類（31）　きわめて薄く作られた皿で、立ちあがりに丸味を持ち、体部に屈曲を持たぬものである。口径7.6m、器高1.4m、赤褐色を呈する。ＳＫ37付近から出土。

皿B_1類（33）　口径8.8cm、器高2.0cmでひずみが大きい。ＳＸ24から出土。

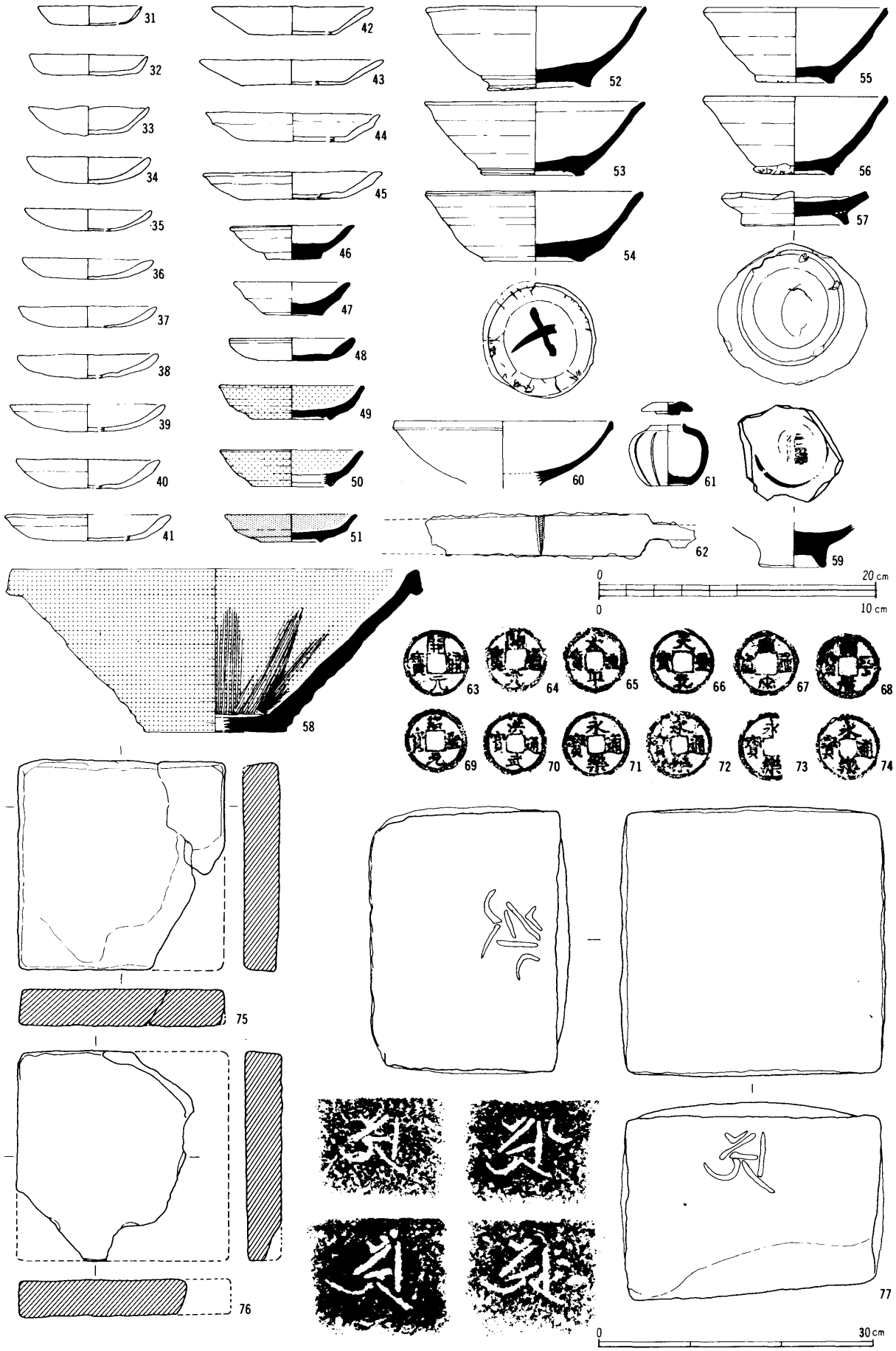
皿C_1類（34～40）　底部が丸味を持ち、器厚の最大値が口縁下にあるものである。39・40は口縁外面にヨコナデ面を持ち、淡橙灰色または明赤色を呈する。焼成はやや軟かく、口径9.0～11.3cm、器高1.5～2.1cm。34はＳＸ25、35・36・40はＳＸ24から出土。

皿C_2類（41・44・45）　C_1類におけるヨコナデ調整が過度に行なわれた形態で、口縁下に稜線を持つ。先の39・40はC_1類との中間的形態であり、44はその極端なものである。

皿C_3類（42・43）　C_1・C_2類同様口縁下に器厚の最大値をもつが、平底で、直線的に立ち上がるものである。42は口径11.7cm、器高20cm。43は口径13.4cm、器高1.8cm。43は灰白色を呈し、丁寧に作られている。ＳＸ24出土。

(2) 陶　　器

山皿Ａ類（46）　高台は消えるが、底部が突出し明らかに高台を意識している。第５型式初期と考えられる。底部の糸切りは不明瞭。体部外面はヌタ痕が



第15図　Ⅱ～Ⅵ郭出土遺物実測図

（1：4、63～74　1：2、75～77　1：6）

残る。口縁・底部内面の一部に煤が付着。口径9.2cm、器高2.5cm。

山皿B類（47）　底部の突出はやわらぐが、まだ器高が高い。第5型式と考える。口縁下の稜線明瞭。口縁の一部に煤付着。

山皿C_1類（48）　全体に扁平化し、皿らしくなる。口縁はまだ四角くなっていない。第7型式と考えられる。底部内面にコロシ。口径8.8cm・器高1.6cm。ＳＫ37付近出土。

山茶椀B類（52～54）　前段階までのものに比べて口径に対して器高が高く、やや深い感じを与える。第5型式のものか。62はひずみ大。内面は滑らかに仕上げられ、高台内に木目状痕を持つ。高台は一部剝離し、籾殻痕がある。53は口縁下の凹帯が明瞭で底部内面が凹む。高台圧潰、ヒビが多く入る。54は口縁端に沈線が入る。高台内に墨書が認められる。口径15.6cm～16.2cm、器高5.0～5.3cm。52はＳＫ27、54はＳＸ25付近出土。

その他（57）　山茶椀の底部を円形に打ち欠き、割れ口を磨いて調整したもので、何に二次使用したものか不明である。

山茶椀C類（55・56）　全体に大型化し、体部も直線的に立ち上がっている。まだ高台は残っている。第7型式と思われる。共に口縁下がくびれ、高台には籾殻痕が残る。55の高台内には、木目状痕、56の底部内面はコロシが明瞭に見られる。口径13.5～13.6cm、器高5.5～5.6cmである。共にＳＸ31出土。

灰釉皿（49・50）　ロクロ水挽きの後ヘラ削りを行ない高台を削り出している。体部外面に稜線あり。49は高台脇に釉が溜る。高台内に輪トチ痕が残る。胎土は、49は灰白色、50は赤褐色である。口径10.4～10.5cm、器高2.4～2.6cmで、共にⅤ郭出土。大窯Ⅱ期と考えられる。[2]

鉄釉皿（51）　ロクロ水挽きの後ヘラ削り、釉調は赤褐色及び黒褐色。高台内及び見込に輪トチ痕が残る。口径9.7cm、器高2.0cmである。Ⅴ郭出土。大窯Ⅱと考えられる。

擂鉢（58）　口径29.0cm・器高11.7cm。内面に15本単位のハケ目が16ヶ所施されている。底部に糸切り痕あり。胎土は黄褐色。縁帯がやや下がり、新しい要素も見られるが、やはり大窯Ⅱ期であろう。

(3) 磁　　器

白磁碗（60）　推定口径16.1cm、玉縁口縁。釉はやや黄味を帯びる。高台脇付近は露胎。ＳＸ18出土。

白磁小壺（61）　口径2.2cm、器高4.4cm、底径3.2cm。口縁部少し欠ける他ほぼ完形。頸部に浅い沈線が回る。体部外面に縦方向10条の沈線が見られる。底部内面は過巻状に隆起。底部外面は露胎。蓋の釉は殆んど剝離していた。ＳＸ18出土。なお、愛媛県鈍川村奈良原神社経塚出土のものに類例が見られ、12世紀としている。[3]

青磁碗（59）　底部4.8cm、底部の厚み1.7cm。見込みに印刻がある。ＳＫ20付近で出土。

(4) そ の 他

塼（75・76）　長辺22.8cm、短辺22.4cm、厚み4cmで、瓦質である。共にＳＸ41から出土している。

地輪（77）　四面に梵字が、𑖀（ア）、𑖁（アー）、𑖂（アン）、𑖃（アク）と刻んである。28×28×20cmの方形で上面は盛り上がる。ＳＸ41から出土。

刀子（62）　現長19.6cm、幅3.0cm。残存状況不良。ＳＸ25付近から出土している。

銭貨（63～74）　63・64開元通宝、65太平通宝、66天聖元宝（真）、67皇宋通宝（篆）、68治平元宝（篆）、69紹聖元宝（真）、70洪武通宝、71～74永楽通宝。他に判読されたものとして、開元通宝、嘉祐通宝（篆）、熙寧元宝（真）、元祐通宝（真・篆）、聖宋元宝（真）、政和通宝（篆）などがある。Ⅲ郭ＳＡ21盛土からの一括出土である。

3．小　　結

この地区の性格を推定する事は難しい。

Ⅲ郭は、山頂を除けば本遺跡中最も高い所に位置する点にその性格をうかがわなくてはならないだろう。出土遺物からは12世紀末から13世紀中葉の時代巾が考えられる。Ⅴ郭はＳＡ21・34に囲繞されている点ではⅢ、Ⅳ郭と一体的に把えなくてはならないが、出土遺物に16世紀の大窯製品が多い事から、その時期に改変の手が加えられたと考えるべきであろう。Ⅵ郭はそれ自体に遺構はないが、その南斜面からＳＤ46の谷にかけて塼がかなりの頻度で出土している点に特徴が見出せる。

赤色は下層遺構として検出したもの

表土・流出土
第２次整地層
第１次整地層
旧表土
地　山
集　石
たたき
焼　土

（1：200）

第16図　Ⅶ郭遺構配置図

4．Ⅶ　　郭

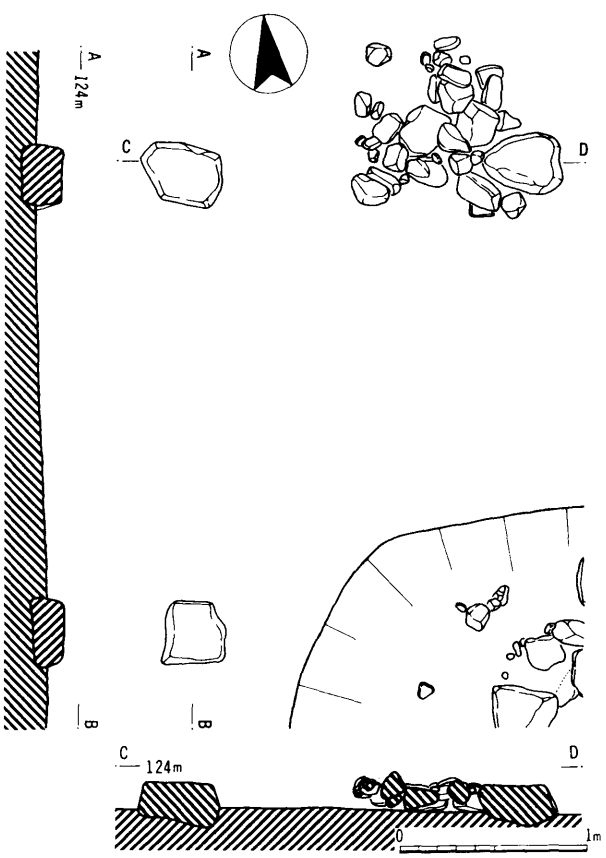
1．遺　　構

ＳＤ46・64によって南北を画され、東側は斜面、背後は山である。今回調査中最大の平坦面であるばかりでなく、その位置から、本遺跡の中枢を占めると考えられ、ＳＢ51という大型礎石建物等が検出された。南北の郭とはＳＸ43・65によって結ばれるが東方（正面）に対してはやや螺旋状の石段ＳＸ59が設けられている。また石段脇には枡形状小郭がある。

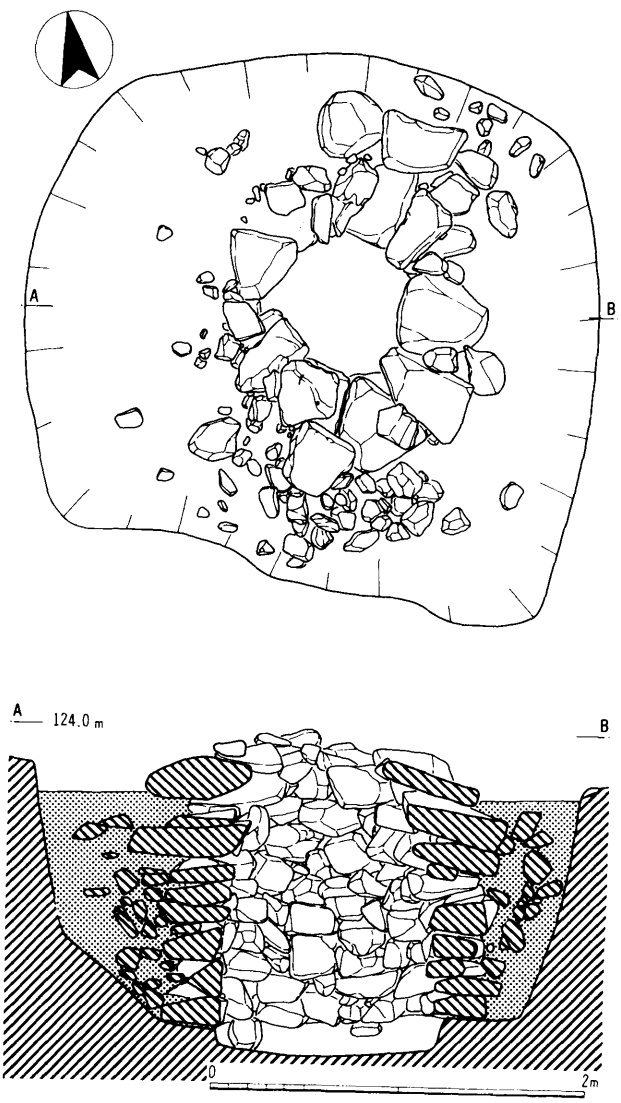
全体に整地土であるため検出は難しく、上層においてはＳＢ51の礎石面等を手掛りとした。下層の場合、37ライン以南では地山が高所にあるため検出は容易であったが、以北、とりわけ東半部では困難であった。

(1) 建　　物

ＳＢ51　Ⅶ郭中央を占める大型礎石建物であり、棟方向はＮ2°Ｗである。建物部分は、周囲より約50cm高く盛土されており、基壇状を呈する。最大南北８間（15.5m）、東西７間（11.3m）であるが東南各１間は部分的な張り出しである。あるいは西１間もその可能性がある。東西の柱間は、均一で約1.9ｍであるが、南北方向には大小がある。一応一棟と考えられるが、北２間は柱間が2.9ｍと広く、別棟を想定する余地も残されている。その場合、正面入口と考える東辺張出しが建物中央となり、堂的建築物を考えるには都合がよいが、分離された北棟は６間×１間となり、きわめて不自然である。また、北から５列目の礎石列は小型であり、南北の柱間も1.5ｍ



第17図　ＳＢ66実測図　（１：40）

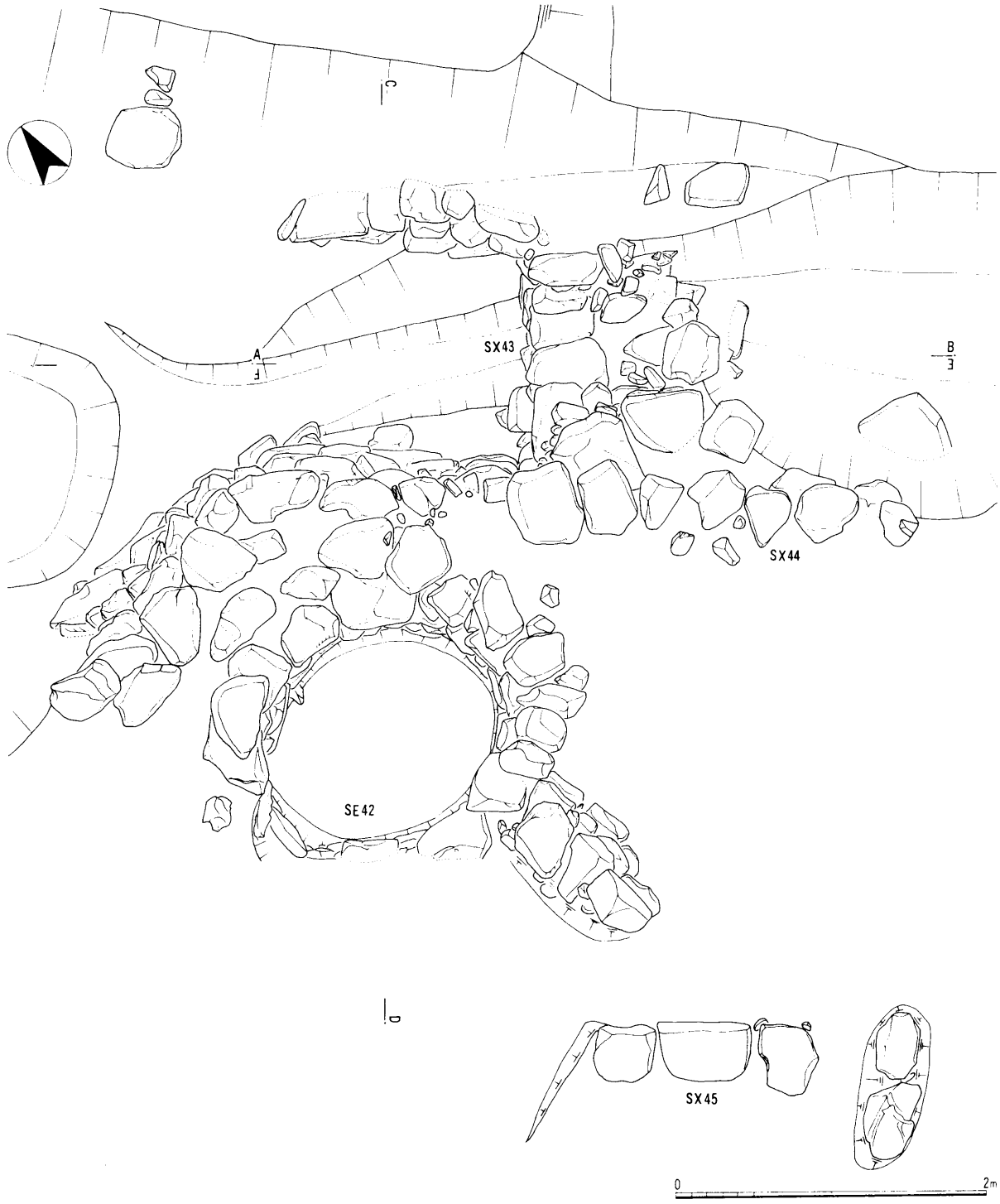


第18図　ＳＥ48実測図　（１：40）

程しかなく束柱と考えられる。礎石の大きさは、長径50cm、厚さ15cm程で拳大の礫を根固めとしている。また建物中央には、強固に叩きしめられた整地面が認められ、北東部からは焼土面（ＳＸ52）が検出された。建物の周囲には、拳大の礫による集石面が数ヶ所（ＳＸ53～56）見られる。正面入口と推定する東張り出し前には、0.4m×1.5mの範囲で細かい青灰色バラスが敷きつめてあった。

出土遺物は、礎石建物であるため、遺構に伴うと断定し難いが遺構上面から出土したものは、大窯製品と考えられる。（219・222・227・232・236・242・249・252・271・279・295）。

ＳＢ66　1間×1間（1.8m×2.5m）の礎石建物と考える。南東隅の石は認められず、ＳＥ48築造の際に除去されたのであろう。礎石は径約40cm。



第19図　ＳＥ42・ＳＸ43・44・45実測図　（1：40）

(2) **井戸および関連遺構**

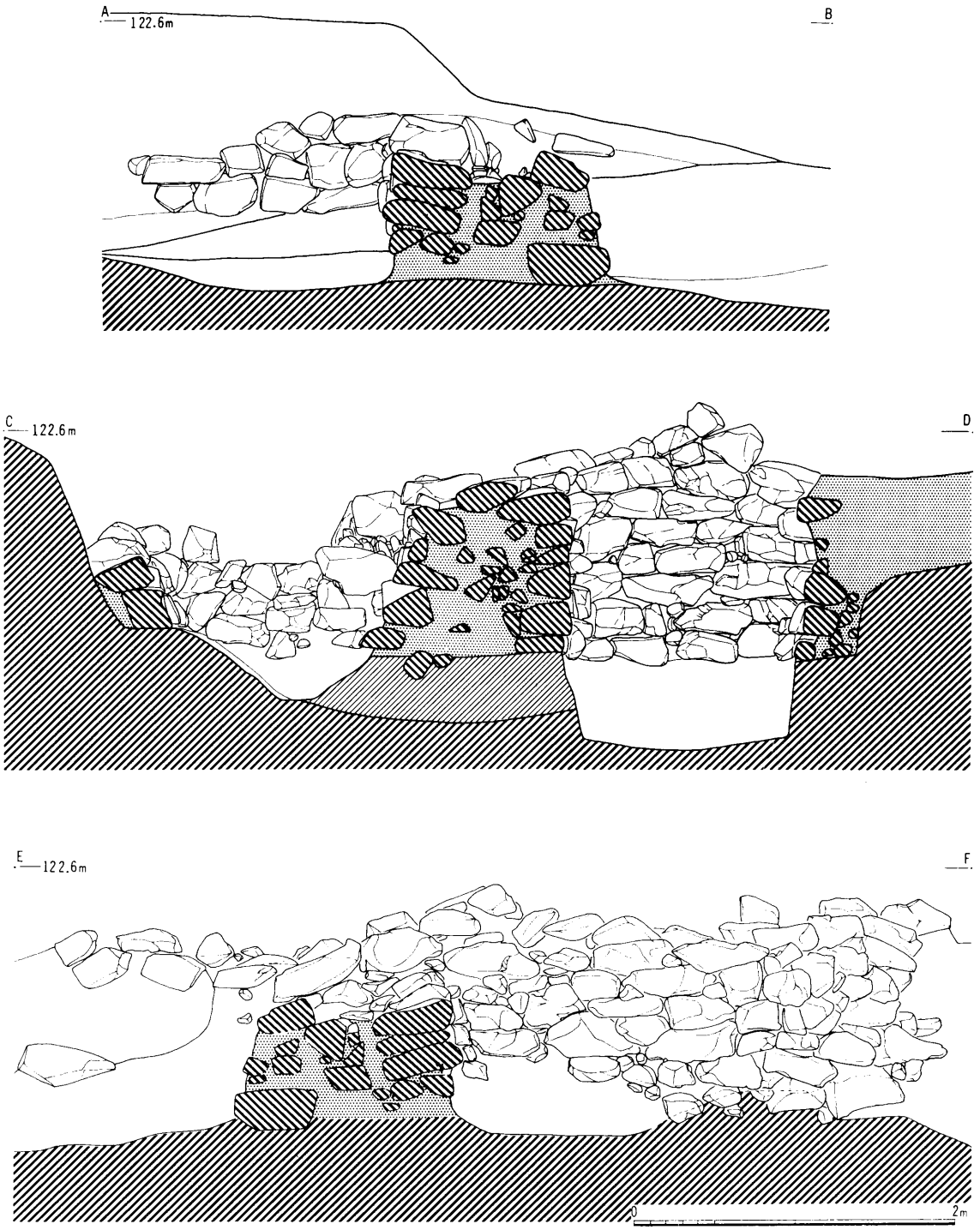
① **ＳＥ42付近**

ＳＥ42　径1.4m、深さ1.8m。深さに対して径の広い石組井戸である。ただし上部の石はかなり内側に転落している。下部50cm余は地山をくりぬいており、石組はない。ＳＤ46側にも石が組まれ、浸蝕崩壊を防いでいるようである。ＳＥ42東南には小石垣（３段）が派生している。

ＳＸ43　高さ0.8m・幅1.2m・長さ1.4mの石組土橋である。上流側の方が丁寧に積まれており、ＳＥ42の外護壁と一体となり、湧水の多いＳＤ46を堰止め水溜をつくったものであろう。常に80cm程水が溜っている。

② **ＳＥ48付近**

ＳＥ48　径0.7m・深さ1.6m・底径1.2mの石組井戸である。石は小口積みで持ち送られ、口のすぼま



第20図　ＳＥ42・ＳＸ43・44・45実測図（その２）　（１：40）

第21図　ＳＸ65・ＳＥ82実測図　　（1：40）

である。宇野隆夫氏によれば[④]、このような袋状井戸は、中世後期に限定される時期幅のせまいものであり、時期の確実なものとして和歌山県根来寺坊の5例があり、いずれも16世紀としている。井戸埋土からは砂岩製一石五輪塔(293) が、掘形埋土からは古瀬戸花瓶の飾環 (211)、塼 (292) が出土している。

ＳＸ47 南面する石列である。西端で「「」形に折れ、その石は東面する。ＳＤ46側の斜面に何らかの遺構があったのかも知れない。ＳＸ49南の石列も同様で南面するが、周辺の遺構の性格は不明である。なおＳＸ49のすぐ下層にほぼ同規模の石列が見られ、これはＳＤ67の肩を形成しているようである。

③ ＳＥ82付近

ＳＥ82 木枠井戸である。厚さ3㎝、幅21㎝の板材10枚と幅6㎝で断面が「く」の字形に折れた目板を連結して枠としている。板の接合は竹による合釘止めで、その後板及び目板にあけられた穴に紐を通してタガを締めたものであろう。径0.7m、深さ1.1mと浅い。同様の井戸は山口県下右田遺跡（4次）[⑤]においても検出されており、やはり掘形上端から1.4m程しかない浅い井戸である点に共通性が認められる。すぐ北に深さ0.6mの土坑が続き、溢れた水はＳＤ83・84・85を通って排水される。ただしＳＤ83と84の間は溝が刻まれず、不連続であり、そのままでは三角形の平地にも滲み出していく。ＳＥ82からは空風輪(297) ・椎の実、ＳＥ北凹地からは地輪 (312)、ＳＤ83からは水輪 (305) が出土した。

ＳＤ84 幅2m強、深さ1mの大溝（掘）である。その西端は土坑状に25㎝ほど凹み、ＳＤ83からの排水を一時的に溜めるようである。したがってＳＤ84・85にはそれほど水は流れなかったと考えられる。遺物は土師器皿(117)・山皿(132)・無釉皿(224) が出土しているが全体に乏しく、埋土の均質性と併せ考え、礎石建物築造の際一気に埋戻されたものと考えられる。

ＳＤ85 幅1.4m・深さ約30㎝。ＳＤ84を受けるものとしては小規模である。

ＳＤ86 ＳＥ82の東を迂回してＳＤ64に注ぐ溝であり、南端は地山をくり抜いた暗渠となっている。暗渠の排水口はＳＸ65と重なっている。ＳＤ83とは同一埋土であり、先後関係は判断出来なかった。ＳＥ82との間に同レベルの平石3個が並ぶ。遺物はほとんどなかった。

ＳＤ62 Ⅶ郭西端に沿う溝と考えられ、Ⅶ郭への湧水の浸水を防ぐものであろう。ＳＥ82付近の屈曲部には石が使用されており、それはＳＤ86を廃して造られている。屈曲後土塁ＳＡ60に沿って東流し、土塁東端で南に折れＳＤ64に注ぐ。その屈曲部にも石組ＳＸ63が見られる。この石組はＳＤ62内にも延びており、石段としての役割も果していたようである。

ＳＤ64 幅2m、深さ0.5mの大溝（堀）である。東に行くほど深くなり、おそらく下の居館群まで達していると思われる。途中6ヶ所に段差が設けてあり、排水路としてばかりでなく、通路としても使用したと考えられる。形状は直線でなく、斜面部では等高線に直交するように南に向きを変えている。西端は調査区外の山中に約15m続いている。遺物は多く、ＳＤ84と対照的であった。土師器皿(109)・土鍋(122)、鉄釉皿(243・245・246・248)、天目茶椀(257・260) ・茶入(263)・鉄釉鉢(266)・鉄泥盤(270)・火舎(272)・常滑壺(275)・石鍋(284)・火輪(300・301)・地輪(311) などが出土した。

ＳＸ65 ＳＤ64西端近くに設けられた石組土橋で、高さ0.8m・幅1.4m・長さ1.8mである。ＳＸ43同様山側の方が丁寧に積まれており、水溜を形成する。ＳＤ64へ滲み出す水の量は少ない。石積の中に転用された石仏(313) が一点混じっていた。

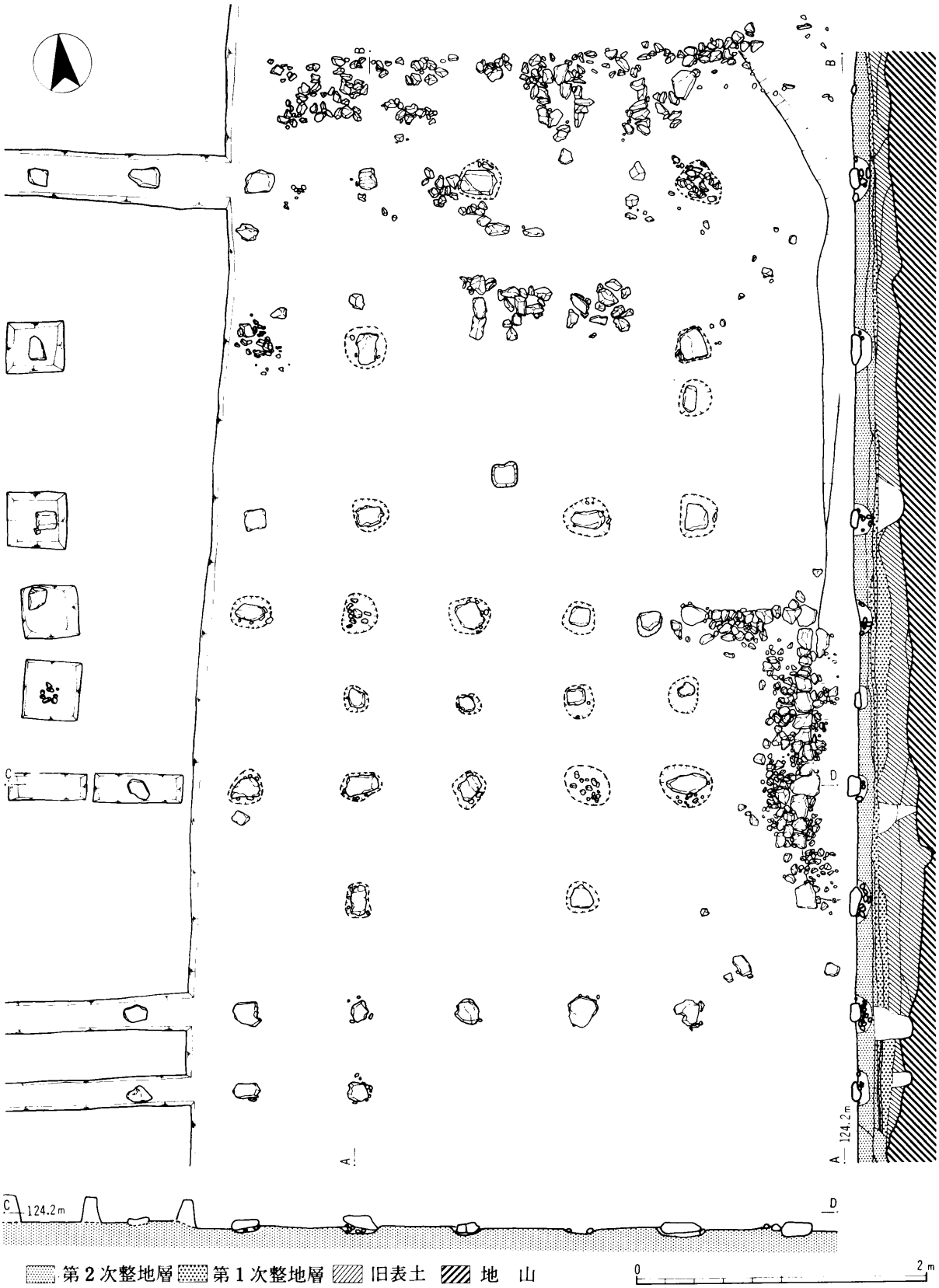
ＳＡ60・61 ＳＤ64と対になり、Ⅷ、Ⅸ郭と界をなす土塁である。ＳＤ64と同時に築造されたと考えられる。ＳＡ60は底幅3m、高さ0.8mであるが、ＳＡ61は流出したのか、盛土量は少ない。またＳＡ60はＳＤ64同様調査区外の山中へ約15m続いている。

(3) その他の遺構

ＳＸ50 石組溝の開口部と思われる。径40㎝程度の石が内側に面を揃えて約1m検出された。

ＳＸ57 基壇状の高まりで、底辺7m四方、高さは約50㎝である。東下端から火輪(298) が出土した。

ＳＸ58 石段脇の小郭奥に設けられた積石遺構である。燃焼部と煙道部に分かれその境はくびれている。焚口からの全長は1.9m、幅1.6m、深さ0.8mである。内部には拳～人頭大の石がぎっしりと詰っており、焚口付近底部には炭が10㎝程堆積していた。



第22図　ＳＢ51実測図　（1：40）

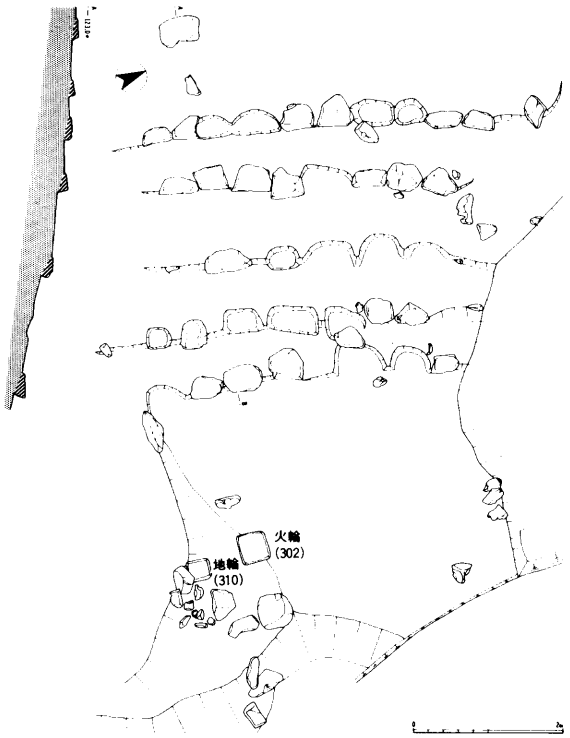
ただし、詰められた石はそれほど火を受けたとは見えなかった。焚口から浅い溝が延び、ラッパ状に開口し、東斜面は灰原状になっていた。内部からは遺物は出土せず、ラッパ状開口部付近に集中していた。性格は不明であるが、蒸風呂の可能性が考えられる。

ＳＸ59　幅4.6m、踏面0.7～１m、蹴上10～20cmの石段である。上５段を残して、下は転落しているが、調査区外に続きが確認され、全体ではや、螺旋状となる。石は長径40cm程であるが五輪塔からの転用も見られた。(302・310)

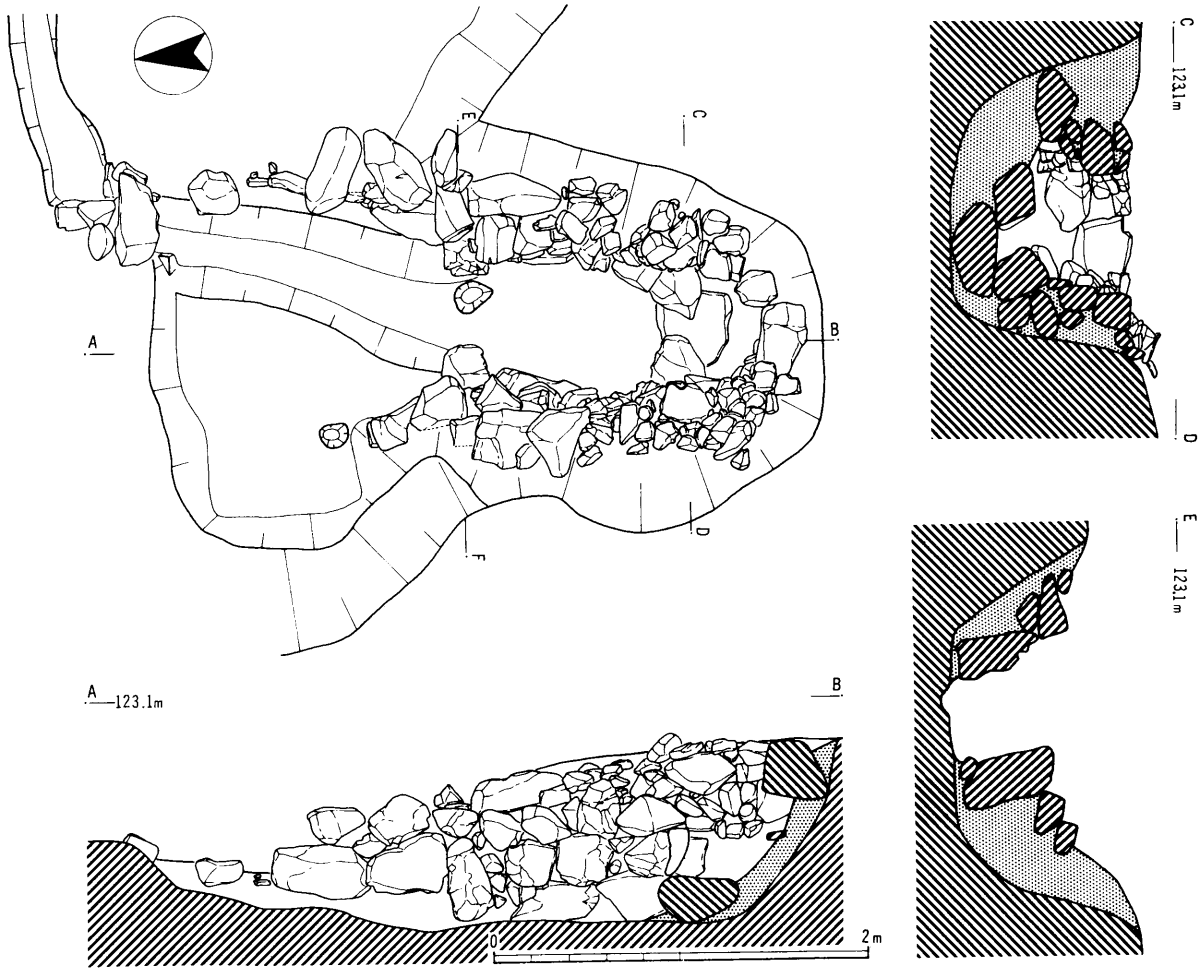
ＳＸ68　幅0.7m、長さ2.7mで、底が段になった隅丸の長方形土坑である。埋土から高台のある山茶椀と高台をもたない山茶椀が出土した。

ＳＫ69　土層断面観察により検出された土坑のため北半を失う。1.3m×1.9mの長円形と推定される。埋土から鉄釉皿（234）が出土した。

ＳＸ70　北側のものは70cm四方の方形で、周縁は炭化しており、その内側は焼土である。深さ数cmしか残



第23図　ＳＸ59実測図　（１：100）



第24図　ＳＸ58実測図　（１：40）

っていなかったため出土遺物もほとんどなかったが、中世墓の可能性があろう。

ＳＸ71　長さ2.1ｍの石列。拳大～人頭大の石を使用している。面は不明瞭であるが、一応北に面する。第一次生活面上に位置する。

ＳＤ72　幅50cm、深さ10cmであるが、ＳＸ71・73と同一レベルと考えれば50cmとなる。ＳＸ70付近以東は整地土のため確認できなかった。埋土から石層塔の部材（304）と塼（291）が出土した。

ＳＸ73　石組カマドである。拳大～人頭大の川原石を使用している。径60cm、高さ40cmで東に口を開ける。火床面が第一次生活面にほぼ一致する。南側にまとまった焼土面が見られる。伴出遺物はない。

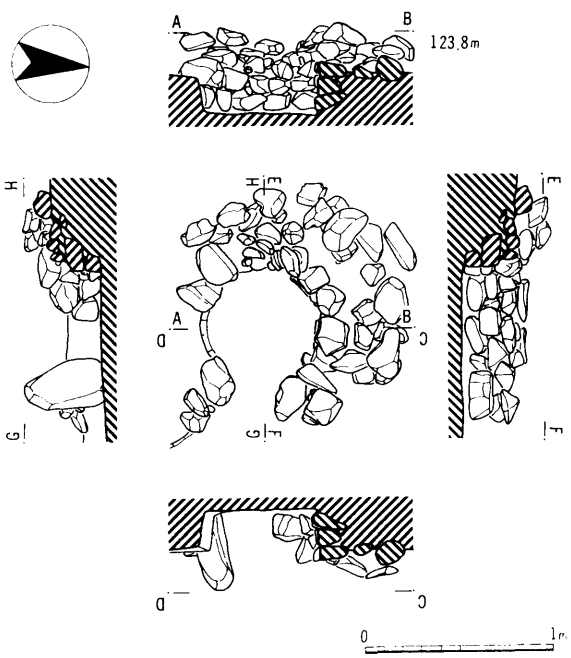
ＳＫ79　２ｍ×１ｍ、深さ50cmの土坑である。丸瓦（287）が出土している。

ＳＡ80　長さ８ｍの柵列。ＳＤ84によって柱穴がひとつ切られている可能性がある。その場合、柱間は等間で２ｍとなる。

ＳＫ81　径約１ｍ、深さ80cmの不整円形の土坑である。遺物はほとんどない。

ＳＫ89　2.3m×1.7m、深さ約50cmの土坑である。ＳＤ87・88・90と一体のものであるが、性格は不明である。出土遺物は土師器皿（100・102）、・山皿（135）・墨書山茶椀（185）がある。

ＳＫ91　長さ約６ｍの石列で面は揃わない。この付近で地山が下降するので、Ⅶ郭の東肩を示す石列かも知れない。ＳＡ80と方向がほぼ一致する。



第25図　ＳＸ73実測図　（１：40）

２．遺　　物

(1) 土師器

Ⅲ A類（78～84）　底部に糸切り痕を持つものである。口径8.1～9.0cm・器高1.9～2.4cmで、器壁は厚い。78は、石段脇小郭のラッパ状開口部分から出土。79はピット３、80はＳＤ46、87～84はピット２からの一括出土である。

Ⅲ B_1 類（110・111）　器厚は全体に平均しておりナデられているが口縁に面は持たぬもので、底部が丸味を持つ。110は淡橙色、111は灰白色を呈し、焼成はともに軟質。口径8.4～8.8cm・器高1.5～1.8cm。

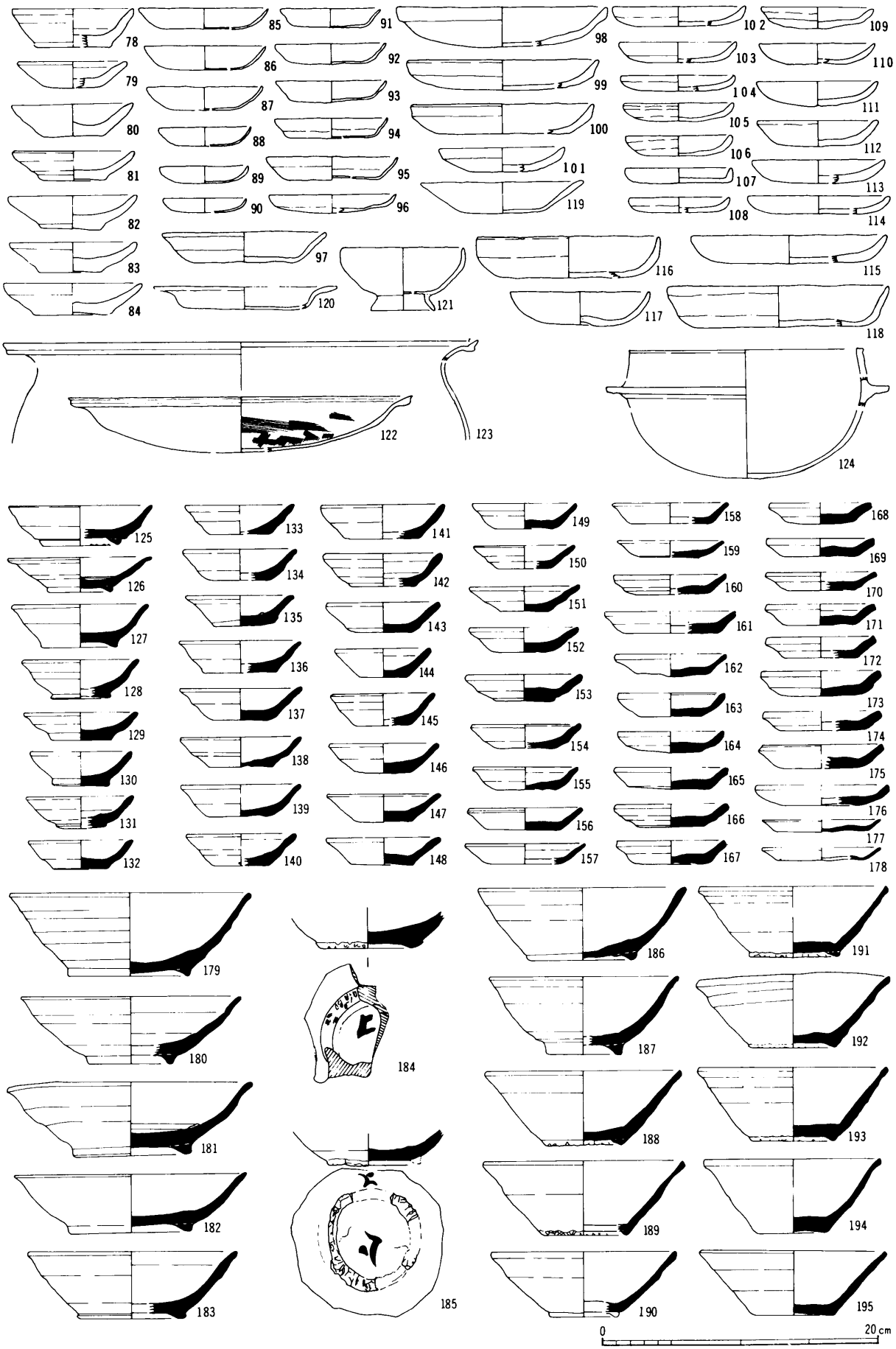
Ⅲ B_2 類（112～115）　B_1類に似るが平底のものである。112～114は、口径8.9～10.4cm・器高1.3～ 1.8cm。器高に反比例して、口径は大きくなるようである。115は、口径14.2cm・器高2.0cm。ともに36Ｆ・37ＦＧ区出土。

Ⅲ B_3 類（98～109）　口縁部にヨコナデによる面をもつ。法量により、口径13.2～15.3cm・器高2.1 ～2.9cmのものと、口径7.8～9.6cm・器高1.1～1.8 cmのものに細分される。器形の大きいものほど垂直に近いしっかりした面をもつ傾向にある。98は、ＳＤ87、100・102はＳＫ89、107はＳＤ62、109はＳＤ64出土である。36Ｅ・37ＦＧ区からの出土も多い(99・101・103・105・106・108など)。

Ⅲ C_3 類（119）　底径に対して口径の広い皿である。口径12.0cm・器高1.7cm・底径5.4cm。底部は薄く、立ち上がりは直線的である。口縁付近に器厚の最大値をもつ点に特色がある。器表は淡橙白色を呈すが、内部は黒ずむ。東斜面下端（36Ｋ区）で出土。

Ⅲ D_1 類（85～90）　きわめて薄く作られた皿で、全面押サエ。明橙色ないし明黄白色を呈する。口径8.4～9.4cm・器高1.5～1.8cmのものに区分される。89の口縁の一部に煤が付着している。主としてＳＤ72付近で出土している。(85・87・88は35Ｅ区)

Ⅲ D_2 類（91～96）　D_1類に似るが、立ち上がりから口縁に向う途中で屈曲する。口径7.2～9.8cm・器高1.4～1.6cm。91～93は36Ｅ区（ＳＫ74南付近）で出土。92・93の口縁には煤が付着している。燈明皿



第26図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その１）　（１：４）

として使用したものであろう。

蓋（120）　内面中央につまみがついていたと考えられる。内面および口縁外面はナデ、ほかはオサエ。口径13.4cm・器高1.7cm。口縁外面に煤付着。焼土面ＳＸ52出土。

台付椀（121）　椀部は、基本的にオサエによって成形されており、口縁部をやや内傾させナデ調整している。台は貼付けで、丁寧にナデつけられている。胎土は、皿Ｂ類による。口径9.0cm・器高4.6cm・底径4.8cm。35Ｇ区表土層出土。

鍋（122・123）　122はかなりひずんでいるが、小型の浅い鍋と思われる。口径23.6cm・器高4.0cm。口縁部はナデ。他は、オサエによる。内面底部茶褐色を呈し、胎土は緻密である。乱方向に幅１cm程のハケ目。口縁外面に煤付着する。ＳＤ64（43丁）出土。123は、推定口径34.6cm。ＳＤ46（30Ｈ）出土。

羽釜（124）　推定口径17.2cm。鍔部分の破片で全体に硬く重い。下面に煤が付着する。31Ｆ区出土。

(2) 陶　器

小椀（125～128）　125は、第3型式に近い形であるが、籾殻痕が認められ第４型式とする。

山皿Ａ類（129～131）　高台を消失したものであるが、なお高台を意識している。第５型式初頭と考えられる。130は、ピット2出土。

山皿C_1類（156～161）　全体に偏平となり、皿に近くなり、口径8～9cm・器高1.5cmで口縁部はまだ四角とはなっていない。第７型式と考えられる。

山皿C_2類（165～174）　器形はC_1と大差ないが、口縁断面が四角くなる。第８型式と考えられる。165はピット１、169はＳＤ67出土。

山皿Ｄ類（177・178）　長石を含まぬ精良な胎土で、口径8.5cm・器高１cmで、器厚1.4mmときわめて薄い。大畑大洞３号窯出土遺物に似る。[6]

山茶椀Ａ類（180～183）　腰のふくらみに欠けるものもあるが、口径に対して底の浅い点で共通する。第４型式と考える。口径15.3～17.0cm・器高4.2～5.3cm。180は、ピット３出土。181は、ひずみが大きく、重ね焼痕が残る。ピット２出土。182は、他のタイプと異なり、渥美産かもしれない。

山茶椀Ｂ類（179・184～187）　口径に対し器高が高くなり、深い形状となる。底部内面と体部の境が明瞭でない。第５型式と考える。184・185には、墨書が見られる。

山茶椀C_1類（188～193）　底部から体部が直線的に立ち上がる。高台の有無でC_2類と一応分けているが、型式的には区別し得ない。高台は、いずれも多かれ少かれ剥離している。189・191・192などは、長石粒が浮く。191・193は、底部内面にコロシ。192は、ひずみ大。高台内に木目状痕。口径13.6～14.3cm・器高4.7～5.5cm。第７型式と考えられる。

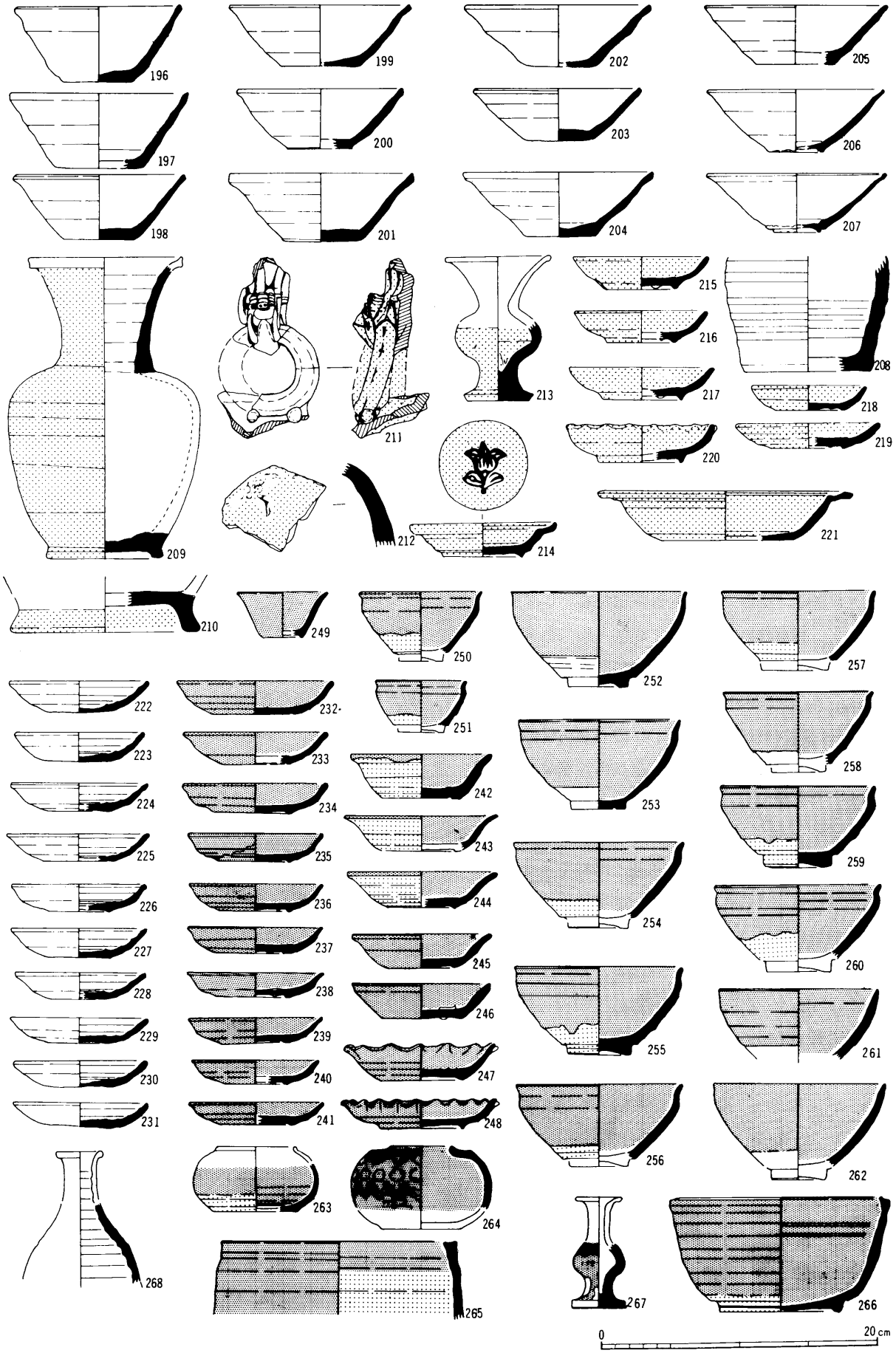
山茶椀C_2類（194～205）　C_1類に高台の付かないものである。胎土に１～２mmの長石を含むものも多く、中には器表に浮き上がっているものもある。195・202・203はＳＡ60盛土、198はＳＤ62埋土、199はＳＸ65北の石段上、201はＳＸ57盛土、204はＳＤ84上層、205はＳＤ85から出土している。第８型式。

山茶椀Ｄ類（206・207）　長石を含まぬきわめて精良な胎土の山茶椀である。ともに大畑大洞１号窯出土遺物に似.14世紀中期に比定されている。口径12.8～13.0cm・器高4.3～4.5cm。206は、ＳＸ65出土。

匣鉢（208）山茶椀と似た胎土をもつ。匣鉢ではないかと考えられる。底径9.2cmと小型で、内面にはロクロ挽き痕が明瞭にのこる。

灰釉瓶（209～213）　209は、長頸瓶で外面には灰釉がハケ塗りされ、露胎部が多い。内面には自然釉が見られる。口縁を欠くが推定口径11.0cm・器高21.5cm・底径 8.5cm。ＳＢ51南北トレンチ北端付近（34Ｅ区）、礎石面下約30cmで出土。折戸53号窯式に似る。12世紀初頭と考える。210は、瓶子脚部である。ＳＤ85付近で出土。211は、古瀬戸花瓶頸部の飾環で不遊である。28Ｇ・29Ｄ・29Ｅ（井戸掘形上層）の３ヶ所から出土し接合した。環外径７cm。212は、印花文の施される瓶子肩の破片である。ＳＤ85付近で出土。213は花瓶、内外面とも施釉が見られるが、剥離が著しい。底部糸切痕をのこす。ＳＤ46（26Ｆ区）出土。

灰釉皿（214～221）　214は、折縁の印花皿である。高台内に輪トチ痕があり、34Ｅ区、礎石面下30cmで出土。215～219はロクロ水挽きの後ヘラケズリで高台削り出しである。体部外面に稜線、内面に重ね焼の凹みがのこり高台脇とともに釉が溜る。高台内に輪トチ痕。218は、小型で口径8.5cm・器高1.8cm。219は、口径10.6cmの割に器高１.８cmと小さく、稜線も



第27図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その２）

（１：４）

多い。また底部内面は露胎であり、底部は碁笥底である。他は口径9.8～10.6cm。器高2.3～2.4cm。大窯Ⅱ期と考える。220は、ひだ皿である。胎土は多孔質で釉は剝離していないがつやがない。高台内に輪トチ痕が見られる。221は折縁深皿で内面及び体部外面まで施釉。ＳＡ60盛土出土。

無釉皿（222～231）　無釉の焼き締まり陶器皿である。胎土は緻密で暗灰色を呈す。底部はやや内反りで、糸切り痕を残し、内面には４条の突帯が回るが、重ね焼痕はない。くすんだ赤褐色ないしは茶褐色に発色している。口径10cm前後・器高２cm前後である。222はＳＢ31整地土中（35Ｅ区)、224はＳＤ84、226は焼土ＳＸ52、230はＳＢ51整地土下(礎石面下50cm、36Ｅ区）から出土。

鉄釉皿Ａ類（232～241）　灰釉皿(219)と似たタイプでロクロ水挽きの後ヘラ削り、体部外面に３本程度の稜線を持ち、底部は碁笥底に削り出している。内面はナデ調整。全面に施釉され茶褐色ないし黒褐色を呈する。高台内に輪トチ痕、底部内面に三叉トチ痕を残す。器高1.7～2.3cmと法量に幅がある。ただし232は口径11.5cmと大きく、区別すべきかも知れない。234はＳＫ69から出土。235は礎石建物整地土（34Ｄ区）から出土し、口縁に多量に煤付着しており、燈明皿として使用されたと思われる。

鉄釉皿Ｂ類（243～245）　Ａ類と比べて器高が高く、口縁が外反する。調整技法はＡ類と同様である。体部外面は化粧がけのものが多い。245は体部外面施釉、底部外面露胎という点で他と異なる。口径10.2～11.3cm、器高2.5～2.6cm。243・245はＳＤ64（43Ｊ区）出土。

鉄釉皿Ｃ類（246）　Ｂ類と異なり口縁部は外反しない。底部内面に三叉トチ痕、外面には輪トチ痕が残る。口径10.2cm・器高2.5cm。ＳＤ64（43Ｊ区)出土。

鉄釉皿Ｄ類（242）　Ｂ類よりもさらに器高の高いものである。技法等はＢ類と同様である。底部内面に三叉トチ痕が残る。口径10.3cm・器高 3.2cm。礎石建物整地土（35Ｅ区）出土。

鉄釉ひだ皿（247・248）　247は全面茶褐色をを呈し、内面に輪トチ痕を残す。248は釉のかかりが悪く、高台内側は化粧がけのみで、大窯Ⅲ期かと考えられる。247は口径11.2cm・器高 2.6cm。248は11.2cm・器高は 2.2cm。ＳＤ64（43Ⅰ区）出土。

鉄釉杯（249）　胎土は比較的緻密で淡灰色である。口径6.6cm、器高3.3cm。全面に茶褐色釉がかかる。大窯Ⅱ期と考えられる。ＳＢ51整地土（35Ｅ区）出土。

小天目茶椀（250・251）　ロクロ水挽きの後ヘラ削りを施す。化粧がけの後釉がつけがけされる。共に黒釉ないしは黒褐色釉で250の化粧がけは暗茶褐色を呈する。口径は250が9.0cm、251は6.6cm。

天目茶椀（252～262）　技法は小天目と同様である。高台は内反りと輪高台の二種があり、化粧がけを施すものとそうでないものとがある。口縁はおおむねＳ字状に屈折するが、261・262はほとんど屈折がなく、釉調からも新しいもののように感じられる。252も口縁の屈折乏しく、全体に大ぶりで、口径12.8cm・器高 7.0cmである。礎石建物整地土（34Ｅ区）出土。253は口縁がシャープで、高台脇の削り出しが見られない。中国天目写しで14世紀前半の産との御教示⑦を得た。ＳＥ82付近表土層出土。254～258は屈折が明瞭で体部が直線的なものである。口径11.0～12.5cm。大窯Ⅱ・Ⅲ期と考えられる。257はＳＤ64(43Ｊ区）出土。259・260は屈折が進み、口縁下がくびれるものである。260はＳＤ64（43Ｇ区）出土。

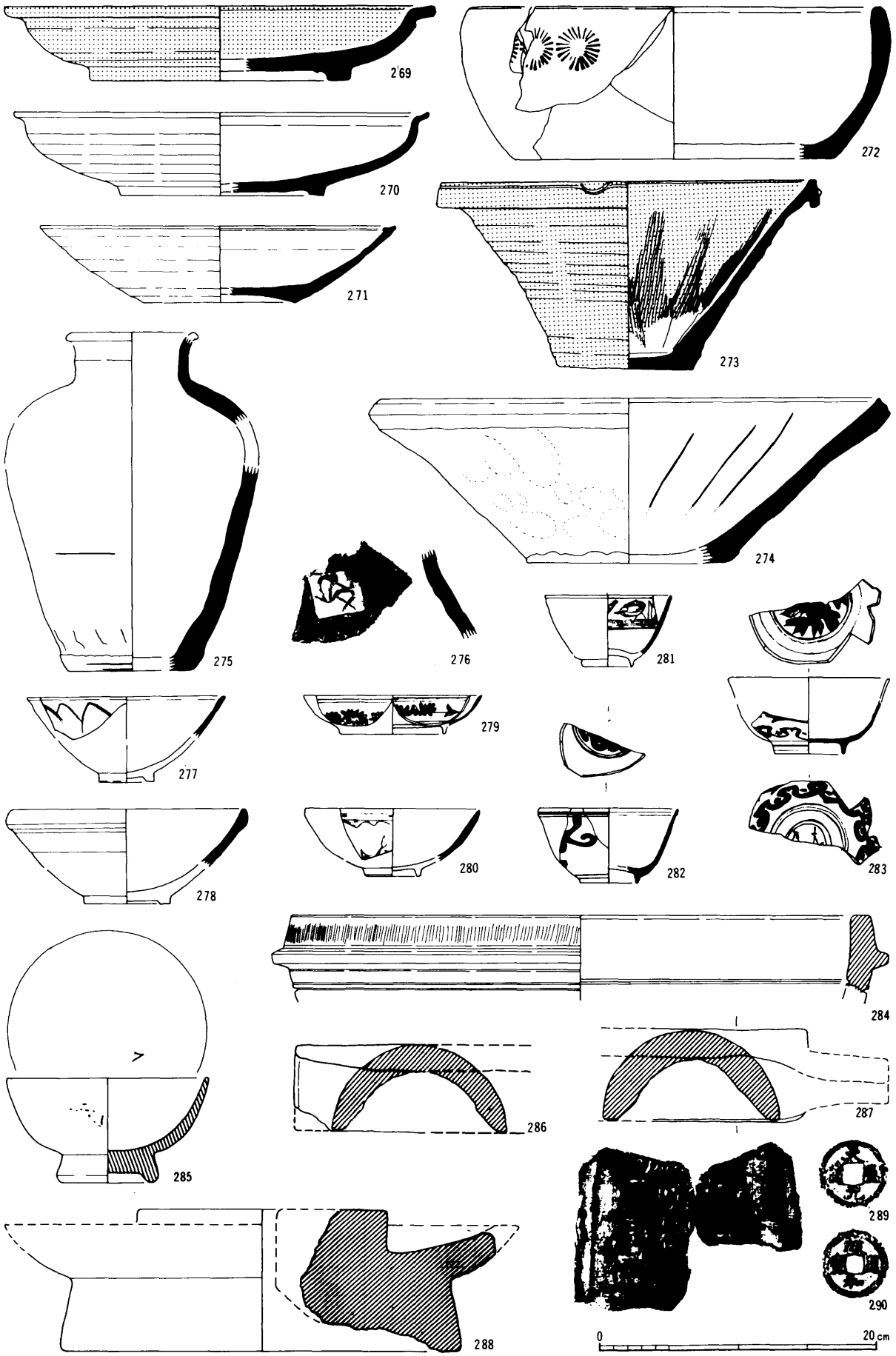
鉄釉茶入（263・264）　263は外面茶褐色、内面黒褐色を呈する。外面の胴部下半はヘラ削りされる。化粧がけは赤褐色である。底径6.0cm。ＳＤ64(43Ｊ区）出土。264は内外面とも施釉され、濁黄緑色を呈する。肩脇に釉溜る。蓮華文・亀甲文を配する。大窯Ⅰ期末頃か。39Ｅ区と42Ｊ区から出土。

鉄釉広口壺（265）　外面及び口縁部に黒褐色釉、内面は化粧がけされる。口縁はやや内傾し、端部が凹む。把手が付くかも知れない。推定口径17.1cm。

鉄釉鉢（266）　赤味を帯びた照りのある茶褐色釉がかかる。ただし、底部外面はヘラ削りされる。化粧がけは赤褐色に発色する。推定口径16.1cm、器高8.3cm、底径8.9cm。ＳＤ64（43Ｊ区）出土。

鉄釉花瓶（267）　飴釉がかかるが脚部付近から下は露胎である。底径 3.9cmで底部は糸切りである。

盤（269～271）　269は口縁下までヘラ削り、内面および口縁部はナデられている。高台内側・畳付は



第28図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その3）　　（1：4、289・290　1：2）

化粧がけで、他は内外面とも施釉されている。黄褐色を呈するが、まだらにはじけている。口径31.5cm・器高5.3cm・底径18.0cm。礎石建物面（34D・E区）で出土。石段脇小郭でも、同種のものが出土。270も269とよく似たタイプであるが、胎土は269が淡黄褐色でやや疎、焼成も軟質の印象を受けるのに対し270は胎土青灰色を呈しきわめて精良、硬質によく焼き締まる。器表は淡茶灰色を呈すが無釉であろう。SD64（43J区）を初め、SX97付近（47K区）49F区からも出土し、口径30.1cm、器高 6.0cm、底径14.5である。271 は他と異なり、水挽きの後ヘラ削りのままで、ナデは口縁を除き行なわれていない。器表の発色も同様である点で、いわゆる焼き締めとは趣が異なる。口径26.0cm・器高 5.6cm・底径11.0cm。礎石建物面（36E区）、35F・G区、31H区で出土。

擂鉢（273） 腰がすぼまり、やや外反気味に立ち上がり、縁帯は下がる。鬼板は青紫色を呈する。ただし底部付近は筋目と共に磨滅している。筋目は18本単位で16ヶ所あり、底部近くから一気に掻き上げている。口径27.0cm・器高13.5cm・底径 9.8cmで大窯Ⅱ・Ⅲ期と考える。SD64（43H・I区）出土。他にSB51整地土（36E区）、37G区、37J区サブトレンチ第2次整地土、SD84（39H区）などから出土。

その他（268・272、274～276） 268は備前の徳利[7]でいわゆるラッキョ徳利である。内面に水挽き痕が残る。胎土は暗灰色で、外面は赤味を帯びた茶褐色に発色。縦に2本傷入る、窯印か。 272は瓦質火舎で脚が付くであろう。口縁やや内傾し肉厚、丸味を持つ。体部上方に印花あり（径3.3cm）。口径29.8cm・器高10.8cm。SD64（43I区）出土。 274は常滑の捏鉢で、筋目入るも底部内面付近は摩滅する。外面口縁から下はオサエ、外面底部は未調整である。無釉で明赤橙色に発色。口径36.4cm・器高11.8cm。口径に対して器高が低く、16世紀前半代と考えられる。275は常滑壺である。胎土白灰色で小気孔が多い。内面は黒褐色微斑霜降り状に発色し長石微粒が浮く。内面頸部から外面肩にかけて自然釉がかかり、一部白濁化して流れる。D径 9.0 cm・器高24.3cm。13世紀と考えられる。SD64（43E区）他、42G区、44下で出土。 276は常滑甕で窯印が施されている。SX65上で出土。

(3) 磁 器

青磁碗（277） 明瞭な鎬蓮弁を持つ碗で、推定口径14.6cm。13世紀末～14世紀初頭頃と思われる[8]。SD84（40F区）より出土。

白磁碗（278） 口径17.4cm、の碗で黄灰色の釉がかかり釉には細かい貫入がある。13～14世紀と考える。

染付碗（279～283） 279は口径13cmで、口縁部は外反せずに胴部は丸味を持つ。体部内外面には、蔓草が、口縁には界線、見込には圏線がめぐる。SB51礎石面上（37E区）から出土。 280も口径13.6cmで、口縁部は外反しない器形で比較的厚く釉がかかるが、染付そのものは淡い。 281も口縁部が外反せず、外面には染付は見られない。口径9.4cm。282は口径10cm、器高 5.3 cmで、口縁部内外面と高台脇に界線が各2条めぐる、体部外面に獅子と思われる文様が、見込には重圏線が描かれている。底部は饅頭芯である。283は底径5cmで、高台内に「大□年□」と記されている。染付の色調は淡く、 280に共通する。これらの染付は、小野正敏氏によれば染付碗C・D・E群、染付皿E群に分類され、その年代は15世紀末頃から16世紀中頃とされている[9]。以上いずれも礎石面から浅い所で出土している。

(4) その他

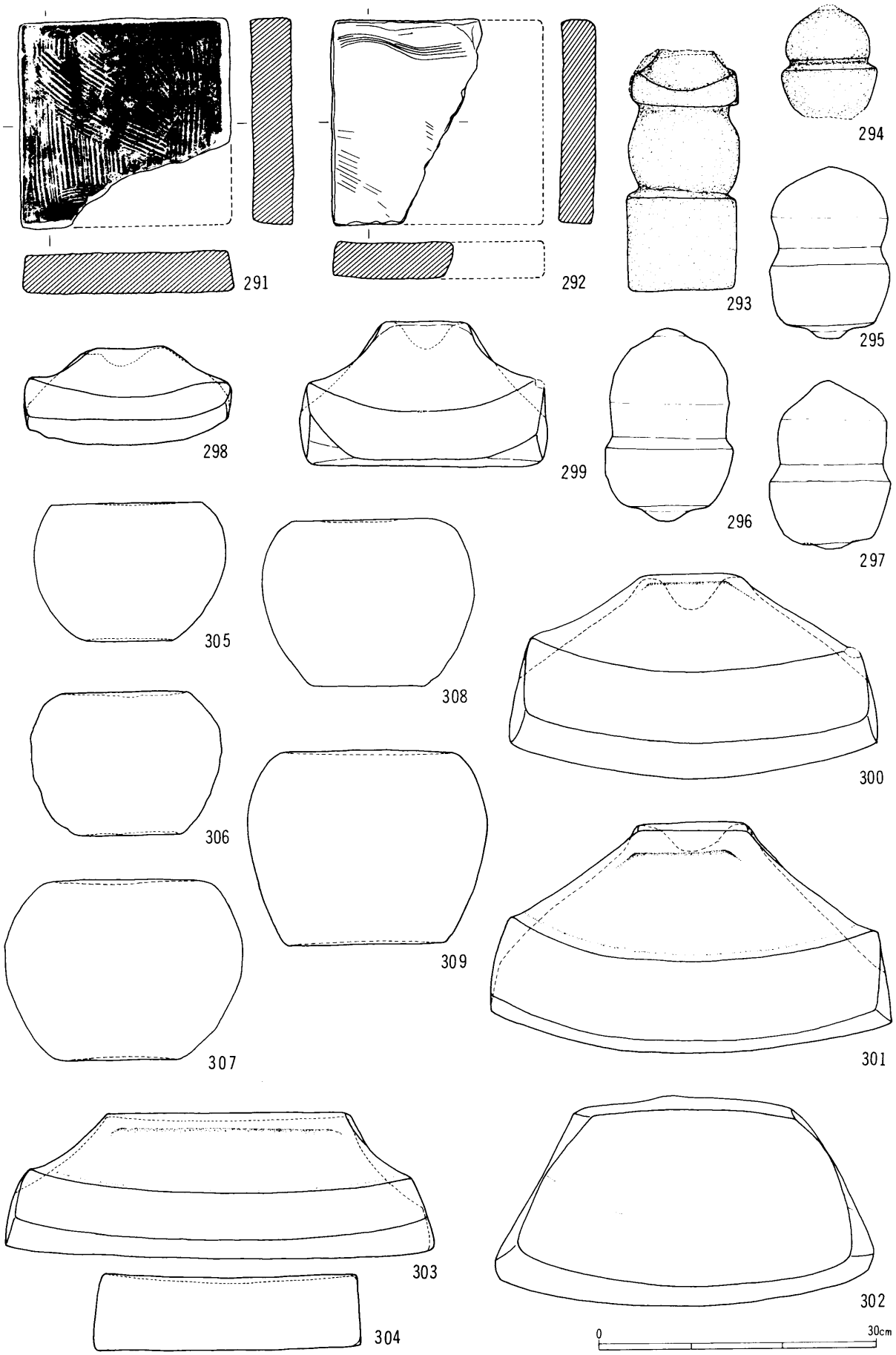
石鍋（284） 滑石製品で、口径42cmの大形品である。口縁部下に断面が台形の凸帯がめぐる。口縁部内外面に沈線が1条見られる。SD64から出土[10]。

漆椀（285） 口径14.5cm、器高 7.5cm、全面黒漆がけ。見込みおよび体部外面に一部赤漆が残る。38D区から出土した。なお、図版のトーンは木目方向を表わしている。

瓦（286・287） 共に内面に布目を持つ丸瓦で有段と無段の二種類がある。胎土は小気孔が多くやや疎である。焼成はやや軟質で青灰色を呈する。 287はSK79から出土。

臼（288） 茶臼の下臼である。ごく一部しか残っていないが、器高10.1cm、推定摺面径18.0cm、同底径28.7cm。SD46から出土。

銭貨（289・290） 289は天聖元宝（真）、290は政和通宝（真）で48枚重なって出土した。他は判読出来ない。孔中に繊維物残り、通紐と考えられる。



第29図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その4）　（1：6）

塼（291・292）　瓦質であり、器表は黒灰色を呈する。断面は、外側が淡黄灰白色、内部暗灰色で焼成の状況を示している。両者片面のみ筋目がつく。291は10本程度の単位の工具による。292はかなり摩滅している。291は23cm×22.4cm×4.4cmで、ＳＤ72から出土。292もほぼ同じ大きさでＳＥ48掘形から出土している。

(5) 石造物

材質は293・294のみが砂岩で、他は花崗岩である。

一石五輪塔（293）　空風輪を欠く。底辺11.3cm、高さ25.6cm。ＳＥ48埋土から出土。

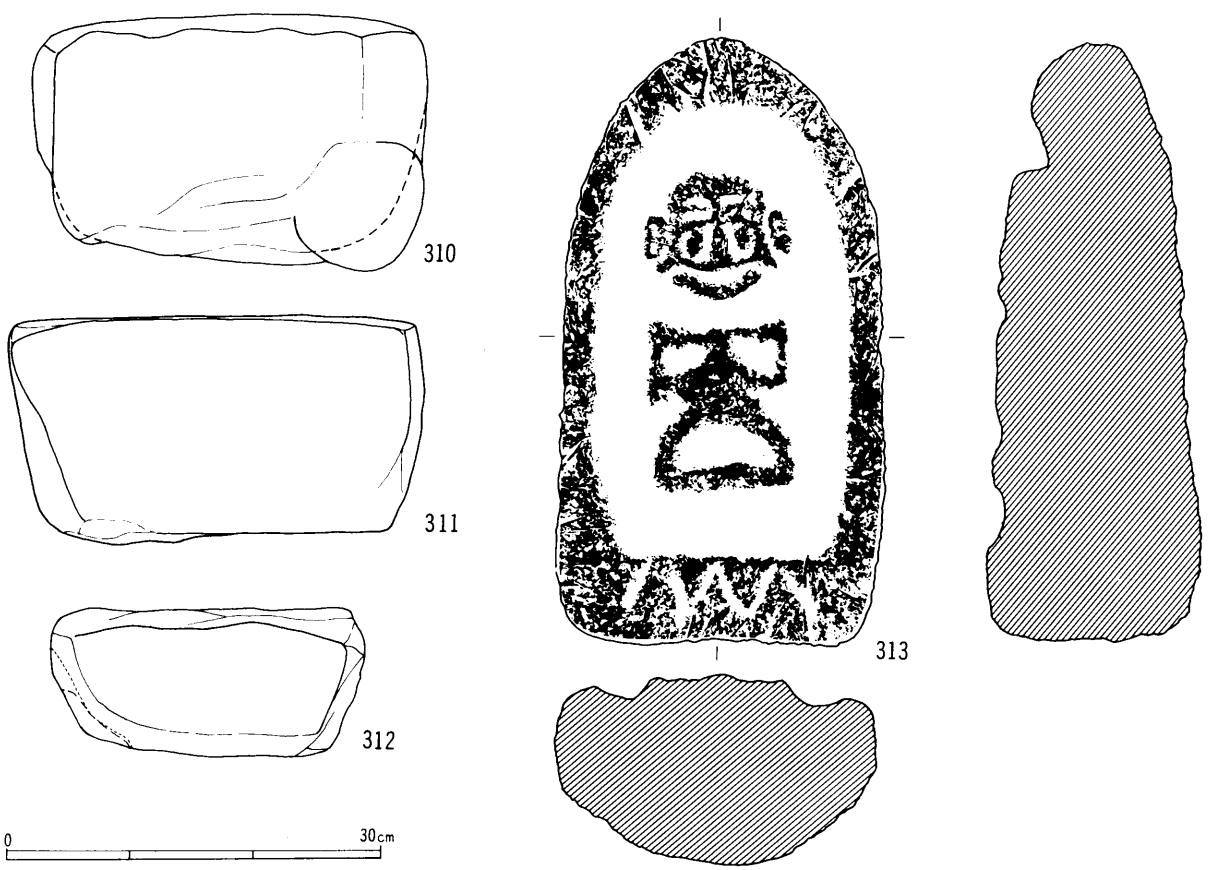
空風輪（294～298）　砂岩製の294は小ぶりで、径10.3cm。他は径13.0～13.7cm、高さ18.0～20.4cm。297はＳＥ82の埋土から出土。

火輪（298～302）　298は一辺22cm、高さ10.2cm。ＳＸ57東下端出土。299は一辺25.6cm、高さ15.5cm。底面は反らず、四隅に面とりを施し反りを表現している。300・301は共に大型で、上面近くにわずかな線刻が施される。301は同様の縁どりも施される。300は一辺36.8cm、高さ21.8cm、笠の厚み7.5cm。301は一辺41.4cm、高さ23.7cm、笠の厚み8.4cmである。共にＳＤ64（43Ｈ区）から出土。302は当初地輪とも考えたが、底面の反りおよび調整から、火輪の未製品ではないかと考える。一辺40.8cm、高さ22.4cm。天地逆にしてＳＸ59に転用されていた。

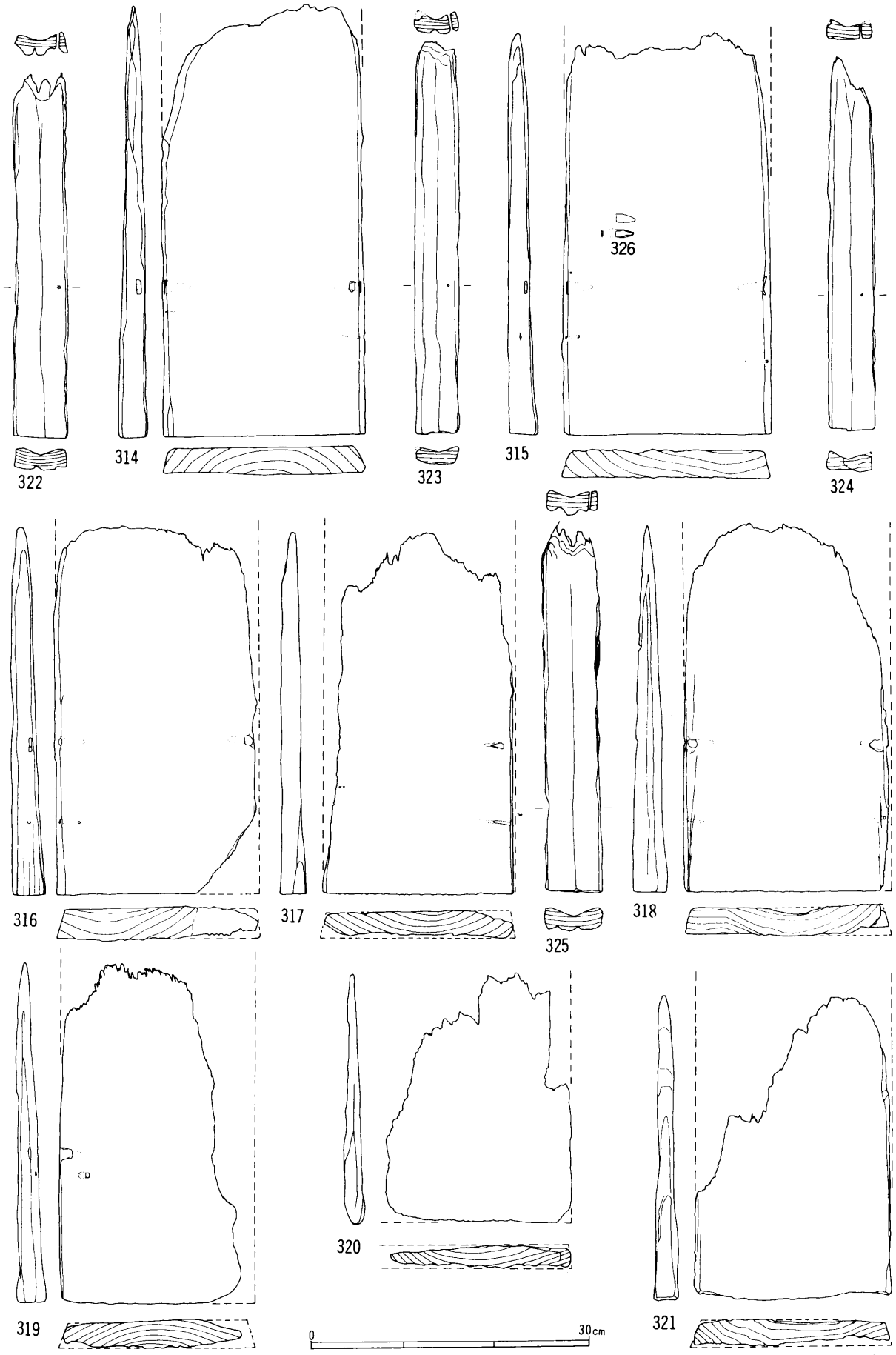
水輪（305～309）　305は最大径20.5cm、高さ14.9cm。ＳＤ83から出土。306は最大径20.4cm、高さ15.3cm。307は最大径25.4cm、高さ19.2cm。308は最大径22.8cm、高さ18.0cm。309は最大径25.6cm、高さ20.8cmであり、306～309まで全て39Ｅ区第１次生活面から出土している。

地輪（310～312）　310は一辺30cm、高さ20cm、底部は凹凸多く、殆んど未加工である。天地逆にしてＳＸ59に転用されていた。311は一辺32.4cm、高さ17cm、底部もよく調整されている。ＳＸ65西の水溜から出土。312は一辺24cm、高さ11.6cm。小ぶりで底部が雑である。ＳＥ82北凹地から出土。

層塔（303・304）　共に丁寧に仕上げられている。笠石の方は、301と同様の線刻が施されている。一辺44cm、高さ15.7cm。36Ｆ区第１次生活面から出土。304は水輪の上面同様、笠の反りに対応すべくやや凹む。一辺28.5cm、高さ7.6cm。ＳＤ72（35Ｅ区）から



第30図　Ⅶ郭出土遺物実測図（その５）　（１：６）



第31図　ＳＥ82　木枠実測図　（1：6）

出土。

石仏（313）　蓮華座に結跏趺坐し合掌する石仏である。高さ48cm、幅25.6cm、底部厚み16.8cmである。ＳＸ65の石組に転用されていた。

(6)　木製品

井戸木枠（314～326）　ＳＥ82の材で、厚さ３cm、幅21cm、高さは掘形の深さから１ｍ程度と考えられる矢板状の板材（314～321）と、断面がくの字形の目板（322～325）とがある。326は両者を結ぶ竹の合釘である。

３．小　　結

出土遺物からⅦ郭は大きく３時期に分けられる。ただし、遺構的には検出段階でも２時期に分けてしか検出し得ず、土層観察においても両次期の生活面しか確認し得なかった。遺物における３時期とは、第１期、山茶椀Ａ・Ｂ類（第４・５型式）を中心とする時期で12世紀後半、第２期、山茶椀C_1・C_2類（第７・８型式）を中心とする時期で13世紀後半、第３期、大窯Ⅱ期を中心とする時期で16世紀30～50年代、である。以下、新しい順に追ってみると、

第３期の遺構はＳＢ51を中心とするものである。厳密には、ＳＢ51整地土に含まれる大窯Ⅱ期製品の量から考えて、ＳＢ51は第３期初頭には存在せず、遅れて建設されたと考えられる。ＳＢ51に伴う遺構として、ＳＸ59、その脇の小郭及びＳＸ58が挙げられよう。同時にＳＸ65が築かれ、その際ＳＤ86は廃され、代ってＳＤ62が掘削された。ＳＤ62は山の裾に沿ってめぐり、湧水の滲出を防いでいるのである。ＳＤ62によってＳＸ57の南辺は削られ、ＳＡ60は断たれた。またＳＥ48もこの時期と考える。第３期当初からあった遺構としては、ＳＥ42、ＳＸ43・44、ＳＸ55、ＳＤ86などを考える。

第２期の遺構の明確なものはＳＤ84である。したがって、ＳＤ84に連続するＳＥ82、ＳＤ83・85もまた同期と考える。ＳＤ84は遺物も少なく、一度に埋め戻されたと考えられる。その時期はＳＢ51・ＳＸ59築造の時点であろう。ＳＡ60・61、ＳＤ64もまたこの時期と考えている。ＳＡ60・61はＳＤ62に断たれるまでは一連のものであるし、ＳＤ64はＳＡ60と対になって掘削されたものである。ＳＤ84と異なり、ＳＤ64が豊富な遺物を出土しているのは、手入れもされず開口し続けたからである。ＳＤ62によってＳＡ60が断たれてからは、43Ｉ･Ｊ区付近はゴミ捨て場のような有り様であったろう。どうもこの時期、ＳＡ60以南は見捨てられた空間だったようである。この事はⅧ・Ⅸ郭から大窯製品がほとんど出土しないという状況と軌を一にしている。その他、ＳＢ66、ＳＤ67・72、ＳＸ73などもこの時期ではないかと考える。ＳＢ66はＳＥ48によって礎石を失っている。明確には検出されなかったが、この時期の遺構としてセクションに把えられたピットがある。掘立柱建物が建てられていた可能性があろう。

第１期の遺構は、第２期以後の改変によってほぼ消滅したようである。ただし、遺物の量としては相当量出土しているので、判断に誤まりがあるかも知れない。一応第１期と考えるのは、ＳＤ84に切られたと思われるＳＡ80と、それに平行し、ＳＫ89の方向性と合わぬＳＸ91の２つである。ＳＸ91はⅩ郭のＳＸ101と似ており、ＳＸ91を肩とするような平坦面を第１期面と想定出来るかも知れない。

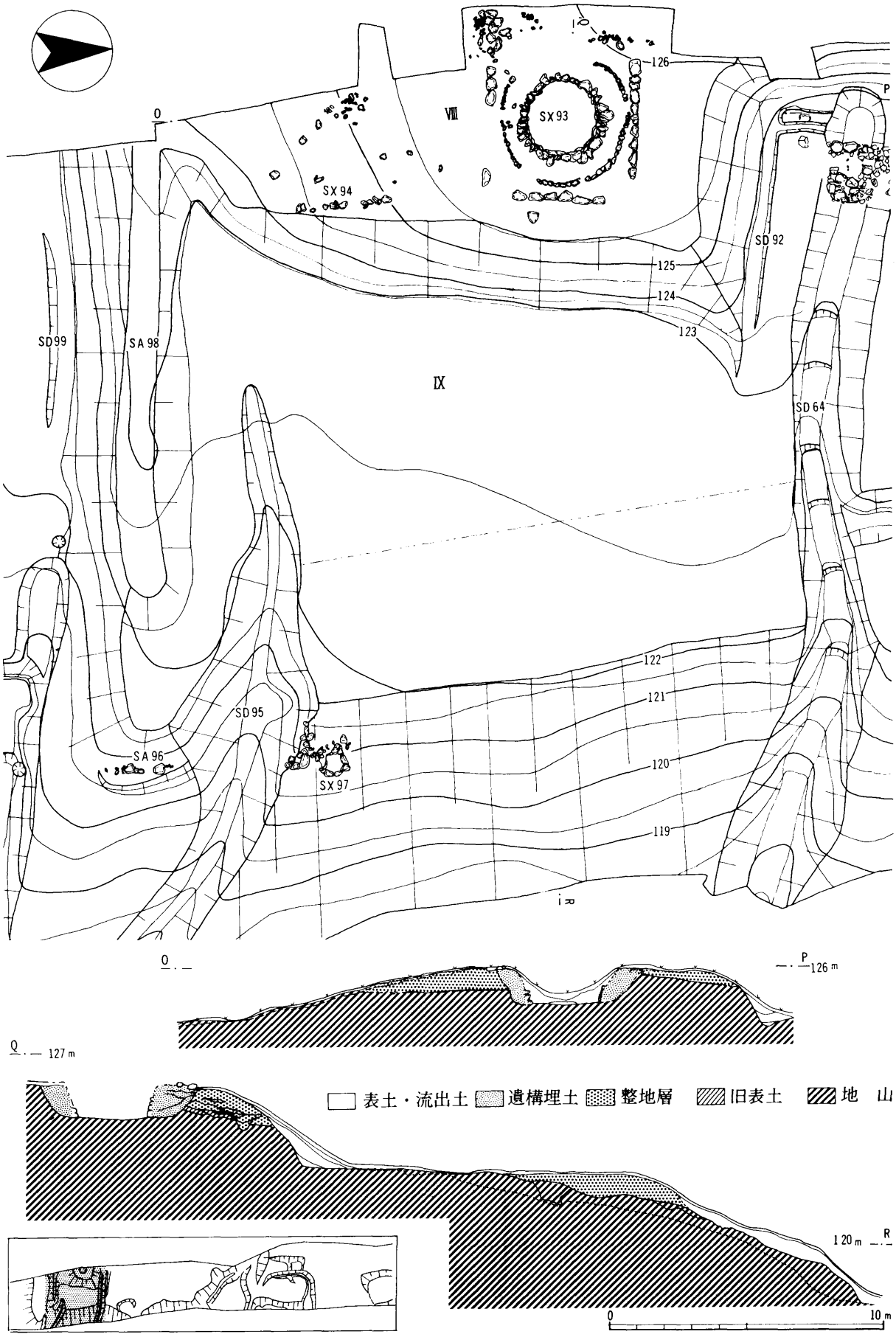
５．Ⅷ・Ⅸ郭

１．遺　　構

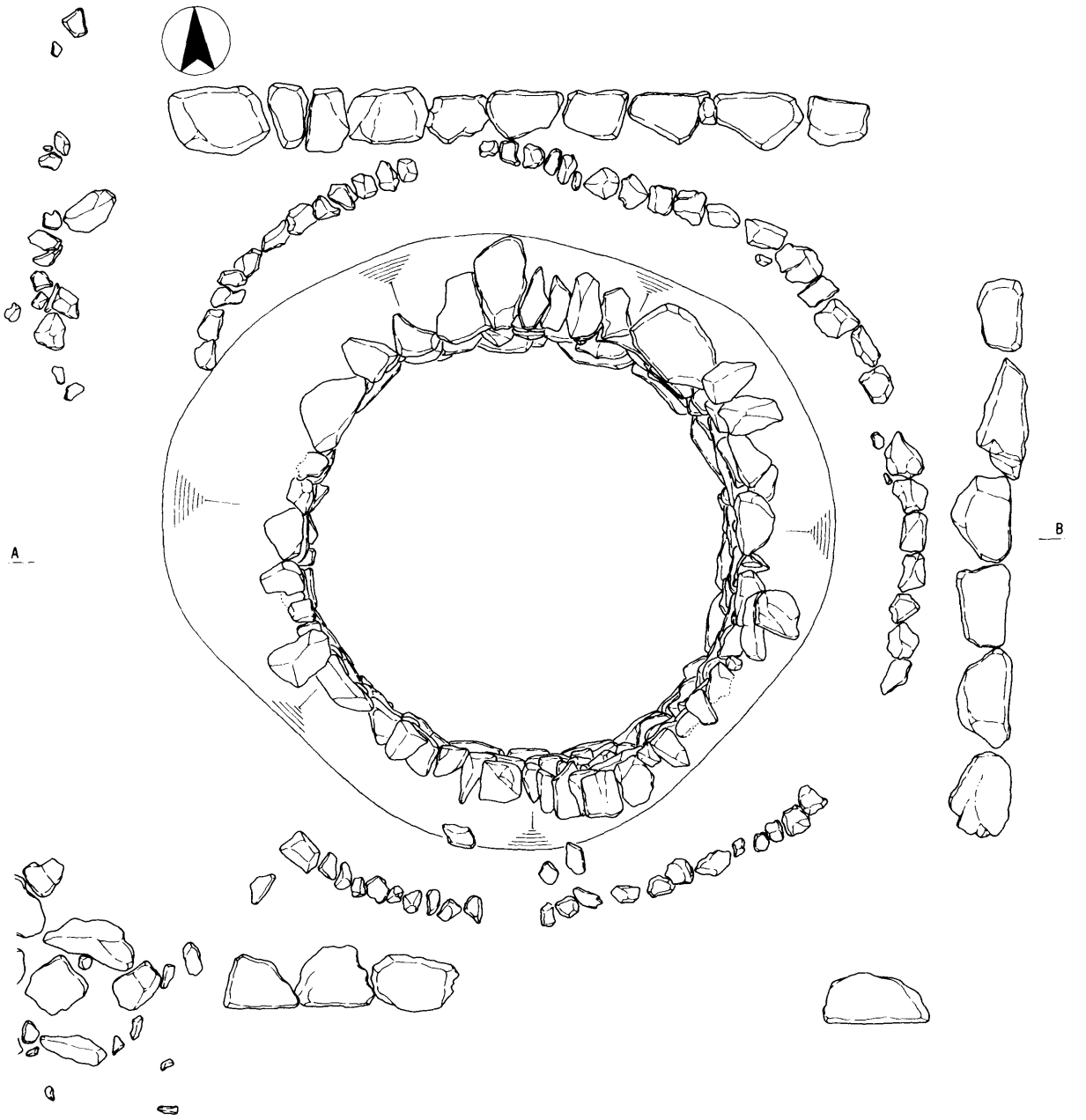
ＳＤ64によってⅦ郭と、ＳＡ98によってⅩ郭と画される25m四方の独立した空間である。東側は25度の傾きをもつ斜面で、落差は約８ｍある。

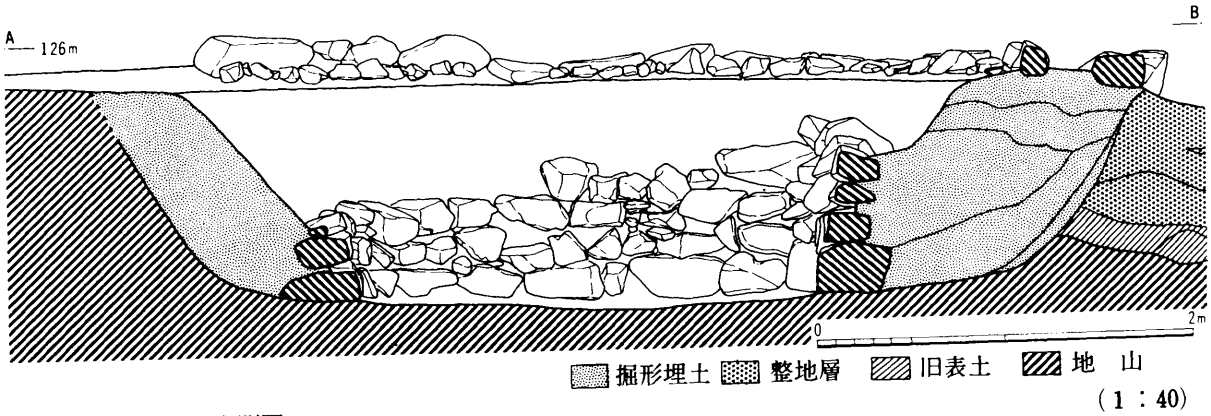
Ⅷ郭は北と東に約60度の急傾斜をもつ土壇であり、土壇上には納骨施設ＳＸ93が設けられている。南側は10度の緩斜面で、通路に用いられたと思われる。ただし、Ⅸ郭との連絡部に石段等の適切な遺構は認められなかった。

Ⅸ郭はⅧ郭の前庭部を成す平地であり、隣接するⅦ郭下層（特にＳＤ84以南）とは同一レベルである。



第32図　Ⅷ・Ⅸ郭遺構配置図　　（1：200）





(1：40)

第33図　ＳＸ93実測図

地山が高位置にあるため、平面でも容易に整地土との境を確認する事が出来た。(一・一部)しかし、この良好な平坦面に遺構は皆無であり、遺物も乏しい。Ⅶ郭とはⅧ郭北の犬走りとＳＸ65で結ばれる。

背後に山頂への山道があるが、当時からのものか断定しかねる。総じて閉鎖性の強い空間と言える。

ＳＸ93　納骨施設である。外側に長径50cm程の平石を配し、面は外側を揃えている。一辺約5.6ｍの方形で、西辺には一石も残っていなかったが、本来あったものと思われる。その内側に拳大強の礫が径約4.6mのいびつな円形に並べられている。さらにその内側に円形の石組土坑が設けられる。上部はかなり転落していたが、深さ1.3m、底径2.5mである。土壇上は堆積土が少なく、土坑底の堆積も40cmに過ぎず、調査前から大きく凹んでいた。土坑石組の上部は露出しているものすらあった。おそらく当初から埋設はされなかったものであり、何らかの覆屋を考えなくてはならない。蔵骨器は４点確認され、１点は完形であった。(327～344)

ＳＸ94　ＳＸ93へ到る参道の肩を示す石列である。拳大の石を並べており、面は揃えていない。西側には認められなかった。

ＳＤ92　土壇北下端に沿う浅い溝である。土壇東には認められなかった。

ＳＤ95　現在もなお山頂へ登る道として、「中坂」と呼ばれている部分で、一見Ⅸ郭へ到る通路のようであるが、ＳＸ96を切って造られている点、ＳＤ100・64とは対照的に埋土が皆無に近い点などから、きわめて新しいものと思われる。

ＳＸ96　東面する石組である。ＳＸ97脇で西に折れる。二段程しか残っていないが、本来はさらに積んであったのかも知れない。性格等不明であるが、ＳＸ97と関連を持つ施設であろう。ＳＤ95によって切断されている。

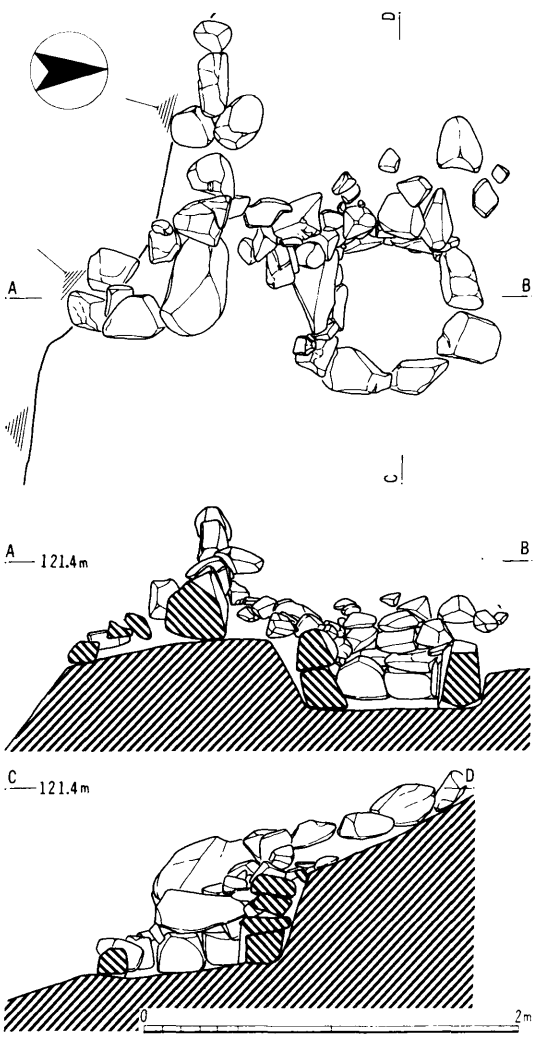
ＳＸ97　斜面に設けられた石組のカマドである。床に少量の灰が堆積していた。東斜面からは、土師器皿(365～367)、土師器鍋(371、372)、山皿(368、369)、擂鉢(370)などの日常雑器が出土しており、ＳＤ64と同一個体も多い。

ＳＡ98　Ⅸ郭とⅩ郭の境界をなす土塁である。Ⅸ郭からの比高は0.5mで、それほど高くはないが、Ⅹ郭からは２ｍある。

２．遺　　物

(1)　ＳＸ93遺物

蔵骨器(336～339)　336は古瀬戸三耳壺である。ＳＸ93の南端近くで、ほぼ土坑底に接する状態で出土した。完形である。傾いていたものの、土砂の侵入は頸部までで、それを除くと肩までは空洞の状態で、内容物の遺存状況は良好であった。釉は殆んど剝離している。輪積みの後、内面は押サエ、外面はヘラ削りしている。口径12.0cm・器高29.6cm・底径10.5cm。大安経塚出土の四耳壺に酷似している。14世紀前半と考える。337・338・339はより上層で散乱して出土した。器壁に骨片が付着している事によって本来蔵骨器であると考えられる。337は古瀬戸四耳壺である。ただし頸部から上は見出せなかった。釉は



第34図　ＳＸ97実測図　　(１：40)

殆んど剝離している。輪積みの後、肩や頸部に施された押サエが明瞭にのこる。外面はヘラ削りである。底径9.2cm。14世紀初と考える。338は古瀬戸瓶子である。頸部は故意に割っており、割れ口は磨いてある。骨を納めるためであろう。青灰色の釉は剝離していないが、内面器壁はかなり剝離している。底部の貼り付け、内面のナデ、押サエも明瞭である。底径8.5cm・器高推定27.3cm。14世紀前半と考えられる。339は常滑壺と考えるが、焼き締らず器表は荒れている。胎土は砂粒を少々含み、淡橙色を呈する。肩に二条のヘラ刻みあり、窯印と思われる。内面下部と頸部に押サエ痕がのこる。口径13.8cm・器高21.5cm・底径 9.5cm。13世紀末～14世紀と考えられる。

土師器皿（327～330）　口径7.9～8.6cm・器高 1.4～1.8cm。327～329はやや薄手であるが、一応B_1類とする。共に口縁部はナデツケられているが面は持たない。胎土は砂粒を含み、淡黄白灰色を呈する。330は非常にいびつであるが、327～329より一廻り大きい。

山皿（331・332）　331は口径に対し底径がまだ小さいが一応第８型式とした。内面底部強くコロシ。口径8.0cm・器高1.7cm。332はＤ類。長石を含まぬ精良な胎土で薄く作られている。口径8.7cm・器高0.8cm・底径7.0cm。大畑大洞３号窯出土遺物に似る。

おろし皿（333）　底部近くまで灰釉がかかる。おろし目の間隔 2.5～５mm、底部は赤褐色に発色する。糸切り痕がのこる。底径 6.6cm。胎土は灰白色を呈する。

灰釉花瓶（334）　数ヶ所に灰かぶりあり。底部に糸切り痕がのこる。頸部内面に成形の際のねじれがある。底径は4.7cm。

瓶子脚部（335）　底部外面にも灰釉がかかる。脚部を水平に割り、割れ口を磨いている。二次使用したと思われる。内容物は小石と鉄片の他残っていない。底径11.5cm・器高 6.4cm。

砥石（344）　材質は粘板岩。７×４×1.2cm。0.5～１mmの深さの穴が２点刻みこまれている。

釘（340～343）　鉄製角釘。残存長は各14.5、8.5、5.8、7.7cm。太さは幾種類かあるようであるが、敲打部はいずれも折り曲げている。他に７～８本分出土している。

(2)　Ⅷ郭上遺物（土坑外遺物）

土師器皿B_1類(345)山皿C_2類（346）の他常滑二筋壺（347）が出土した。347はＳＸ93東南１ｍ程の礫散乱地点で出土。外面には自然釉がかかり、黄暗灰色に発色している。肩付近は灰をかぶり緑灰色を、内面は茶褐色を呈する。口縁部と底部を欠くが、口縁はほぼ水平に割れており、故意のものと思われる。これもまた蔵骨器として使用されたものであろうか。12世紀末のものと考えられる。

(3)　Ⅷ郭流出土中遺物

土師器皿（354～357）　底部に糸切りを持つＡ類(357)、やや底部が厚いが、口縁にヨコナデ面を持つB_3類(356)、きわめて薄く作られたD_1類(354・355)などが出土している。

山皿（349・358）　口径に対して器高の高いＢ類(358)、扁平化し口縁の四角くなるC_2類（349）の両方がある。

山茶椀（350・351）　体部が直線的に立ち上がり、高台が付かないC_2類である。

天目茶椀（352・353）　352は口縁の屈折弱く、端部やや尖る。腰部以下は露胎。胎土は淡灰色。高台脇は無いようである。口径11.0cm。353は口縁Ｓ字状に屈折。腰部以下にも化粧がけが施される。

長頸瓶（359）　頸部内面には成形の際の螺旋状隆起残る。内外面共施釉され、黒褐・茶褐・黄緑褐が斑状になる釉調である。銅釉が混じるのであろう。口径 6.5cm。

砥石（360）　材質は粘板岩。滑らかな使用面は凹状にならず、逆にやや凸状となっている。7.0×3.4×0.8 cm。

(4)　Ⅸ郭及びⅨ郭東斜面遺物

土師器皿（365～367）　薄手で体部に屈曲を持つD_2類（365・366）とB_3類（367）とがある。365は口縁に３cmほどにわたって煤が付着し、燈明皿として使用したと思われる。

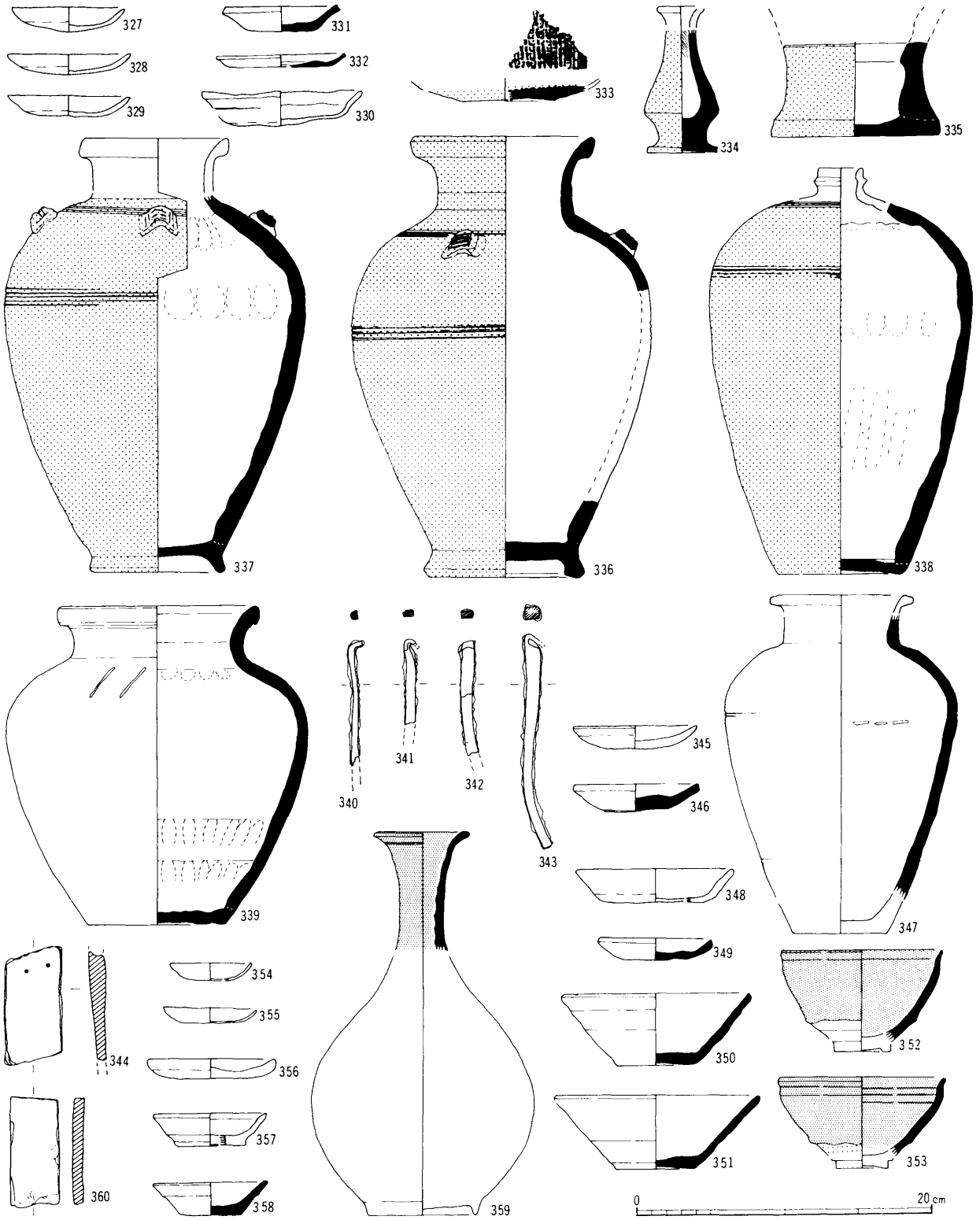
土師器鍋（371・372）　371は口径18.9cm、器高 3.7cmの浅い鍋で、やや肥厚する口縁端部は断面三角形となる。体部内面にハケ目が見られる。372は口径39cm、器高11cm余で 371に比べ大型品である。口縁部はやや受口状となり、外面は全面ハケ目調整され、煤が付着している。

山皿（361～363、368、369）　368がＢ類である他は

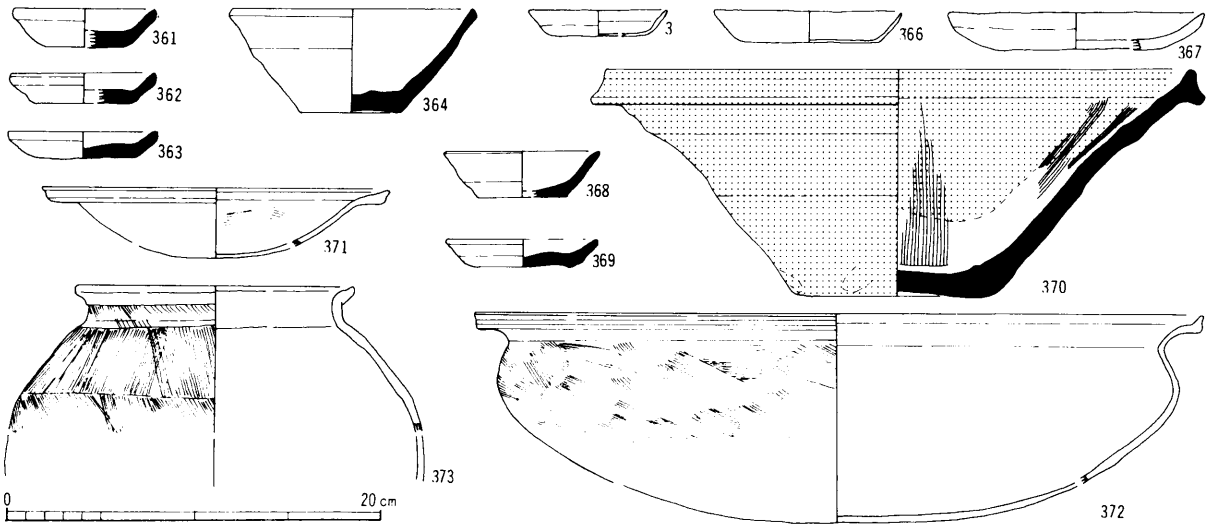
C_1類に属すと考えられる。

山茶椀（364）　胎土に4～5mmの石が混り、1～2mmの長石が噴く。内面底部に強いコロシがあり体部外面にヌタ痕が残る。

擂鉢（370）口径31.5cm、器高12cmの大形品で外反ぎみに開く口縁部の先端部は、断面三角形となる。鬼板のかけ方は雑であり、外面底部付近に指圧痕がある。内面底部周縁にハケを強く押し当て、そこから口縁に向って一気に掻き上げている。その圧痕から9条のハケ目が確認される。工具幅は3.1cmで14本単位である。内面底部を中心に相当摩滅しているが、同一工具で内面底部にX状にハケ目をつけているの



第35図　Ⅷ郭出土遺物実測図（ただし348～360は流出土中）、SX93（327～344）　（1：4）



第36図　Ⅸ郭出土遺物実測図（ただし365～373はⅨ郭東斜面）　（1：4）

がわかる。47K区以外にSD64（43I・J区）からも同一個体が出土している。

3．小　　結

納骨堂SX93を中心とした墓域であろう。時期的には13世紀末から14世紀初頭と考えられる。Ⅸ郭という平坦面をどう把えたらよいのか、Ⅶ郭上層の時期になぜ手が加えられなかったのか、斜面の日常雑器と遺構との関係は、などの疑問が残る。

6．Ⅹ郭ほか

1．遺　　構

SA98によってⅨ郭と画され、SX 101を肩とする6m×20mの細長い、Ⅸ郭の付属的郭である。SA98との落差は約2mあるが南斜面は緩やかで、隔絶性は乏しい。なお同所以南の平坦面において2m×25mのトレンチを二本入れたが、明瞭な遺構は確認されなかった。ただし、東トレンチ南に、幅2m×高0.2mのきわめて低い土塁が約20m延びている。

SD99　SA98の下端に沿う浅い溝であるが、排水の行方は明らかではない。山茶椀（377・379）が出土している。

SD100　SA98の東南裾でこれと平行して検出された堀である。SA98の東端付近から東へ約15m延びる。上端部は広いところで幅3m、下端部は1m、深さ1.1mある。流路に直交して段が2段造られ、中段は方形に張り出し、下段との境に径20cmの一対のピットがある。堀は埋土の状況から一気に埋められたと考えられる。遺物は乏しい。

SX101　Ⅹ郭の肩をなす長さ9mの石列である。石の面・大きさは不揃いであるが、比較的大きな石を使用している。石がかなり欠落する個所があるが、当初からなかったのかも知れない。Ⅹ郭整地の土留めの役割を果していたと考えられる。

SX102・103・104　いずれも不整形でかなり雑な石組遺構である。周囲から五輪塔が多く出土したことから、墓域雛壇の石垣とも考えられる。394～396、397～399、401（ただし394、399、401は表採、他は出土）

2．遺　　物

(1) 土師器

Ⅲ（374、381、392）　器厚がほぼ均一で、平底から丸味をもって立ち上がる374(B_2類）と体部から外反していく点やや異なるが、C_2類に近い392、底径が広がり体部に屈曲をもつ381などがある。

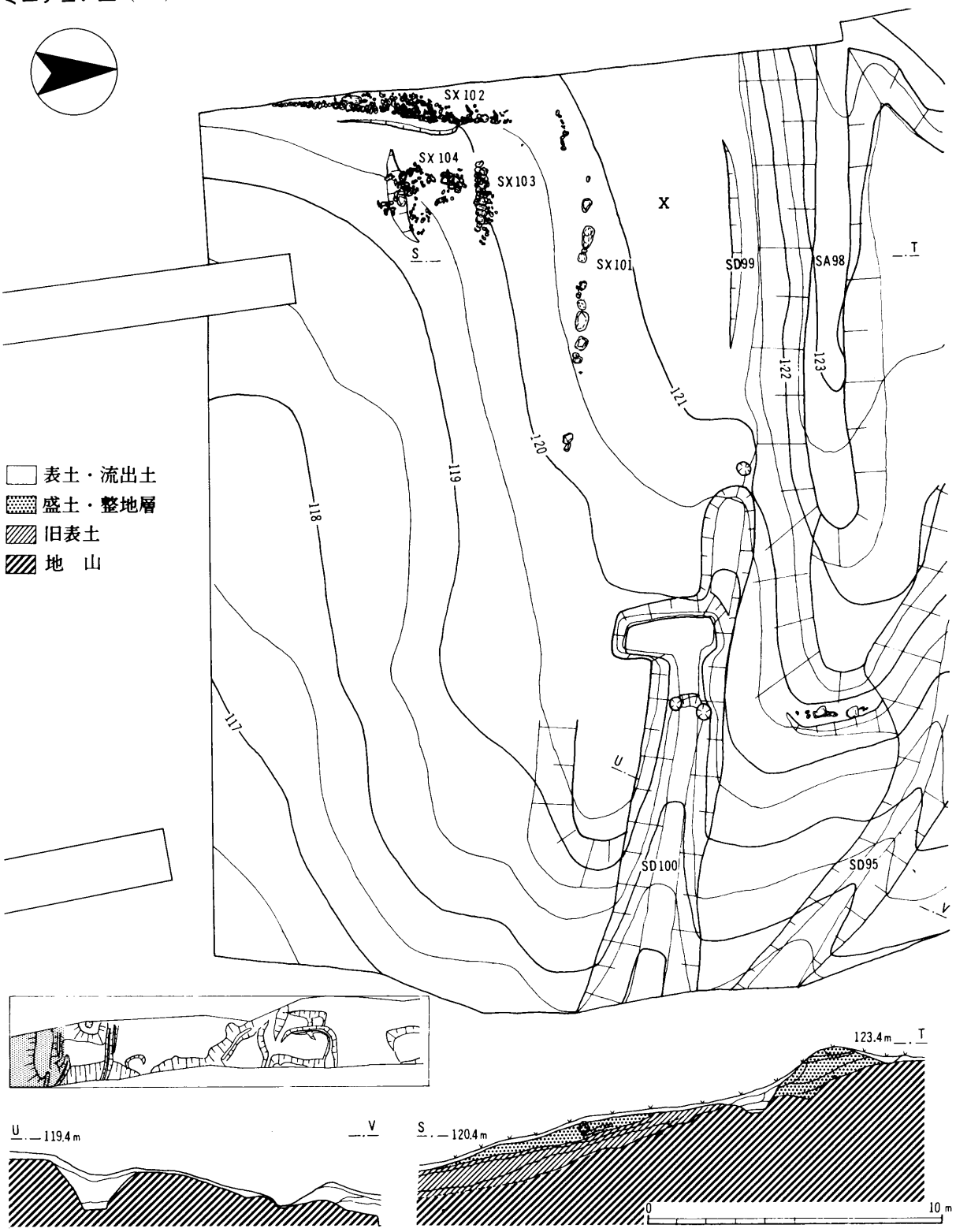
台付杯（375）　底部には静止状態に近い糸切り痕が残る。底径5.5cm、12世紀頃と考えられる。

(2) **陶器**

山皿 (376・383)　扁平化しているが、口縁断面はまだ四角くはなっていない。共にコロシは明瞭である。C_1類に属する。口径8.0～8.2cm、器高1.6～1.7cm。

ミニチュア皿 (382) 口径3.2cm、器高0.7cm。一応ロクロを使用している。山皿と同じ胎土、内面は自然釉がはじけている。ＳＸ102から出土。

山茶椀Ａ類 (388～391)　西トレンチ北端 (54Ｇ区) で一括出土した。口径16.0～16.8cm、器高4.8～5.6cm。口径・器高・腰の張り等は共通するが、391のみは口縁下のくびれがほとんどなく、内面底部が大き



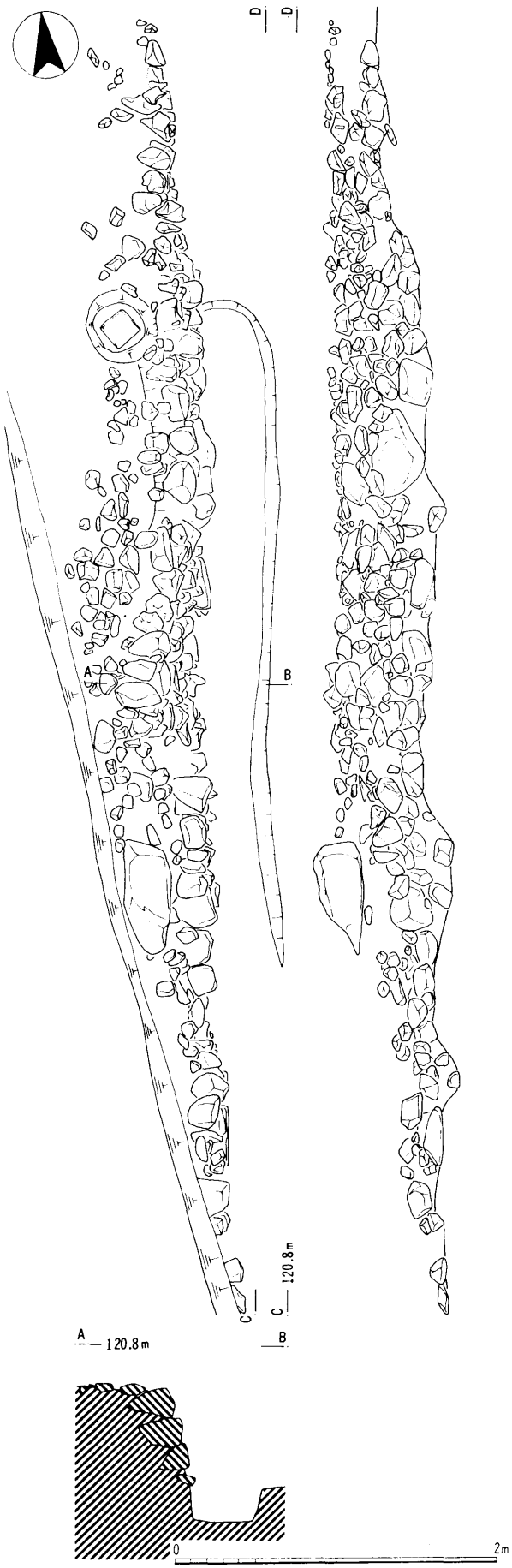
第37図　Ｘ郭遺構配置図　(1：200)

く凹んでいる点他と異なる。少し新しいかもしれない。他は第４型式と考える。388以外は高台は潰れている。

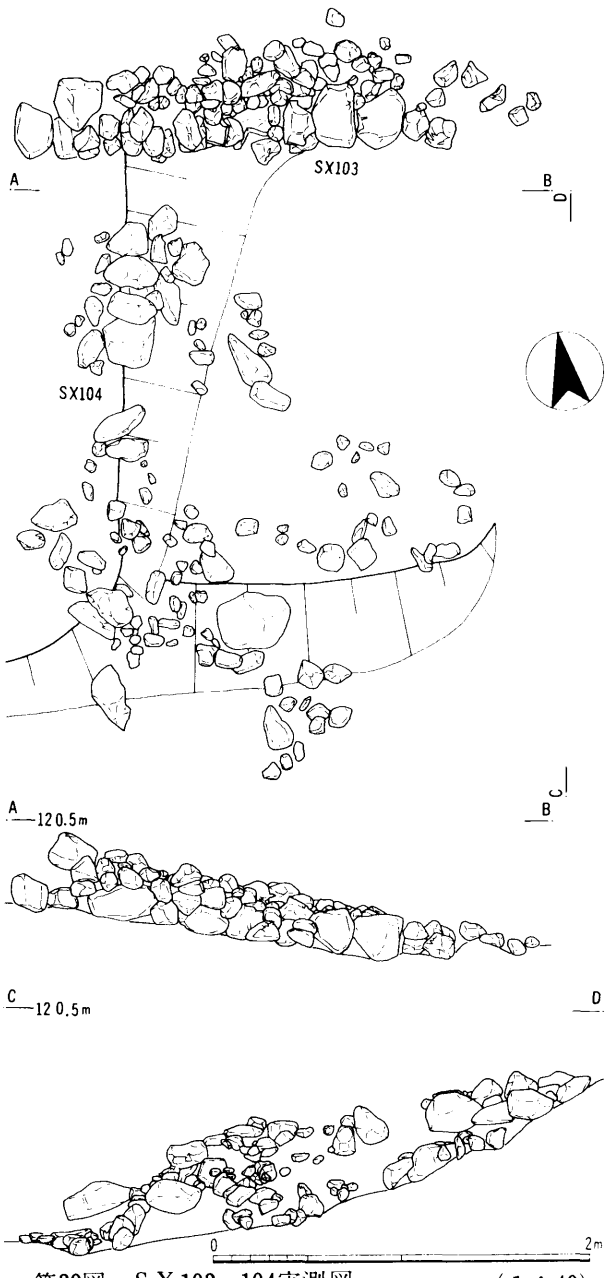
山茶椀C_1類（377・378・384）　C_1類としたが、高台はいずれも完全に剥離している。２～３mmの長石を含む。384は腰部にふくらみを持つ。377はコロシが顕著に残る。377はＳＤ99から出土。

山茶椀C_2類（385・386）　C_1類と同様の胎土の技法である。385は底部内面のコロシが顕著に見られ、同外面には木目状痕が残る。

山茶椀Ｄ類（379・387）　長石を含まぬ精良な胎土である。内面にわずかに自然釉がかかる。13世紀末



第38図　ＳＸ102実測図　（１：40）



第39図　ＳＸ103・104実測図　（１：40）

で白土原1号窯期頃と考えられる。387は口径14.4cm、器高 5.3cm。379はSD99から出土。

鉢 (393)　口径27.1cm、器高11.2cm。ロクロ水挽きの後、腰部はヘラ削りしている。高台も削り出しと思われる。高台内は未調整である。内面は滑らかであり、擂鉢のように使用したと思われる。胎土は山茶椀と同じ。口の有無は不明。

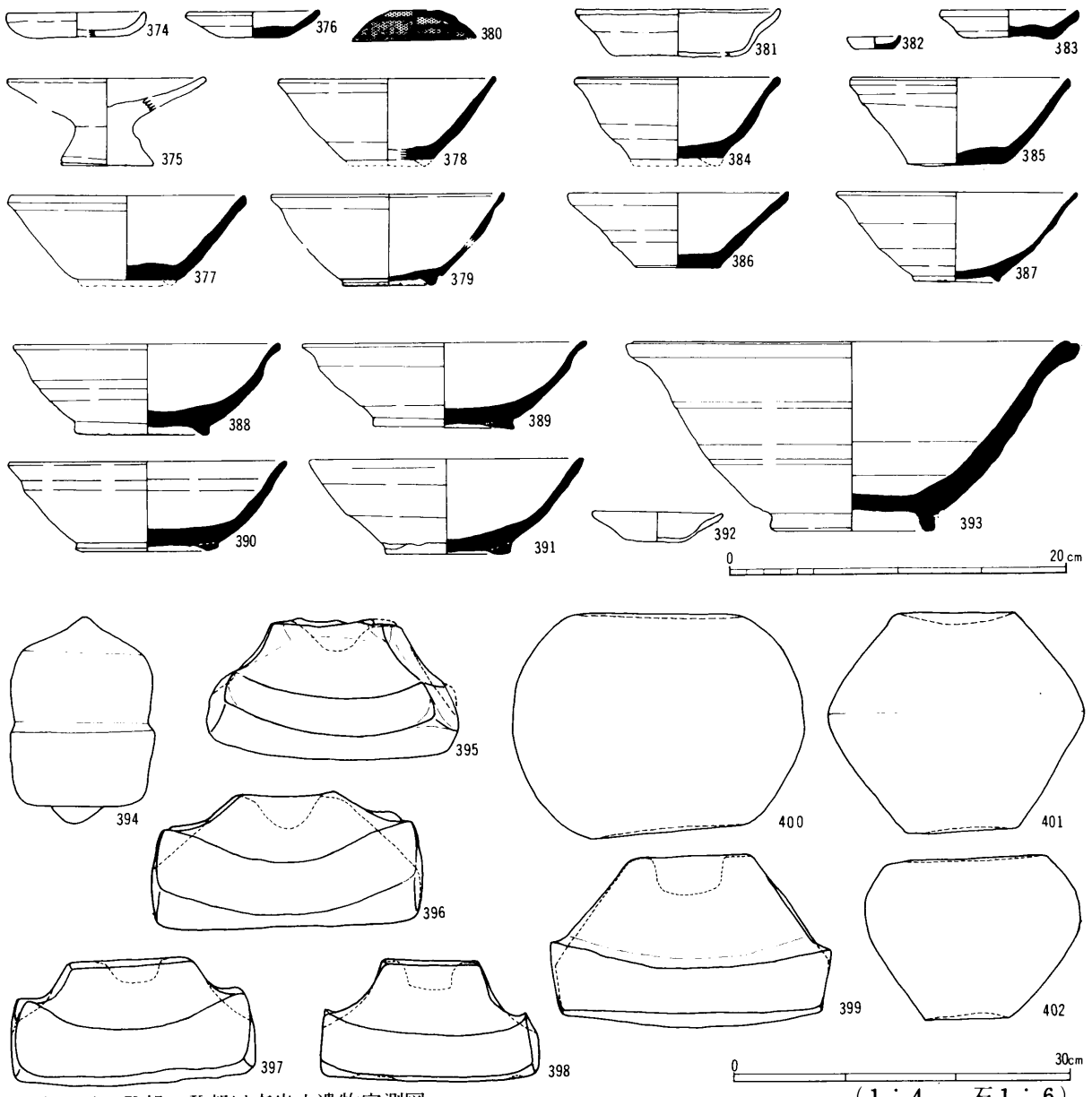
鉄釉蓋 (380)　全面に施釉するがムラ有り。口径7.4cm・器高 1.3cm。反りまでの径は 4.4cm。

(3) 五輪塔

空風輪 (394)　最大径12.8cm、高さ18.3cm。399・401と共に51F区で表採したものである。

火輪 (395～398)　395を除き殆んど底面に反りがない。398は花崗岩でなく、稜線や突端の反りが明瞭である。ただし底部はほとんど加工されていない。399は、底部に対して輪高が高い点、稜に反りがなく直線的である点で他と異なる。52G区表採である。397はⅨ郭整地土（45J区）から出土。他は50～51F区からの出土である。395は一辺22cm・高さ12cm。396は一辺23cm、高さ11.6cm。397は一辺21cm・高さ10.4cm。398は一辺19cm・高さ10cm。399は一辺24.6cm・高さ15cm。

水輪 (400～402)　401は非花崗岩であり、算盤玉状である点で他と異なる。最大径23cm・高さ19.4cm。



第40図　Ⅹ郭・Ⅹ郭以南出土遺物実測図　（1：4　石1：6）

Ⅹ郭遺物（374～380）Ⅹ郭南斜面遺物（381～387）54G、一括出土遺物（388～391）東トレンチ遺物（392～393）

51F区表採。400は面に傾きがある。最大径25.6cm・高さ19cm、58G区の表土から出土。402は最大径の位置が高い点に特色が見られる。最大径19.1cm・高さ14.2cm。57M区の表土中から出土している。

3．小　　結

形態からⅨ郭の腰郭的である点、出土遺物も乏しいながらⅧ郭の時期と一致する事から、Ⅷ・Ⅸ郭と同時期（14世紀初）に築造されたと考えられる。ただし西トレンチ北端からほぼ一括出土した山茶椀(388～391)は12世紀中頃に遡るものである。性格的には、先述した如く墓域と考える事が妥当であろう。

〔註〕

① 藤澤良祐「山茶椀の型式編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　1983

② 楢崎彰一・井上喜久男『妙土窯跡発掘調査報告』　笠原町教育委員会　1976

③ 『日本出土の中国陶磁』　東京国立博物館　1978

④ 宇野隆夫「井戸考」『史林』65－5　1982

⑤ 『下右田遺跡第4次調査概報・総括』　山口県教育委員会　1980

⑥ 田口昭二他『大畑大洞古窯跡群発掘調査報告書』　多治見市教育委員会

⑦ 井上喜久男氏の御教示による。

⑧ 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会　1982

⑨ 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』　2　日本貿易陶磁研究会　1982

⑩ 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」によれば、この型式の石鍋は「（草戸）Ⅰ期前半に比定できる可能性」があるとしている。実年代では12世紀という事になる。『草戸千軒』　112　1982

Ⅳ 結　　語

丹生川上城は、鈴鹿山脈の東縁をなす丘陵に位置しており、員弁川からは約3km隔たっている。居館群は標高107～130m付近に広がり、南北280m・東西220mの規模をもつ。さらに標高181mの山頂を中心に詰城と思われる遺構があり、南北80m・東西50mである。

今回調査した部分は居館群のほぼ西端であり、隣接する東の郭とは10m近い落差がある。これは山際の帯郭を除けば居館群中最も高い場所である。調査区は自然地形利用のＳＤ46を境に、南北に二分してとらえる事ができる。ＳＤ46以北は自然地形がなお多く残り、Ⅰ郭とⅡ～Ⅳ郭群とに分けられる。以南はよく削平されており、自然地形は南端に残るのみである。削平面はほぼ同レベルながら、ＳＤ64を境に南北55m・東西25mのⅦ郭と25m四方のⅧ・Ⅸ郭とに分けられる。

1．遺　　構

Ⅰ郭付近は中世墓によって特徴づけられるが、郭そのものは中世墓とは一応別個にとらえるべきである。約14m×12mの小郭であり、その性格は不明である。中世墓は方形の土坑に土師器皿・山茶椀・刀子のセットを副葬する傾向をもつ。12世紀後葉の遺構と思われる。

Ⅱ～Ⅵ郭群は全体でひとつのまとまりをもつと考えられ、それぞれ異なった役割を分担しているようであるが詳細は不明である。出土遺物から12世紀末から13世紀中頃までの時期が考えられるが、Ⅴ郭のみは16世紀初頭に改変を受けている。

Ⅶ郭は位置と平坦面の規模から、居館群最重要の一郭と考えられたが、発掘の結果最大限を測り南北8間(15.5m)×東西7間(11.3m)の礎石建物ＳＢ51が検出され、予想を裏づけた。またこの郭は出土遺物によって大きく3時期ある事がわかっているが、個々の遺構の時期決定を行い、その変遷過程を跡づける事は容易ではない。ＳＢ51は16世紀中頃と思われるが、先行する時期として12世紀後半と13世紀後半が考えられる。

Ⅷ郭はⅨ郭内に削り出された方形土壇である。中央に円形石組土坑ＳＸ93が設けられ、4点の蔵骨器が出土した。内1点（古瀬戸三耳壺）は完形で出土した。したがってＳＸ93は納骨施設と考えられるが、外周の配石は一辺約5.6mであり、どのような建築物が可能かという点で多くの疑問を残す。時期は13世紀末から14世紀初頭の単時期と考える。Ⅸ郭はⅧ郭の前庭をなす良好な平坦面であるが、全く遺構が見られず、遺物も極めて乏しい点に特色が見られる。

2．遺　　物

出土遺物には、土師器・陶器（含山茶椀）・磁器・木製品・石製品・鉄製品・銭貨などがある。

土師器は皿について、主にその形態から4群9類に分類できる。他に鍋（122・372)、羽釜(124）も少数ながら出土している。鍋の出土は北勢地方では珍しい事である。

陶器は器種・量ともに豊富である。山茶椀は最も豊富な器種であるが、特に藤澤編年第4～5型式と第7～8型式の時期に集中する。高台内に墨書されたものも数点あったが、判読はできなかった。他に山茶椀質のものとして、匣鉢（208)、鉢（393）がある。

灰釉陶器には長頸瓶（209)、古瀬戸壺(336・337)、瓶子（338)、おろし皿（333)、印花皿（214)、ひだ皿（220)、小皿（215～219)、折縁深皿（221）などがあるが、量はあまり多くない。215～220は鉄釉にも同器型がある。

鉄釉陶器は山茶椀と並んで最も量の多かったものであり、本遺跡のきわだった特徴である。しかし器種では美濃大窯Ⅱ期を中心とする皿類が圧倒的多数を占め、天目茶椀がこれに次ぎ、杯(249)や茶入(263・264）は少数混るに過ぎない。

その他の陶器として、美濃大窯の焼き締め無釉皿（222～231）が目立ち、盤、常滑壺・同捏鉢、備前徳利なども出土した。

磁器は青白磁・染付碗（280～283)、皿(279)などが出土しているが量は少ない。小野編年の染付碗C群・E群の2種、皿は染付皿E群に属す。

その他の焼き物として、塼が10数点（75・76・291・2・92)、瓦が数点（286・287）出土しているが、その数の乏しさから、本来の用い方はされていないと考えられる。

木製品には、漆椀（285）と井戸の木枠（314～325）がある。

石製品には、石鍋（284)、臼（288)、砥石（344・360)の他、五輪塔が28点、層塔（303・304)、石仏(313）などがある。地輪の一つには四面に梵字が刻んであった。

鉄製品には刀子（8・25・62)、釘（340～343）があり、前者は中世墓、後者は納骨施設に伴うものである。

銭貨は合計99枚、Ⅱ郭とⅦ郭の2ヶ所でまとまって出土したが、明銭（特に永楽銭）の量が比較的多い事が特色である。

以上16世紀段階の出土遺物に見る特色は、甕・擂鉢が少ない事であり、また鉄釉皿のきわめて日常的な使用である。ある個体は明らかに燈明皿として使用されており、土師器並みの扱いと言える。この事は相当量出土した五輪塔や、検出された中世墓・納骨施設と共に、本遺跡を城館跡と言い切る事をためらわせる。

3．ま と め

時代的にはすでに述べたように、12世紀初を初現として、途中12世紀後半、13世紀後半の盛期を経て、16世紀30～50年代に最後の盛期を迎える。その後しばらくは存続するものの、17世紀初頭には衰亡したと思われる。すなわち、古代末期から近世前夜までを主たる存続期間とする長期にわたる遺跡であり、遺跡の性格としては、第1期は墓域、第2期は寺院と考える。

第3期についても、遺物からは寺院跡である蓋然性が強くうかがえるわけであるが、今回調査した部分が遺跡中最良の一郭である事を考慮すれば、上物出土はむしろ当然の事であり、より低い位置にある居館群の調査如何によっては、改めて城館としての性格が浮彫りにされる可能性も残る。あるいは中世末期においては、城館か寺院かという問いそのものが意味をもたない場合もあろう。というのは、石山本願寺・根来寺坊・長島願証寺などに端的に示されるように、一向宗徒の長期にわたる抵抗は、明らかに寺院の城塞化を前提としており、それは他の一向宗寺院についても多かれ少なかれ同様であったと見るべきであろう。その場合、遺構からは城館跡・寺院跡の判断は困難となろう。本遺跡の場合、土塁等の景観、郭構造が他の中世城館と共通するばかりでなく、山頂の遺構が詰城と思われる事から城跡としたのである。しかし当地域が、中世末段階ではすでに一向宗である事を考えれば、「願証寺の残党が立て籠ったため、信長に攻め亡ぼされた」という地域伝承は措くとしても、城塞寺院化は充分考えられる。

最後に中世末期における当地域の商品流通上の位置について付言したい。ひと言で言えばこの地域（員弁郡・朝明郡）は、桑名と保内（現八日市市）を最短距離で結ぶ物流の要路であった。当時の桑名は自ら「十楽之津」と称し、大湊と並ぶ重要な港湾都市であったし、保内は、かっては四本商人と呼ばれる山越商人の一であったが、16世紀段階では既に他を圧倒していた。いずれにせよこの湖東地方は、後に近江商人達の主舞台となり、商業活動の盛んな地域であった。それはまず、北陸・東山・東海の諸道が集結するという地の利によるものであるが、より巨視的には、若狭湾・琵琶湖・伊勢湾を結ぶ地域こそは、本州随一の狭隘部であり、日本海と太平洋を最短で連絡し得たのであった。

さて、当時の北勢と保内の関係の一端は、『今堀日吉神社文書』によってうかがうことができる。関係にはいくつかのレベルがあるが、在地領主との関わりは、たとえば大矢知兵庫の下知状①や、千草有吉や梅戸貞実が四本衆（現実には保内商人）に与えた書状②によって知る事ができる。大矢知兵庫の下知状に、新関を設け「可為如先々」としているのは、おそらく銭を納めよと言う事であろう。そして枝村との相論の際の申書上③に、「一、三月廿日貳貫文、同十二月廿日貳貫文、都合四貫文、為員弁郡役、勢州さかいと申在所へ渡申事。一、三月廿日朝明郡江三百廿文、杉谷ノ常心ニ渡申事」などとあるのは、そうした銭

の支払いの事であろう。「さかい」とは、あるいは大矢知兵庫下知状の「員弁郡境新関」そのものであるかも知れない（現桑名市郊外の坂井か）。

次に、在地商人との関わりを見ると、山田④（現東員町）や大泉⑤（現員弁町）との間に生じていたトラブルを指摘する事ができる。また「伊勢まい田商人⑥」と見えるのも蒔田（現四日市市）であろう。

一方、保内に敵対するばかりでなく、足子と呼ばれる地元下請業者もいたのである。丹生川太郎兵衛の書状⑦によれば、丹生川（4）、いしくれ（1）、おはったに（1）、志礼石（2）、高柳（1）、梅戸（1）、桑名（2）、四日市（1）、ちしゃく（2）、田光（3）、の在所に足子がいた事が知られる（数字は人数）。「我等おうちの代の時よりも、今者三十人はかりもすくなく」なったとし、その激減ぶりが知られるが、分布状況は参考になるだろう。人数が最も多いのは丹生川であり、また四本商人（実質的には保内）からの「御尋」に代表して答えた太郎兵衛も丹生川の住人である事を考えると、そこに丹生川の性格の一端が示されるであろう。

山越商人の利用した峠道としては、八風越（938m）・千草越（根ノ平峠、803m）がよく知られているが、丹生川にひとつの拠点を想定すれば、その北縁を流れる青川をさかのぼる治田峠（760m）、また宇賀川をさかのぼる石榑峠（689m）もかなり利用された事が考えられる。

以上、第Ⅱ章と本章において粗述してきた当地域の中世の諸相は甚だ魅力に富み、今後様々な角度から考究されるべきものであろう。その際、本書第Ⅲ章に報告した調査結果は、質と量、そして中世の全期間にわたるという意味において貴重であり、当地域の中世史解明に有効な資料を提供し得たと信ずる。

〔註〕

① 『今堀日吉神社文書』 136号 （文書番号は京都大学文学部国史研究室の影写本整理順序による、以下同じ）「員弁郡境新関共之事、可為如先々、若又兎角違乱之子細候者、面々四本衆当国可申合候、仍如件、七月十六日　大矢知兵庫安忠（（花押）、江州四本衆御中」

② 『同』 137号 「当国員弁・朝明両郡新関之事、雖自何方立置物、已後者為本諸関中、各令合可致調法候也、恐々謹言、七月廿六　梅戸貞實（花押）　江州四本衆中」

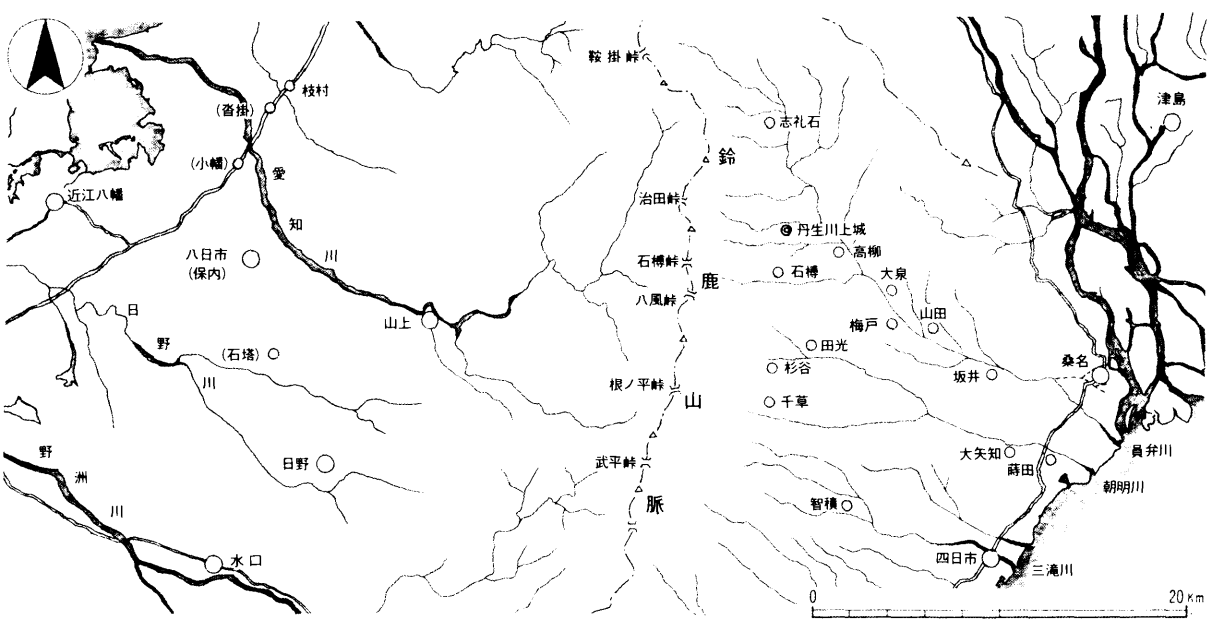
③ 『同』 140号

④ 『同』 170号 「（前略）去年十一月勢州へ為商売罷越候處、員弁之郡内山田と申在所にて、彼商人等新足十貫八百文雑物以下押取間、彼為質物員弁之郡より立候（中略）長禄二年月日」

⑤ 『同』 172号 「（前略）爰彼保土民等、為商売、伊勢国立越之處、大泉地下人等、無故持物奪取之間（後略）」④と地名は異なるが、同じ事件を指しているのかも知れない。

⑥ 『同』 139号 「（前略）一。七八年以前候也、伊勢まい田商人の真綿并苧、於千草道山中、保内へ取候て、たうけの宿善左衛門ニ預ケ置候、人数、今堀　衛門二郎　同　兵衛二郎（後略）」

⑦ 『同』67号 「（前略）其方足子当国ニ有分預御尋候間、大方日記仕候て進之候、丹生川にてハ　又次郎　同孫兵衛　彦六（中略）我等おうちの代の時よりも、今者三十人はかりもすくなくなり申候、其方より御たつねニ付而、大方此分しるし進之候（中略）丹生川太郎兵衛（花押）」



第41図　中世末期の北勢と保内　（1：400,000）

遺物一覧表

Ⅰ郭

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
1	7C	SX2	土師器皿	8.5	1.8		一部欠損	320
2	〃	〃	〃	9.1	1.9		1/3	321
3	〃	〃	山茶椀	15.2	5.1	7.2	ほぼ完形	322
4	7E	SX3	土師器皿	8.9	1.5		ほぼ完形	17
5	〃	〃	〃	9.1	1.6		一部欠損	16
6	〃	〃	山茶椀	17.4	6.0	7.8	ほぼ完形	4
7	〃	〃	〃	15.6	5.0	6.9	完形	8
9	8E	SX4	土師器皿	9.5	2.2	5.8	口縁1/3欠損	13
10	〃	〃	〃	8.9	2.0		1/3	15
11	〃	〃	〃	9.5	1.9		1/3	14
12	〃	〃	山茶椀	15.9	4.7	7.6	完形	7
13	6H	SX11	土師器皿	9.3	1.6		1/3	317
14	〃	〃	〃	9.4	1.5		1/5	318
15	〃	〃	〃	9.2	1.3		2/3	319
16	〃	〃	山茶椀	16.0	5.3	7.8	完形	3
17	〃	〃	〃	16.1	5.2	8.3	一部欠損	2
18	7I	SX12	土師器皿	9.0	1.3		一部欠損	326
19	〃	〃	〃	9.6	1.5		口縁1/6	325
20	〃	〃	〃	9.4	1.4		口縁1/5	324
21	〃	〃	山茶椀	15.4	5.2	6.5	口縁2/3	327
22	〃	SX14	山皿	7.6	2.0	4.4	完形	11
23	〃	〃	山茶椀	16.0	4.7	7.7	ほぼ完形	9
24	〃	〃	〃	16.1	5.5	7.8	一部欠損	5
26	6C		〃	16.1	4.9	7.7	1/3	315
27	6E		〃	17.0	4.5	8.5	口縁ごく一部	316
28	8F		〃	15.7	5.4	7.5	口縁ごく一部	328
29	7D		〃	14.7	5.4	7.5	口縁1/3	323
30	4J		白磁碗	15.4			口縁1/4	349

Ⅱ～Ⅵ郭

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
31	21K		土師器皿	7.6	1.4		口縁1/4	345
32	17G	SX31	〃	8.6	1.5	6.8	1/3残存	23
33	20F	SX24	〃	8.8	2.0		ほぼ完形	24
34	18G	SX25	〃	9.0	1.9		1/2	334
35	20F	SX24	〃	9.2	1.5		2/3	342
36	〃	〃	〃	9.5	1.6		2/3	340
37	18G		〃	10.0	1.5		口縁1/7	332
38	〃		〃	10.4	1.7		1/3	333
39	〃		〃	10.5	2.1		口縁1/6	331
40	20F	SX24	〃	11.3	1.9		1/2	341
41	18H		〃	12.0	1.9		口縁1/4弱	336
42	24F	SX39	〃	11.7	2.0	6.0	口縁1/2弱	348
43	20F	SX24	〃	13.4	1.8	7.8	口縁3/4	339
44	26I		〃	13.6	2.1		1/3	28
45	19C		〃	13.0	1.9	7.0	口縁1/2弱	338
46	23H		山皿	9.2	2.5	4.0	底部完 口縁1/2弱	347
47	19I		〃	8.6	2.4	4.3	ほぼ完形	12
48	21J		〃	8.8	1.6	5.0	口縁1/6	344
49	21K		灰釉皿	10.5	2.4	5.6	底部完 口縁1/2	346
50	20J		〃	10.4	2.6	5.4	口縁1/8	343
51	21J		鉄釉皿	9.7	2.0	4.5	1/2欠損	18
52	17F	SK27	山茶椀	16.2	6.0	7.1	一部欠損	6
53	15E		〃	16.2	5.3	7.4	一部欠損	1
54	18H		〃	15.6	5.0	7.1	底部完 口縁1/4弱	337
55	17G	SX31	〃	13.6	5.5	5.6	ほぼ完形	10
56	〃	〃	〃	13.5	5.6	5.9	底部完 口縁1/2	329
57	18B		〃			7.8	底部二次使用	330
58	21J 22J		擂鉢	29.0	11.7	10.0	1/5	352
59	19D		青磁碗			4.8	底部のみ	21
60	16D	SX18	白磁碗	16.1			1/4	19
61	〃	〃	白磁小壺	2.2	4.4	3.2	完形	20

Ⅶ郭

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
78	40K		糸切り土師器皿	9.0	2.8	5.5	1/5	108
79	39G	P3	〃	8.1	1.9	4.0	1/4	290
80	30I		〃	9.0	2.3	4.0	1/2弱	45
81	39F		〃	9.0	2.1	4.8	2/3	283
82	〃		〃	9.4	2.4	4.4	ほぼ完形	281
83	〃		〃	9.3	2.1	4.5	1/2	284
84	〃		〃	10.1	2.3	5.6	ほぼ完形	282
85	35E		土師器皿	9.4	1.5	6.0	口縁1/4	216
86	33E		〃	9.0	1.8		口縁1/5	63
87	35E		〃	8.4	1.7		1/3	82
88	〃		〃	6.8	1.3	4.0	口縁1/4	217
89	36D		〃	6.5	1.2	3.5	一部欠損	222
90	36F		〃	6.1	1.1		1/3	232
91	36E		〃	7.2	1.4	5.3	1/3	225
92	〃		〃	8.0	1.5	5.5	完形	224
93	〃		〃	8.0	1.5	5.5	完形	223
94	38F		〃	8.3	1.4	6.0	1/3	268
95	40H		〃	9.8	1.6	6.7	1/2	302
96	41H		〃	9.3	1.3		1/2弱	311
97	42E	SA60	〃	12.2	2.2	7.5	1/3	115
98	41G	SD87	〃	15.3	2.9		1/6	305
99	37F		〃	14.0	2.2		口縁1/7	247
100	41G	SK89	〃	13.2	2.1	9.4	1/7	308
101	37G		〃	9.1	1.8		1/7	252
102	41G	SK89	〃	9.6	1.4	6.0	1/6	309
103	37F		〃	8.5	1.5		口縁1/5	248
104	SK81		〃	8.4	1.1		1/6	294
105	36E		〃	8.0	1.3		1/3	230
106	〃		〃	7.8	1.4		1/2	229
107	42H	SD62	〃	7.9	1.1	7.2	2/3	120

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
108	37G		〃	7.8	1.1	6.2	1/6	251
109	43E		〃	8.4	1.6		2/3	125
110	40G		〃	8.4	1.5	4.3	1/4	300
111	29I		〃	8.8	1.8		3/4	37
112	36F		〃	8.7	1.8	6.0	1/4強	237
113	37G		〃	8.7	1.7		1/3	250
114	〃		〃	10.4	1.3	7.3	口縁1/5	258
115	37F		〃	14.2	2.0		口縁1/7	245
116	32E		〃	13.0	3.0	10.0	口縁1/8	208
117	40G	SD84	〃	10.2	2.4		一部欠損	301
118	36E		〃	16.1	3.0	12.0	口縁1/6	226
119	36K		〃	12.0	1.7	5.4	1/4	97
120	34F		〃	13.4	1.6		口縁1/3	79
121	35G		台付椀	9.0	4.6	4.8	1/2弱	88
122	43J	SD64	土師器鍋	25.0	4.0		1/4	129
123	30H		〃	(34.6)			ごく一部	41
124	31F		羽釜	17.2			ごく一部	51
125	37G		小椀	10.5	2.8	5.6	1/4	254
126	39G		〃	10.5	2.5	4.7	口縁1/6 底部1/2	295
127	37J		〃	9.8	3.1	5.5	3/4	264
128	39F		〃	8.5	2.8	4.3	口縁1/6	280
129	38E		山皿	8.4	2.0	4.3	1/3	101
130	39F		〃	7.4	2.4	4.1	底部完 口縁1/3	285
131	40J		〃	7.9	2.3	3.6	1/3	105
132	39G	SD84	〃	7.6	2.1	3.9	1/3	292
133	37G		〃	8.0	2.1	4.4	1/3	253
134	36F		〃	8.3	2.3	4.4	1/3	233
135	41G	SD87	〃	7.8	2.2	4.5	一部欠損	306
136	〃	SK89	〃	8.8	2.3	5.3	底部1/4 口縁ごく一部	307
137	30F		〃	9.0	2.3	4.4	1/2弱	40
138	36E		〃	8.8	2.1	4.7	1/3	231
139	39F		〃	8.6	2.3	4.5	3/4	279
140	37G		〃	8.0	2.3	3.8	1/3	257
141	〃		〃	9.1	2.5	5.0	1/3	259
142	36E		〃	8.7	2.4	4.8	1/4	227
143	36F		〃	8.2	2.1	4.2	1/3	239
144	39G		〃	7.0	2.1	3.4	底部1/4 口縁1/8	293
145	34D		〃	7.5	2.3	4.0	口縁1/7	211
146	37I		〃	8.0	2.1	4.1	3/4	263
147	37G		〃	8.3	2.0	4.0	1/3	255
148	39H		〃	8.3	2.0	4.5	一部欠損	296
149	41H		〃	7.5	1.8	4.2	底部1/2 口縁1/4	310
150	37F		〃	7.5	1.8	3.8	1/6	246
151	36G		〃	8.0	1.8	3.6	一部欠損	241
152	35G		〃	8.0	1.8	3.8	2/3	89
153	36F		〃	8.5	1.9	4.3	3/4	238
154	36H		〃	8.0	1.7	4.5	1/3	242

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
155	36F		〃	7.6	1.7	4.3	1/6	236
156	32K		〃	8.5	1.6	5.3	1/2強	61
157	33G		〃	8.7	1.5	5.2	口縁1/6	210
158	〃		〃	8.6	1.5	5.9	口縁1/6	68
159	32D		〃	7.8	1.2	4.3	1/3	54
160	35D		〃	8.3	1.5	5.0	口縁1/3	214
161	35F		〃	9.5	1.6	6.8	1/6	87
162	34E		〃	8.2	1.7	5.2	1/2強	75
163	41F	SX57	〃	7.8	1.7	4.5	口縁1/6 底部完	303
164	38E		〃	7.7	1.5	4.7	ほぼ完形	99
165	37F	P_1	〃	8.3	1.6	5.7	3/4	249
166	38I		〃	8.4	1.6	5.1	1/2弱	271
167	37E		〃	8.0	1.7	5.0	1/3	244
169	39G		〃	7.0	1.5	4.6	底部1/3 口縁1/2	289
169	31D	SD67	〃	7.8	1.3	5.4	口縁1/4	206
170	35D		〃	8.1	1.3	5.0	1/4	215
171	38G		〃	8.0	1.5	5.0	1/4	270
172	36H		〃	8.0	1.5	5.3	1/4	243
173	31E		〃	8.5	1.8	5.8	1/3	207
174	32E		〃	8.8	1.4	6.1	1/3強	56
175	34D		〃	9.2	1.7	5.5	1/3	72
176	37G		〃	9.9	1.5	5.5	1/4弱	262
177	38E		〃	8.6	0.9	6.7	底部完存 口縁1/7	267
178	38K	SD85	〃	8.6	0.9	6.0	口縁1/7	275
179	37J		山茶椀	17.4	6.0	8.8	一部欠損	265
180	39G	P_3	〃	16.0	4.8	6.1	1/3	291
181	39F		〃	17.8	5.3	8.6	底部完 3/4	286
182	29G		〃	(16.8)	4.2	8.8	1/2 口縁はごく一部	36
183	37G		〃	15.3	4.8	7.9	1/3	260
184	34D		墨書山茶椀			7.5	底部1/2	71
185	41G	SK89	〃			6.8	底部のみ	350
186	39F		山茶椀	15.0	5.2	7.7	底部完 口縁わずか	288
187	35D		〃	13.8	5.7	5.5～5.8	口縁1/6	81
188	36H		〃	14.3	5.4	5.6	1/3	95
189	37G		〃	14.7	5.4	6.0	1/6	261
190	31E		〃	13.6	(4.7)	4.9	口縁1/6	46
191	35I		〃	14.0	5.1	6.5	2/3	91
192	28G		〃	14.4	5.5	6.0	3/4	31
193	40F		〃	13.9	5.3	6.0	底部完存、口縁ごくわずか	299
194	30H		〃	13.0	5.3	5.2	3/4	42
195	42E	SA60	〃	13.8	4.7	5.9	1/3強	116
196	36F		〃	12.0	5.4	5.0	1/3	235
197	〃		〃	12.8	5.4	6.2	口縁1/2弱	234
198	42F	SD62	〃	12.6	4.8	5.2	1/3	119
199	43F		〃	13.8	4.5	5.7	1/6	123
200	31J		〃	(12.0)	4.4		口縁1/6	53
201	41F	SX57	〃	13.3	4.9	5.7	底部完 口縁1/6	304

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
202	42E	SA60	〃	13.6	4.5	5.5	⅓	113
203	〃	〃	〃	12.4	3.8	5.0	¼	117
204	40F		〃	13.9	4.7	5.0	¼	103
205	38K	SD85	〃	13.2	4.2	5.6	⅙	272
206	43F	SX65	〃	12.8	4.5	4.0	⅙	313
207	32F		〃	13.0	4.3	3.4	口縁⅙	57
208	37G		匣鉢			9.2	⅙	256
209	34E		長頸瓶	(11.0)	(21.5)	8.5	口縁を欠く	212
210	38K	SD85	瓶子脚部			13.7	底部のみ	273
213	26F		灰釉花瓶		(10.5)	4.6	底部～体部½ 口縁～頸部なし	27
214	34E		灰釉印花皿	10.7	2.5	5.7	ほぼ完形	77
215	31E		灰釉皿	9.8	2.4	5.0	底部完存 口縁ごく一部	49
216	〃		〃	9.8	2.3	4.9	⅕	47
217	30H		〃	(10.6)	2.3	5.5	⅓ 口縁は⅕	43
218	28E		〃	8.5	1.8	4.8	½	29
219	35E		〃	10.6	1.8	5.2	½強	84
220	39E		ひだ皿	11.0	2.8	6.1	⅓	278
221	42E	SA60	折縁深皿	18.6	3.6	9.5	⅓	118
222	35E		無釉皿	10.0	2.3	4.8	⅔	219
223	38E		〃	9.3	2.1	5.0	⅔	100
224	39I	SD84	〃	10.0	2.0	4.5	⅓ 口縁わずか	298
225	39G		〃	10.4	2.0	5.0	½	102
226	33I		〃	9.9	2.0	4.3	口縁⅛	69
227	34E		〃	9.8	2.0	4.2	⅓	76
228	40J		〃	9.6	1.9	4.0	⅓	106
229	29F		〃	10.0	1.8	4.5	⅙	35
230	36E		〃	9.7	1.9	4.7	½	228
231	35G		〃	9.8	1.7		½	90
232	36G		鉄釉皿	11.5	2.4	6.7	½強	93
233	32D		〃	10.5	2.3	4.8	⅕	55
234	32F 33G	SK69	〃	10.4	2.1	5.7	¾	209
235	34D		〃	9.8	2.0	5.3	完形	73
236	36G		〃	9.8	2.0	5.1	底部完、口縁 はごく一部	94
237	32F		〃	9.8	1.9	5.5	ほぼ完形	60
238	39F		〃	9.8	1.7	5.3	ほぼ完形	287
239	31F		〃	9.8	1.9	5.0	ほぼ完形	52
240	33D		〃	9.4	1.7	4.6	½弱	62
241	33E		〃	9.8	1.7	5.0	½弱	65
242	35E		〃	10.3	3.2	5.7	ほぼ完形	83
243	43J	SD64	〃	11.3	2.6	6.0	¼	134
244	32F		〃	11.0	2.6	5.0	⅓	58
245	43J		〃	10.2	2.5	5.3	完形	132
246	〃	SD64	〃	10.2	2.5	6.0	ほぼ完形	131
247	34F		鉄釉ひだ皿	11.2	2.6	6.2	⅔	213
248	43I		〃	11.2	2.2	6.0	½強	127
249	35E		鉄釉小杯	6.6	3.3	2.8	⅓	218
250	38F		小天目茶椀	9.0	5.0		口縁⅓	269

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
251	28E		〃	(6.6)	3.8		口縁～高台脇 ⅙	30
252	34E		天目茶椀	12.7	0.9	4.4	½	78
253	42E	SA60	〃	11.9	6.5	4.0	½弱	114
254	33K		〃	12.5	6.2		口縁⅓	70
255	33F		〃	12.4	6.4	4.6	½弱	66
256	33E		〃	12.2	(6.0)		口縁¼	64
257	43J	SD64	〃	11.2			½弱底部なし	133
258	32F		〃	11.0	(5.8)		⅓	59
259	35F		〃	11.3	5.9	5.0	½	221
260	43G	SD64	〃	12.2			底部欠⅓	137
261	41H		〃	11.5			底部なし ⅓	312
262	30H		〃	(12.6)	7.0		口縁⅕	44
263	43J	SD64	茶入		(4.7)	6.0	⅓弱肩から上 なし	135
264	39E 42J		〃	4.4	6.0		口縁¼	276
265	35F		広口壺	17.1			口縁のごく 一部	220
266	43J	SD64	鉄釉鉢	(16.1)	8.3	8.9	底部完存 口縁ごく一部	136
267	43F		仏花器			3.9	½頸部欠	121
268	31E		徳利				肩の一部 窯印か	50
269	34D		盤	31.5	5.3	18.0	½	74
270	43J	SD64	〃	30.1	6.1	14.5	½	130
271	36E		〃	26.0	5.6	11.0	⅕	92
272	43I		火舎	29.8	11.0	23.0	⅙	128
273	37J		擂鉢	27.0	13.5	9.8	⅔	266
274	36I		捏鉢	36.4	11.8	14.0	⅙	96
275	43E	SD64	常滑壺	9.0	(24.3)	8.9	頸⅓、底⅙	124
277	40F		青磁碗	14.6	(6.2)		口縁⅛	104
278	30E		白磁碗	17.4			口縁⅛	39
279	37E		染付皿	13.0	2.8	(7.5)	口縁⅕	98
280	30E		染付碗	(13.6)	4.9		口縁⅛	38
281	33F		〃	9.4	(5.2)		口縁⅙	67
282	31E		〃	10.0	5.5	2.0	⅙	48
283	34I		〃			5.0	⅓	80
284	43G		石鍋	42.0			ごく一部	126
285	38D		漆椀	14.5	7.5	7.3	口縁一部	357

Ⅷ 郭

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
327	45E		土師器皿	7.9	1.7		⅓	141
328	〃		〃	8.6	1.5		⅓	140
329	〃		〃	8.4	1.4		ほぼ完形	139
330	〃		〃	11.0	2.4		½	142
331	〃		山皿	8.0	1.7	4.5	完形	143
332	〃	SX93	〃	8.7	0.8	7.0	⅓	152
333	〃	〃	おろし皿			6.6	⅙	144
334	〃	〃	花瓶		(10.0)	4.7	残存部位はほぼ完形、口頸部欠損	145
335	〃	〃	瓶子脚部	6.4	11.5		二次使用	153
336	〃	〃	三耳壺	12.0	29.6	10.5	完形	154
337	〃	〃	四耳壺		(29.2)	9.2	頸部なし 体部一部欠損	156
338	〃	〃	瓶子		(27.5)	8.5	⅔、頸は故意に割る	155
339	〃	〃	常滑壺	13.8	21.5	9.5	一部欠損	151
345	46E		土師器皿	7.9	1.5		¼	178
346	44E		山皿	8.3	1.7	4.6	完形	162
347	46D		常滑二筋壺	9.0	23.0	6.5	残存部位の⅓	138
348	43F		土師器皿	11.4	2.2	7.0	口縁⅙	157
349	〃		山皿	7.8	1.4	4.7	½強	158
350	〃		山茶椀	13.0	4.8	5.4	⅓	159
351	〃		〃	13.9	4.9	5.4	底部½ 口縁わずか	160
352	〃		天目茶椀	11.0	(6.8)		⅙、口縁はごく一部	161
353	44F		〃	11.4	(6.0)		口縁⅙	164
354	47G		土師器皿	5.5	1.2		⅓	167
355	〃		〃	6.4	1.0		¼	168
356	46G		〃	8.7	1.3		¼	166
357	45G		糸切り土師器皿	7.6	2.2	4.7	口縁⅙	165
358	47G		山皿	7.9	2.2	4.0	⅓	169
359	〃		鉄釉瓶	6.5			頸部のみ	170

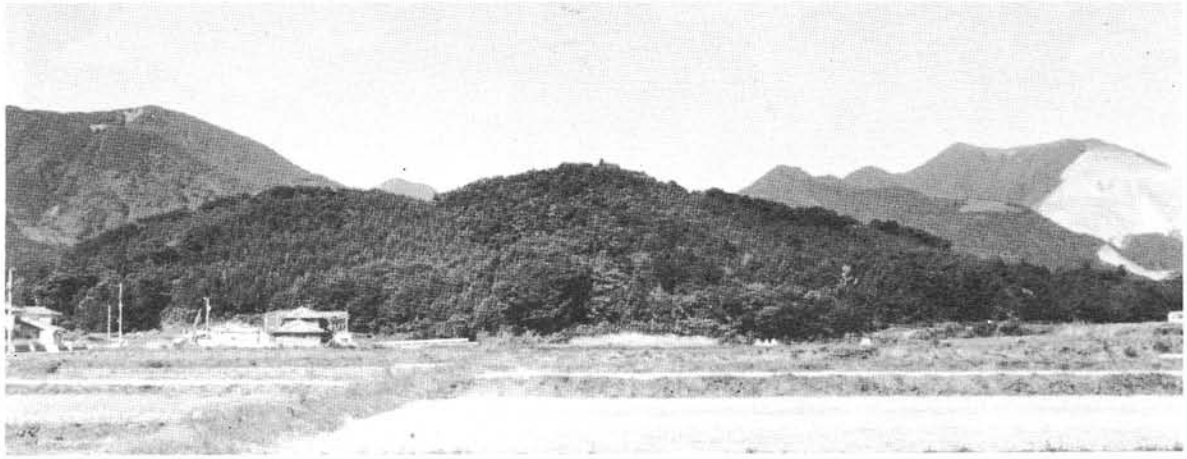
Ⅸ 郭

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
361	46I		山皿	7.8	2.1	4.5	¼	172
362	〃		〃	7.8	1.6	5.4	⅓	171
363	47I		〃	8.2	1.5	5.5	⅙	173
364	46K		山茶椀	13.0	5.5	5.4	底部完存 口縁ごく一部	174
365	46L		土師器皿	7.9	1.4	5.0	½	179
366	44J		〃	10.1	1.7	7.2	1/10	184
367	〃		〃	13.9	2.0	9.0	口縁1/10	177
368	46K		山皿	8.6	2.5	4.8	¼	176
369	47K		〃	8.2	1.5	5.2	⅙	181
370	〃		擂鉢	31.5	12.0	10.5	底部完存 口縁¼強	185
371	46K		土師器鍋	18.9	(3.7)		口縁⅙	183
372	〃		〃	38.0～40.0	(11.0)		口縁½弱	182
373	49H		土師器甕	14.9			口縁⅓	175

Ⅹ 郭

図版番号	出土地点	出土遺構	器種	口径	器高	底径	残存度	実測番号
374	50F		土師器皿	8.3	1.5	5.5	⅓	186
375	51H		台付杯		(5.2)	5.5	台部のみ完存	191
376	50F		山皿	8.0	1.7	4.0	完形	187
377	〃		山茶椀	14.1	(5.3)	(5.5)	⅓ 高台完全に剥離	188
378	51F		〃	12.8	5.2	4.8	⅕	190
379	50K	SD99	〃	(14.0)	(5.5)	5.5		192
380	50H		鉄釉蓋	3.0	1.3	8.4	¼弱	189
381	53F		土師器皿	12.2	2.8	7.2	口縁¼弱	195
382	52F	SX102	ミニチュア	3.2	0.7	2.3	口縁の¼欠損	193
383	53F		山皿	8.2	1.6	5.3	¾	197
384	52F	SX102	山茶椀	12.3	(5.2)	(5.0)	底部½ 口縁ごく一部	194
385	53F		〃	13.0	5.1	5.7	⅔	199
386	〃		〃	13.3	4.4	5.0	½弱	198
387	〃		〃	14.4	5.3	5.1	底部完存 口縁ごく一部	196
388	54H		〃	16.0	5.3	8.0	ほぼ完形	200
389	54G		〃	16.8	4.8	8.5	ほぼ完形	201
390	〃		〃	16.6	5.3	8.5	ほぼ完形	202
391	〃		〃	16.2	5.6	7.5	ほぼ完形	203
392	58M		土師器皿	7.7	1.8	3.3		205
393	〃		鉢	27.1	11.2	10.8	¼	204

図　　版



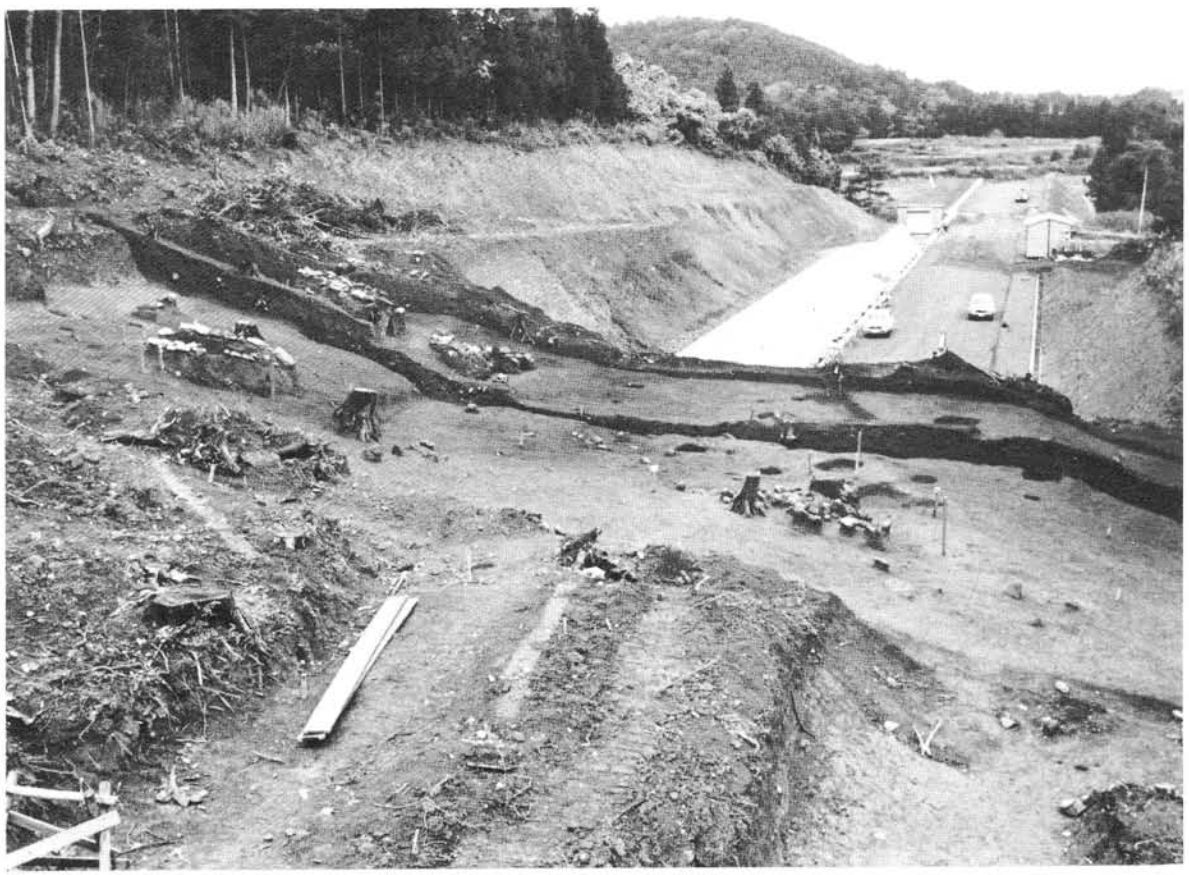
遺跡遠景（東から）

同　（南から）

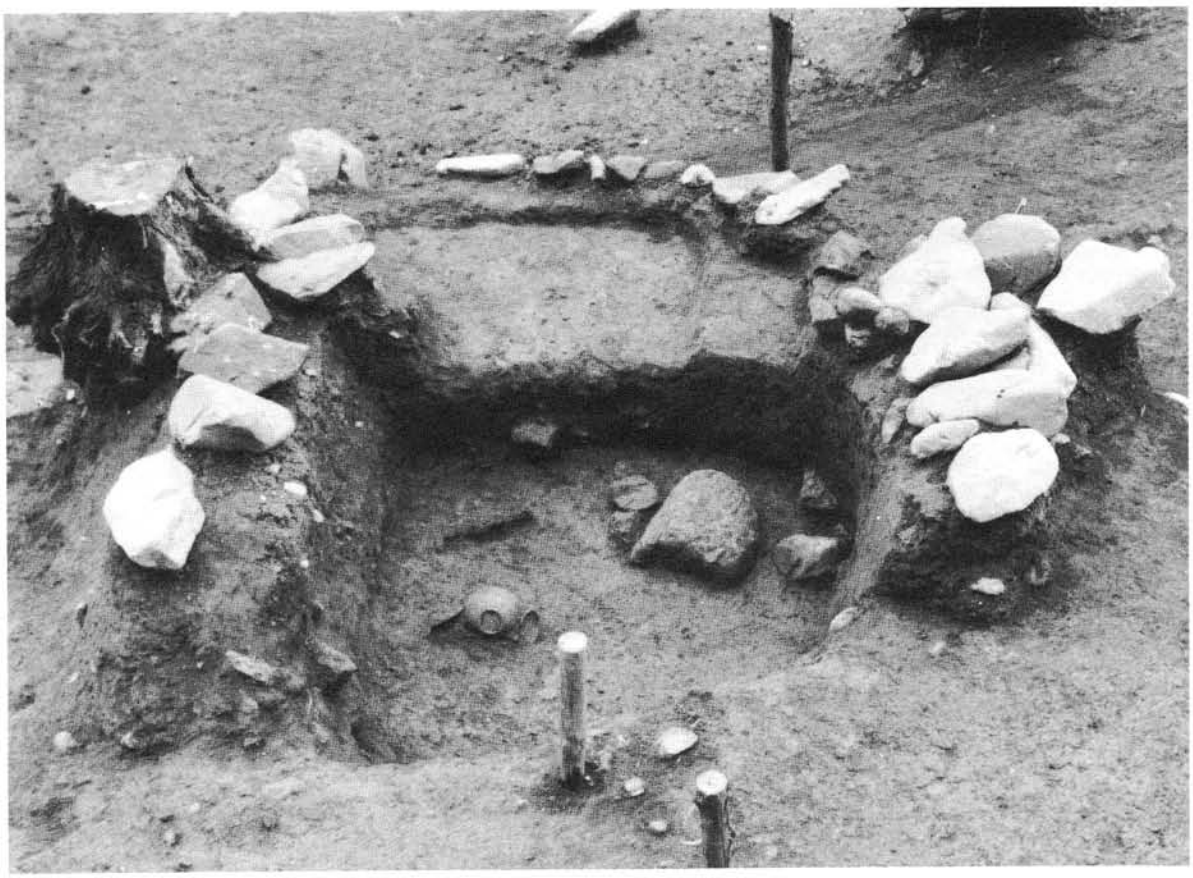
Ⅶ～Ⅹ郭付近（北上空から）

PL 2

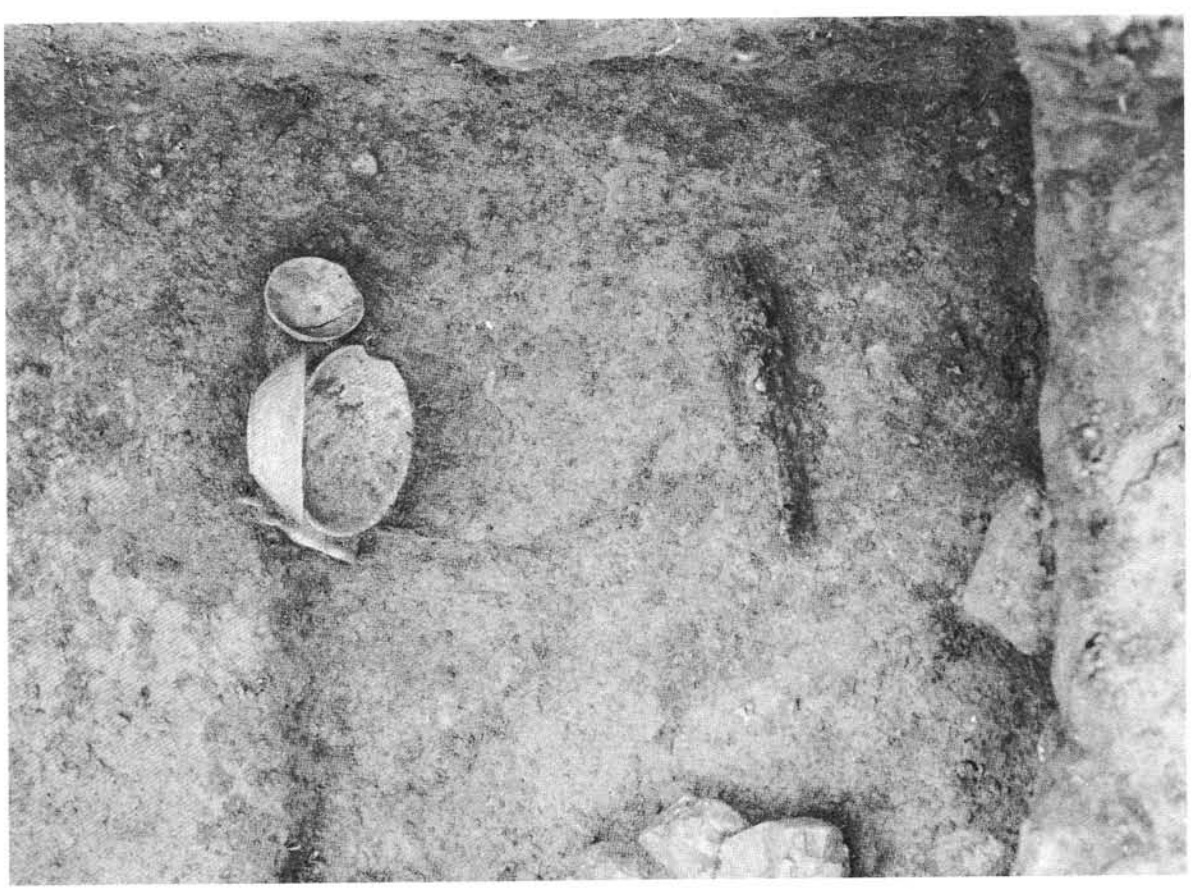
Ⅰ郭全景（北から）



同遺物出土状況（南から）



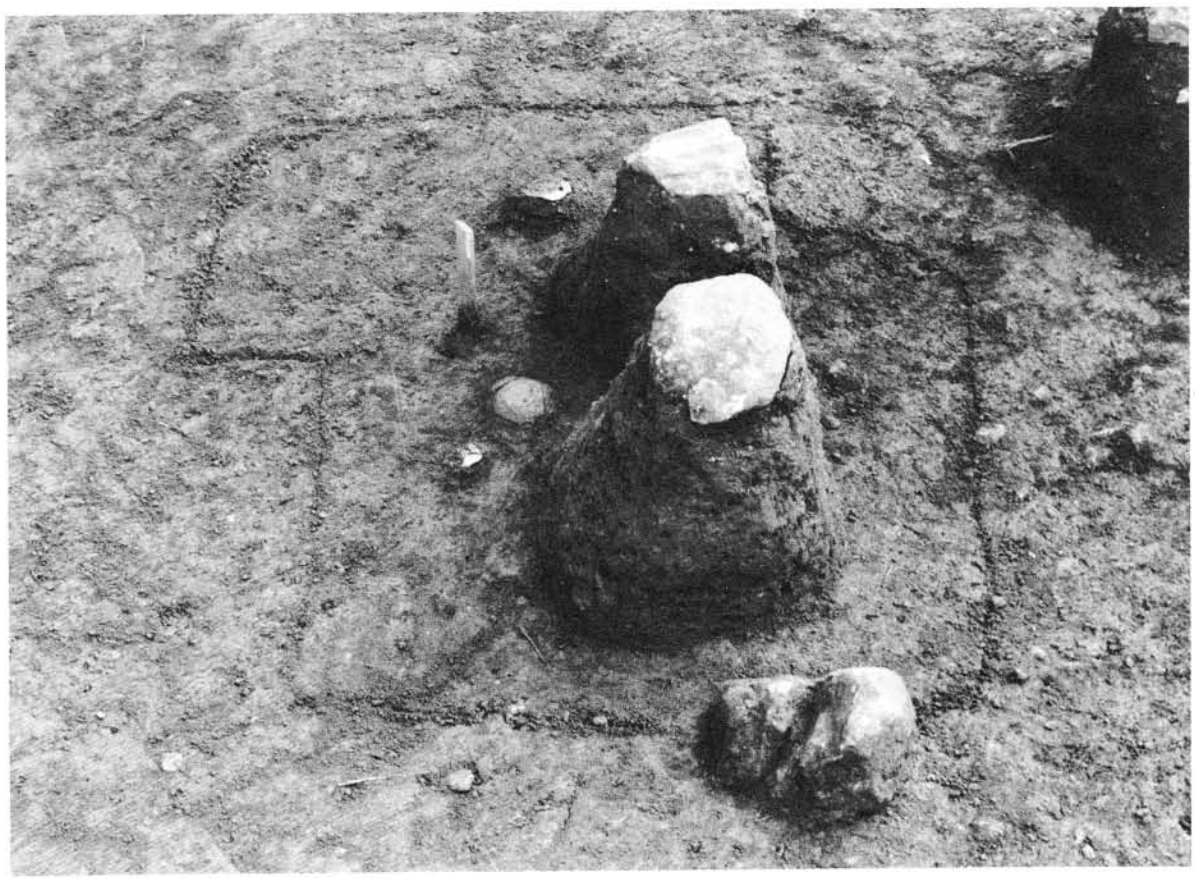
ＳＸ３（西から）



同　遺物出土状況（南から）

ＳＸ１（東から）

ＳＸ11遺物出土状況（東から）



ＳＸ12上面（北から）

ＳＸ13・14（東から）

PL 6

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ郭（北東から）

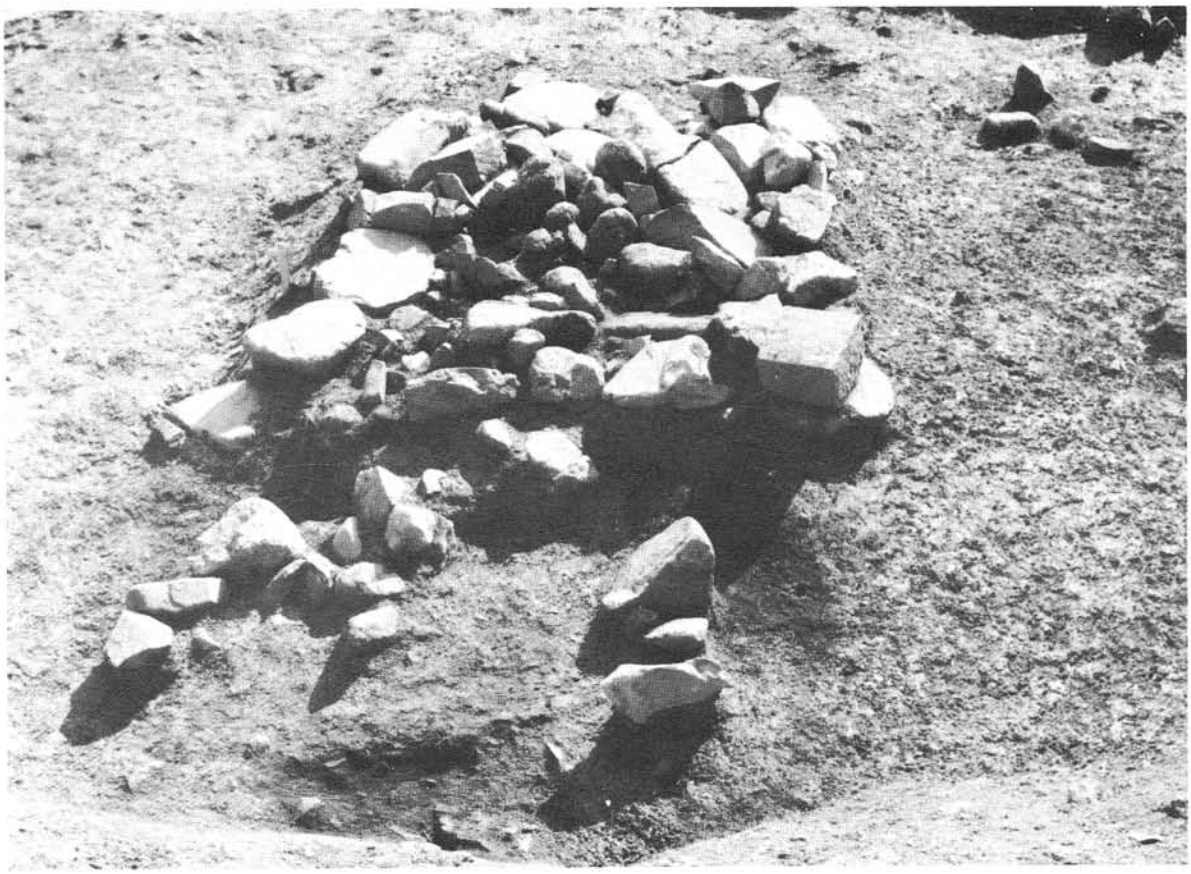
Ⅳ・Ⅴ郭（北から）

ＳＢ23（西から）

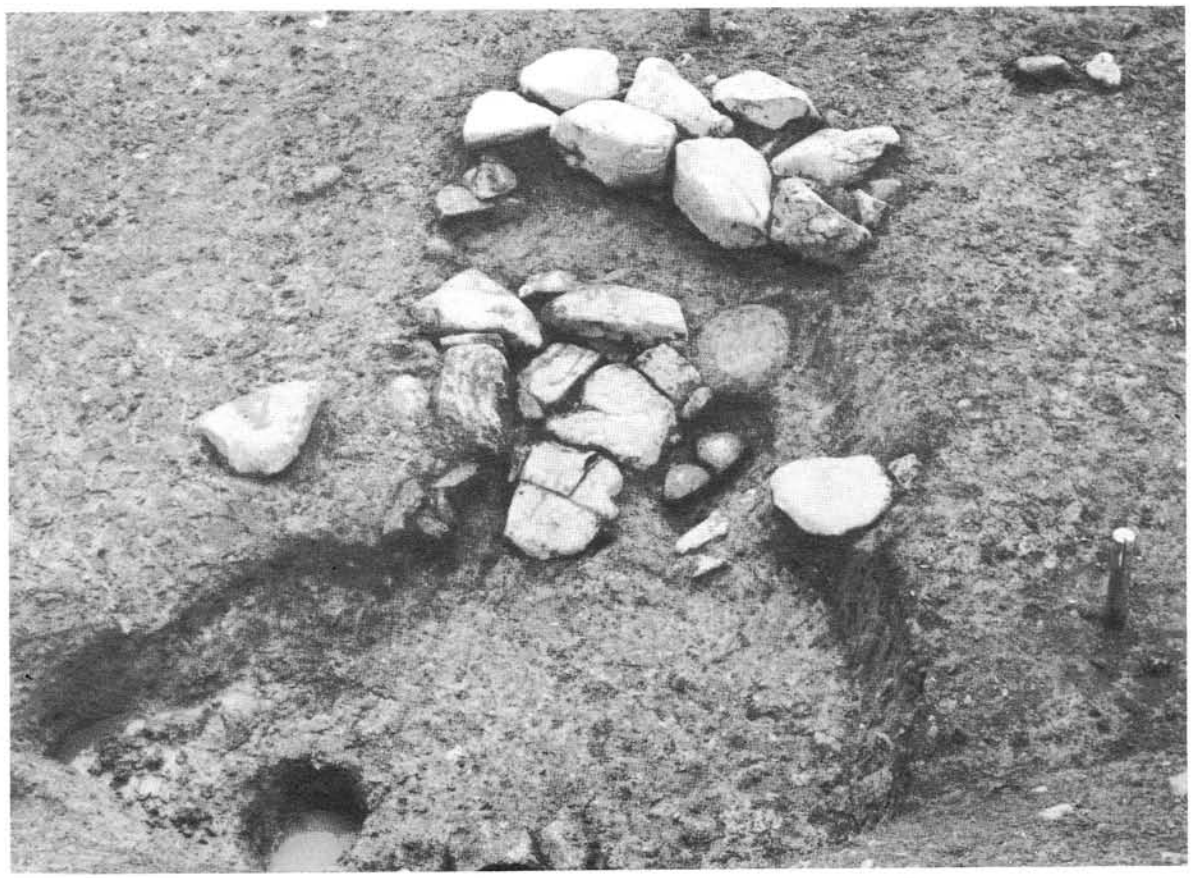
ＳＫ25（東から）

ＳＸ31（南から）

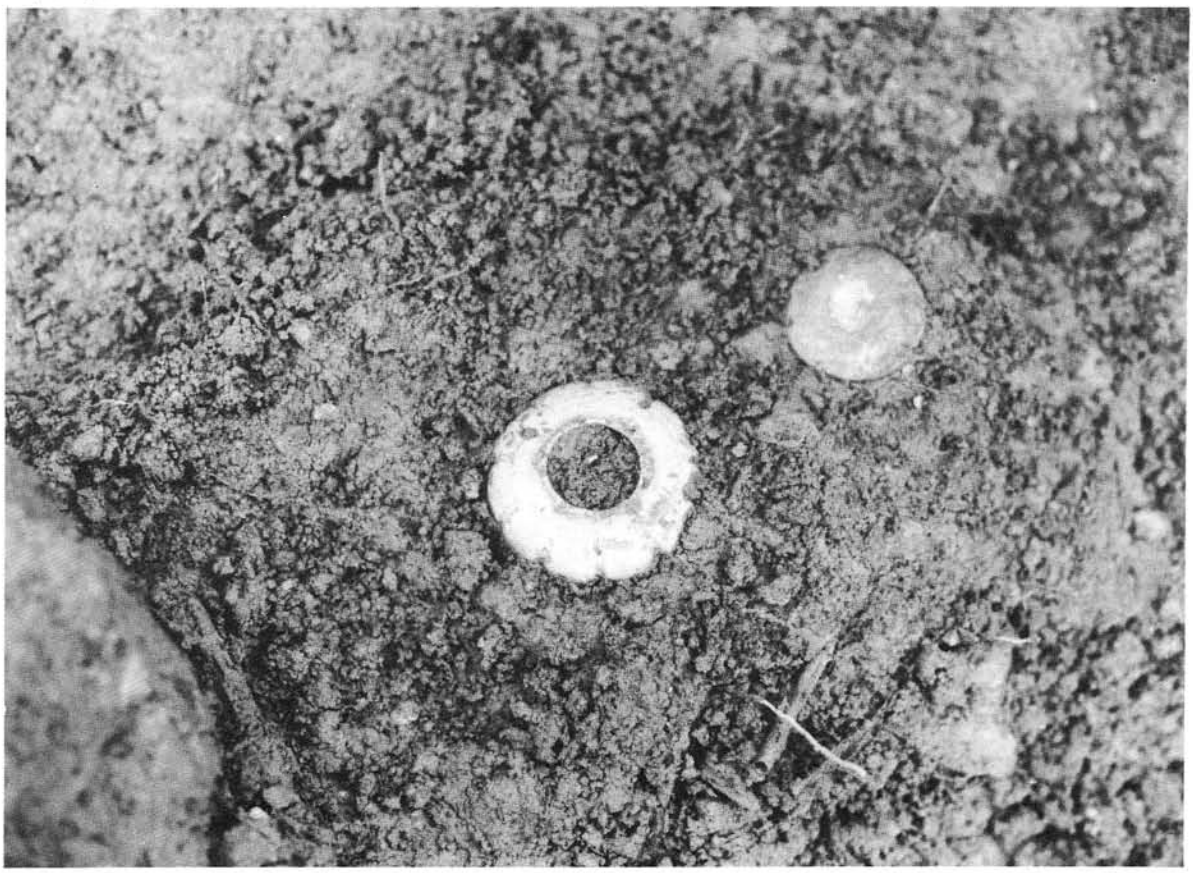
ＳＸ31遺物出土状況（北から）



ＳＸ41上層（北から）



ＳＸ41下層（北から）



ＳＸ18白磁小壺出土状況（東から）

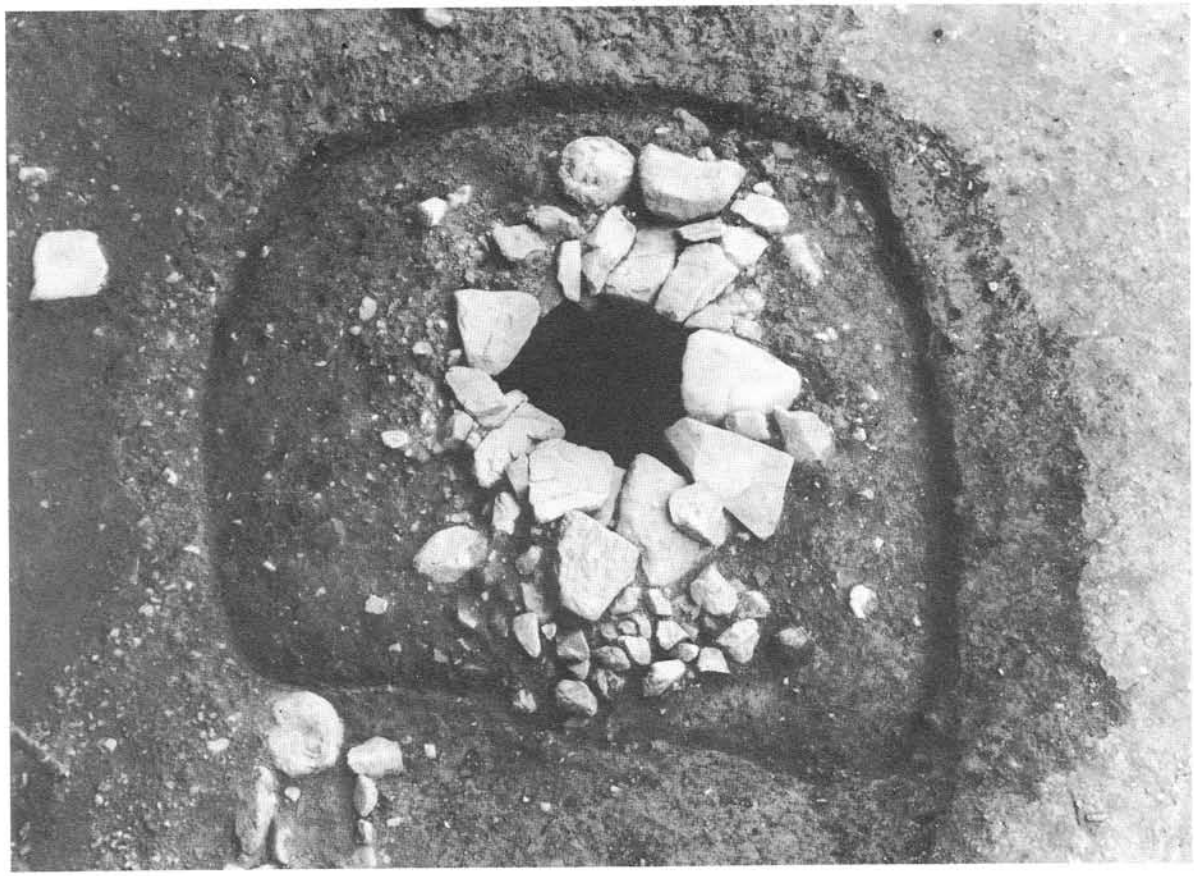
Ⅱ～Ⅵ郭調査後全景（南から）

Ⅶ郭調査前全景（北から）

Ⅶ郭調査後全景（北から）

ＳＥ42付近（西から）

ＳＥ42付近（北から）

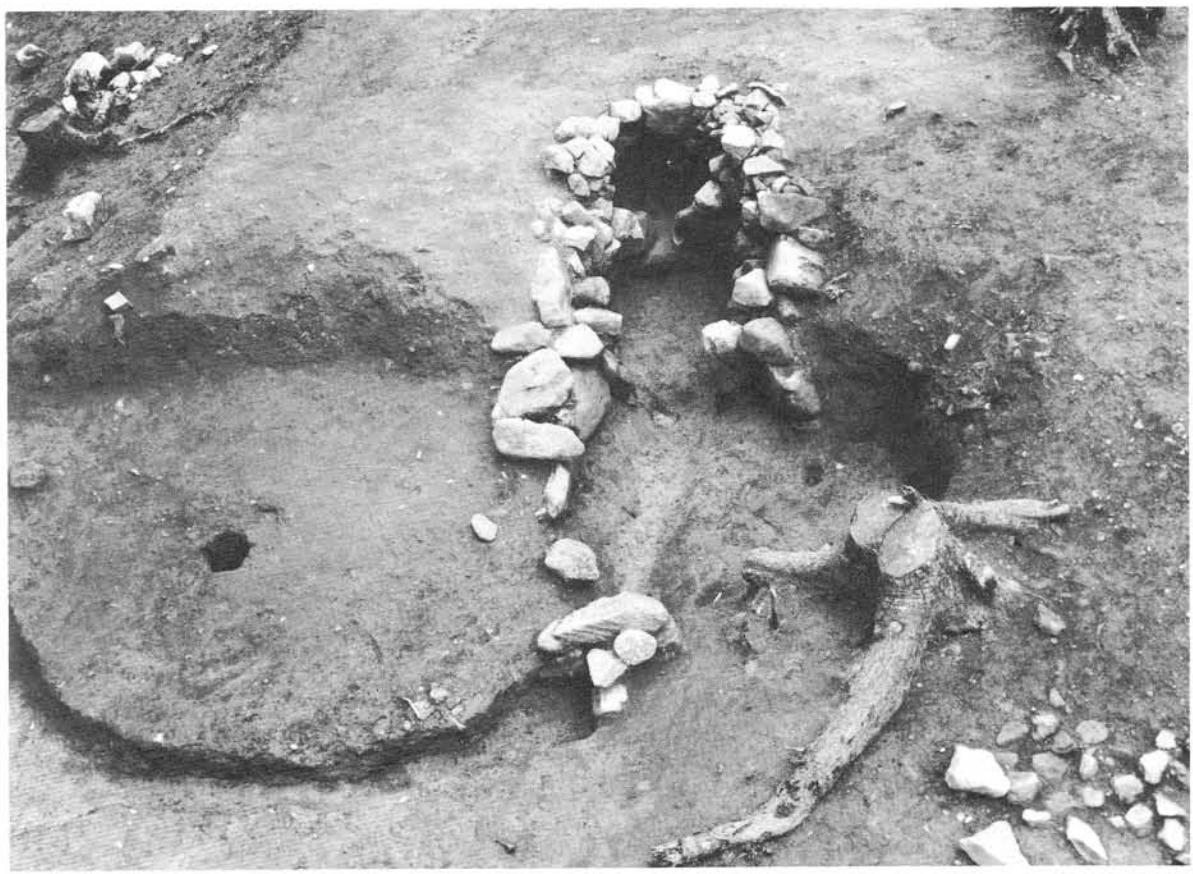


ＳＥ48（南から）

ＳＥ48断面（南から）

ＳＢ51堆積状況（南から）

ＳＢ51（南から）



S X 58（北から）

S X 58（西から）

ＳＸ59（東から）

ＳＸ73（東から）

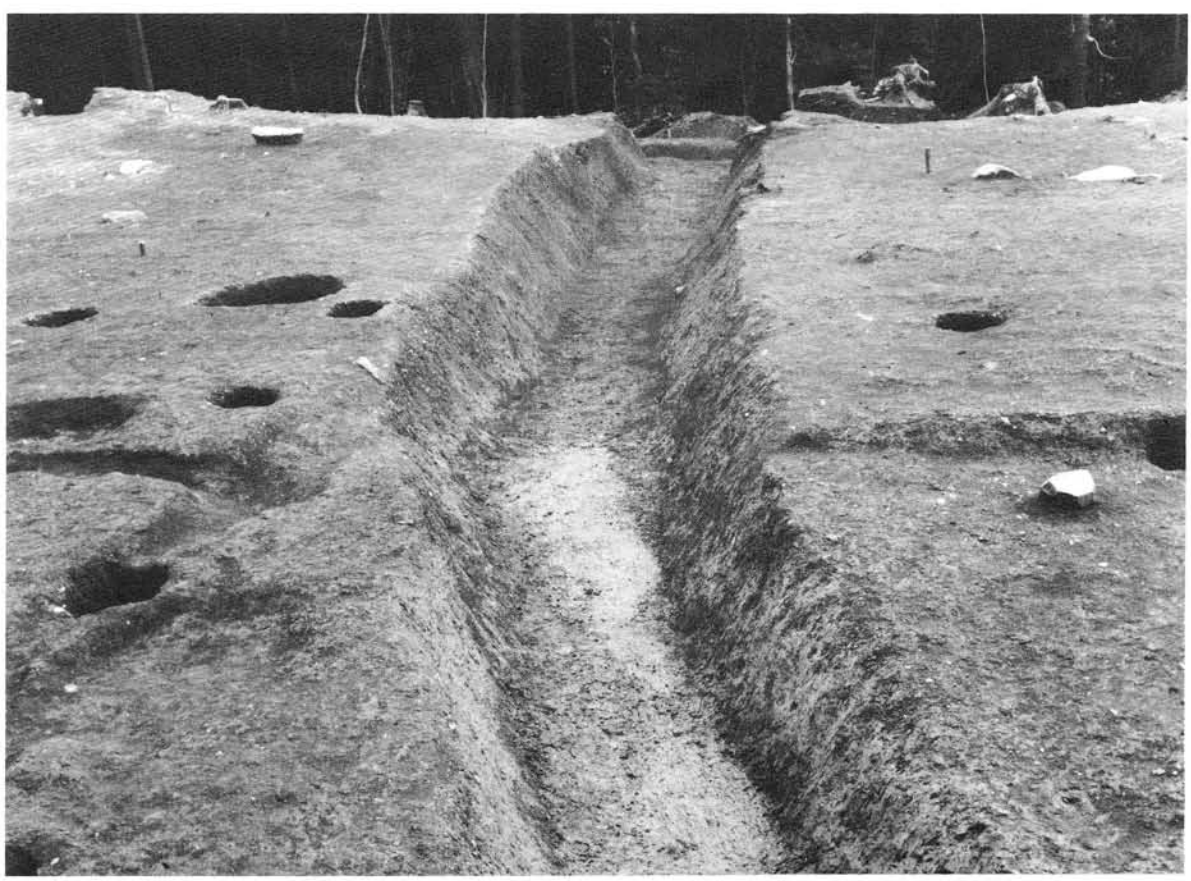
ＳＥ82付近（北から）

ＳＥ82付近（南から）

ＳＥ82（西から）

ＳＥ82木枠（西から）

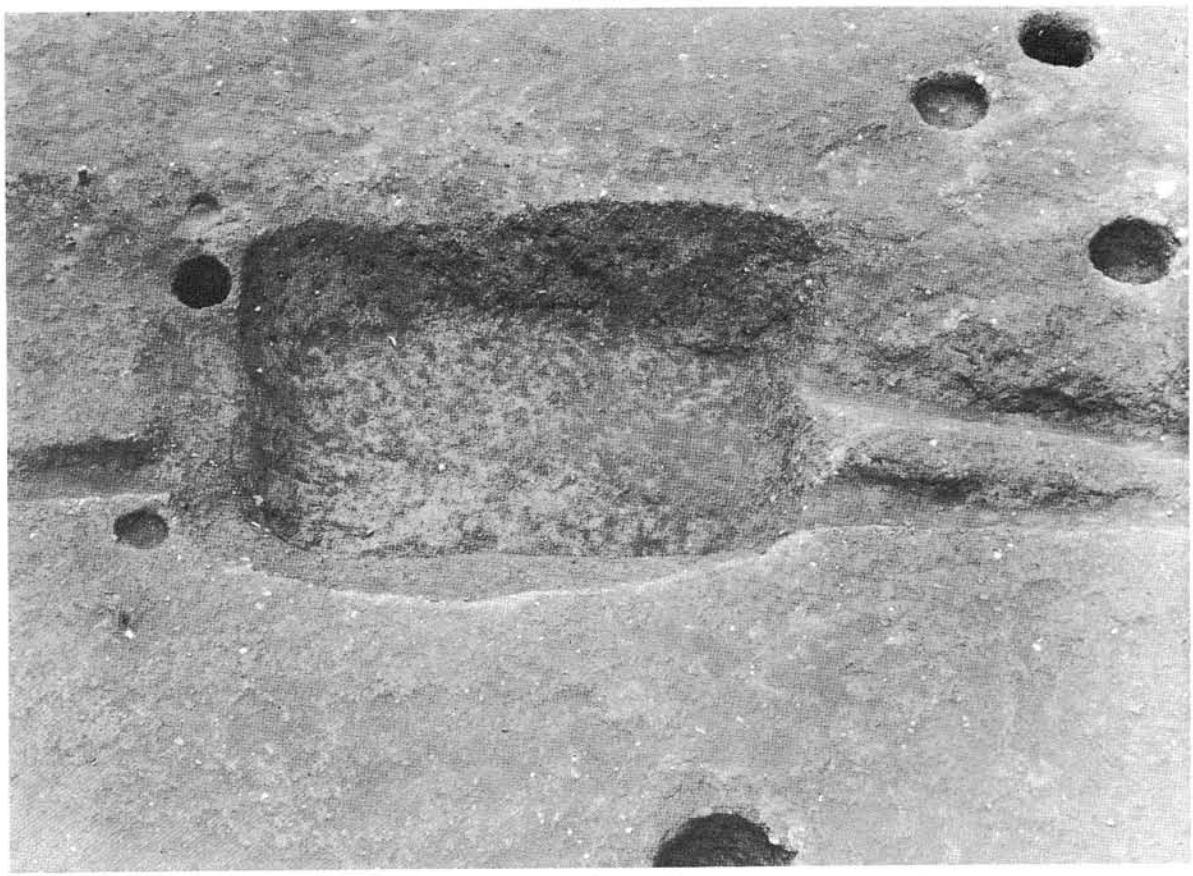
ＳＸ65（西から）



ＳＤ84（西から

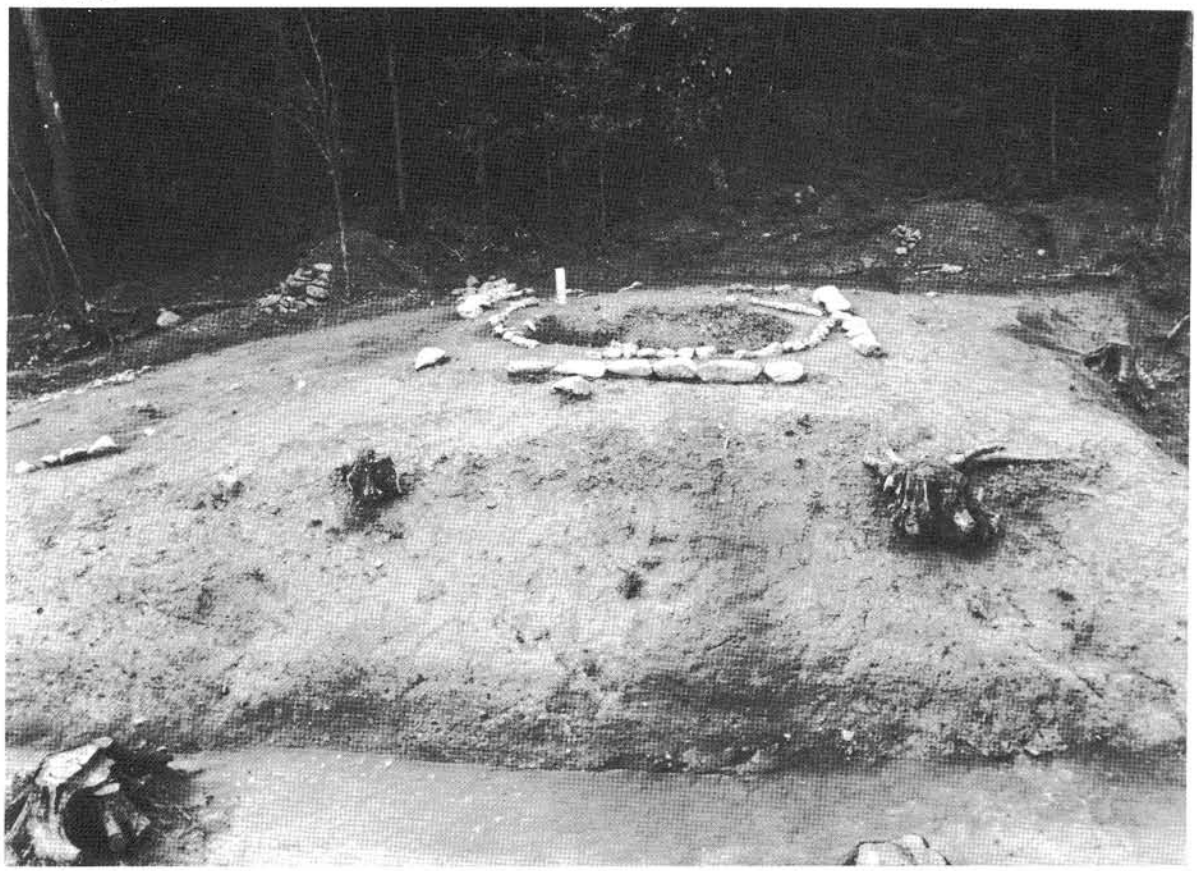
ＳＸ91（北から）

ＳＡ80（北から）



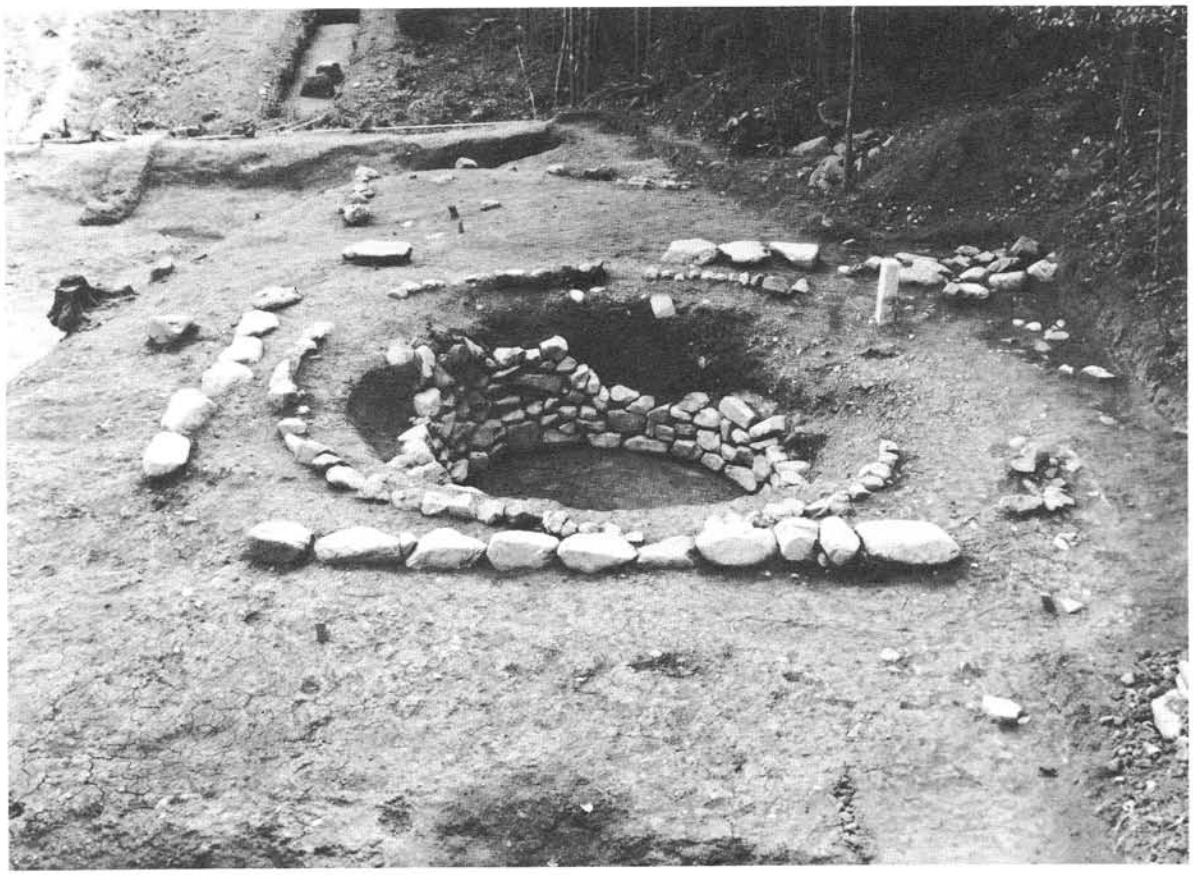
ＳＫ89（北から）

Ⅶ郭下層（北から）



Ⅷ郭全景（東から）

Ⅷ郭全景（南から）



ＳＸ93（北から）

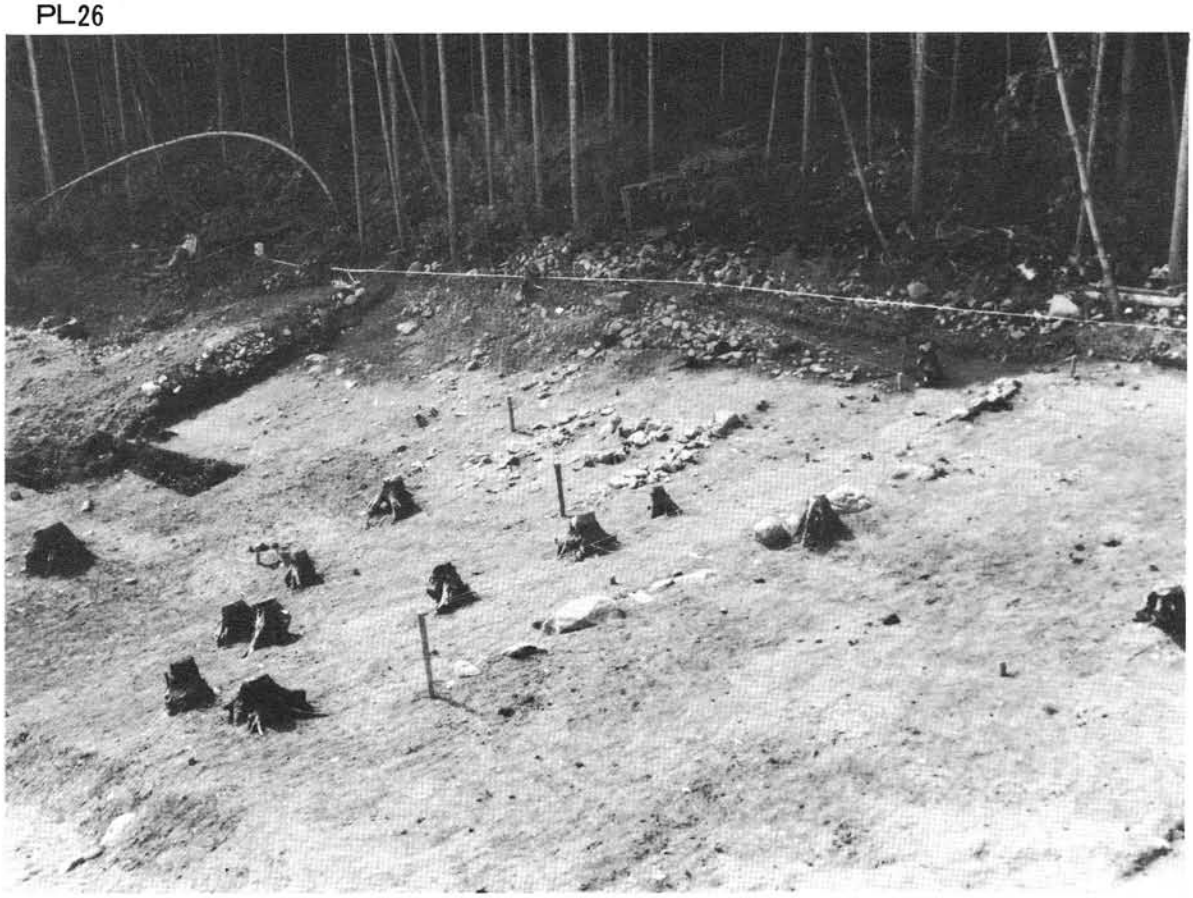
ＳＸ93（南から）

ＳＸ93 蔵骨器出土状況（北西から）

Ⅷ郭流土状況（南東から）

ＳＸ97（東から）

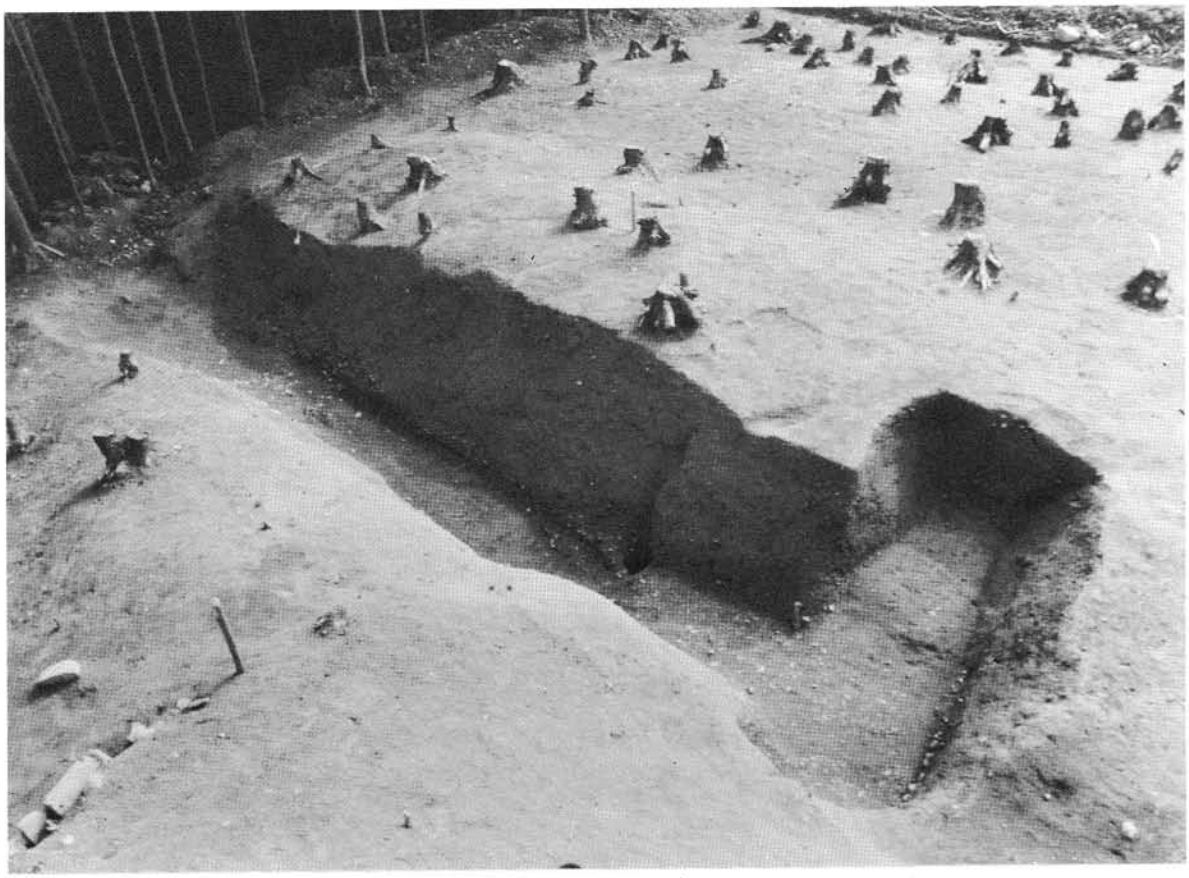
ＳＤ95・ＳＸ96（東から）



X郭全景（北東から）

ＳＤ99埋土状況（東から）

ＳＡ98（東から）

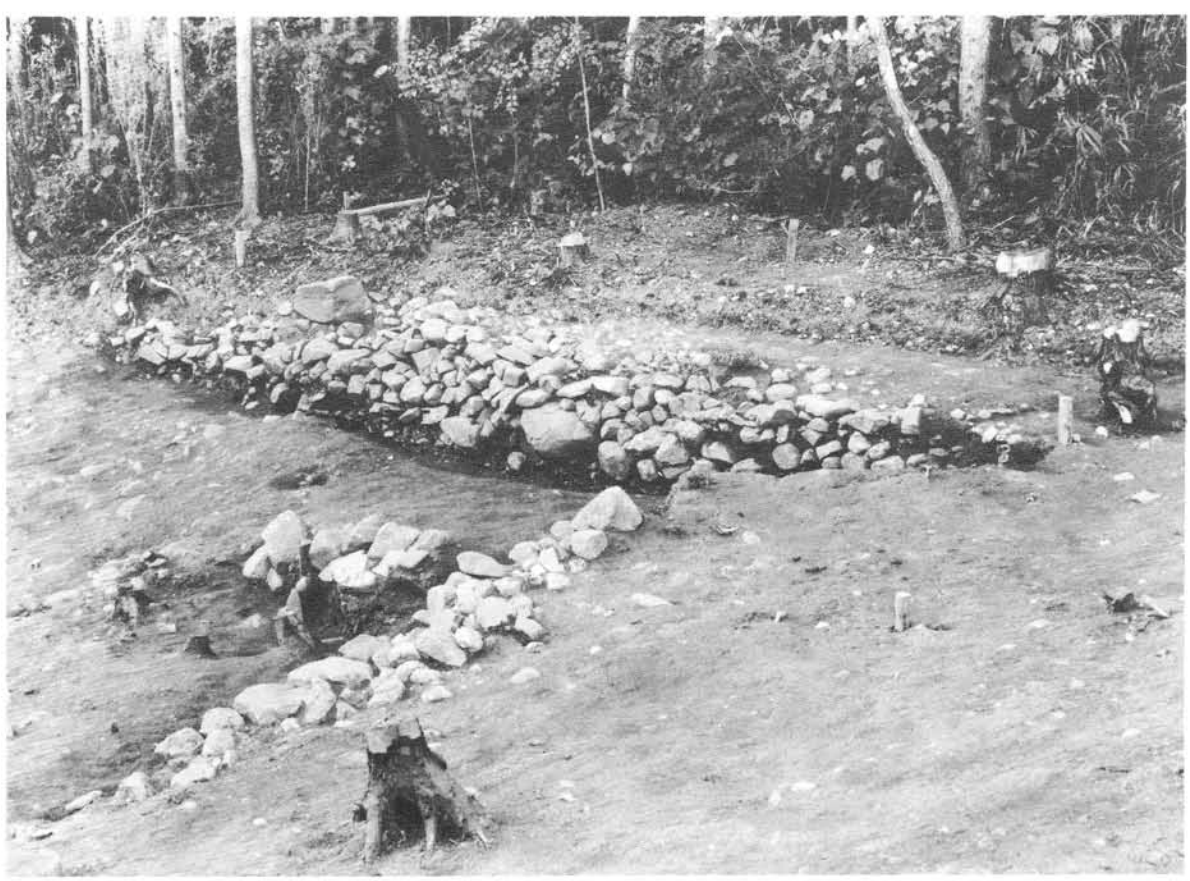


ＳＤ100（北から）

ＳＤ100（東から）

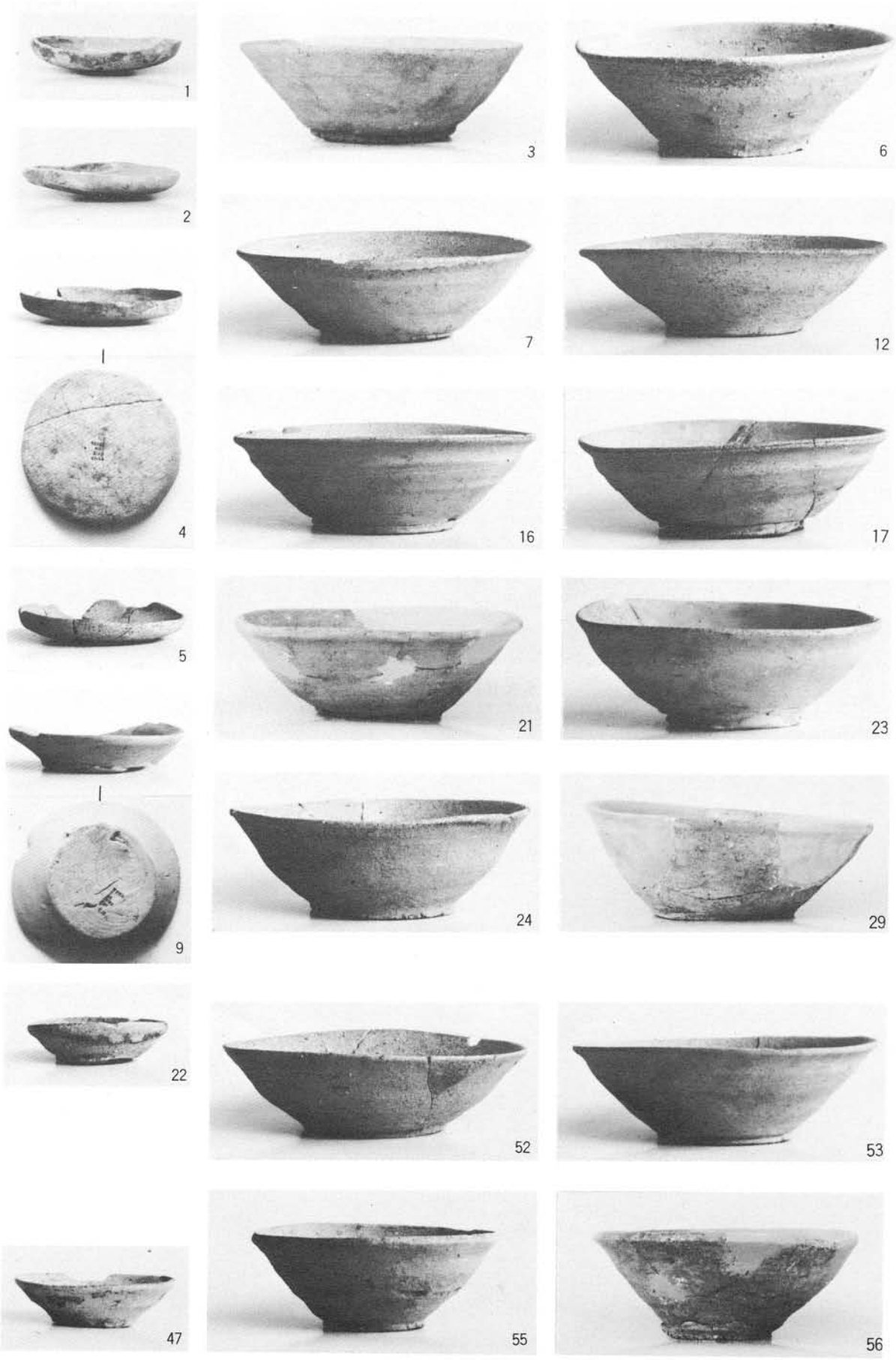
ＳＤ100埋土状況（東から）

ＳＸ101（南西から）



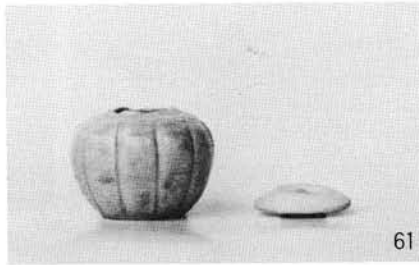
ＳＸ102、103、104（北東から）

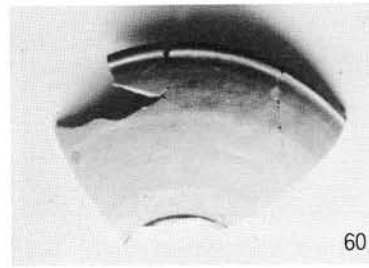
PL30

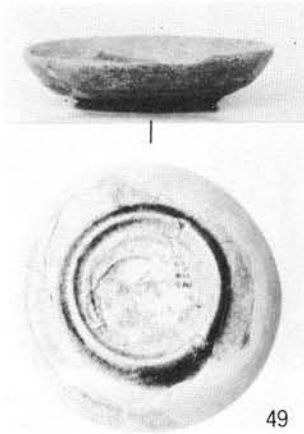


Ⅰ郭遺物 1～29　Ⅱ～Ⅵ郭遺物 47～56　(1：3)

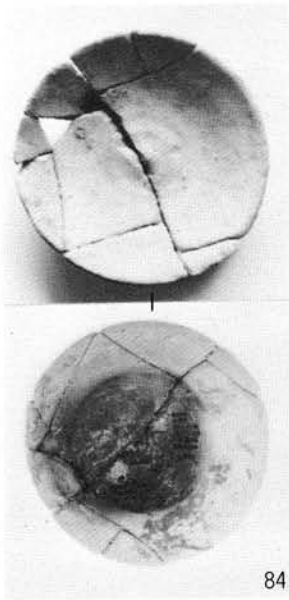
59

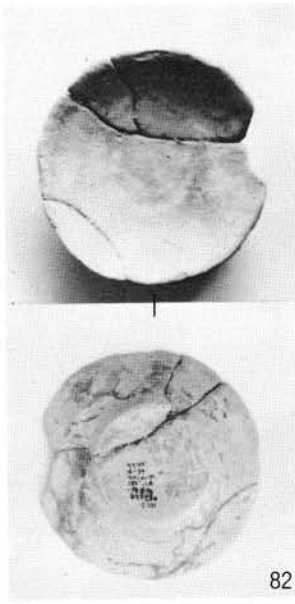

61


60


49

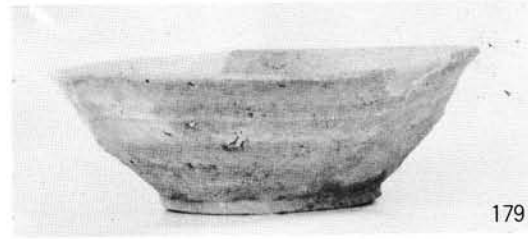
58


84


82

121

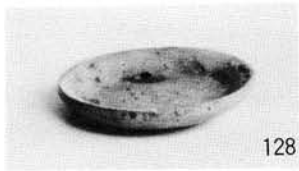
117


179

127

148

181


128

165

Ⅱ～Ⅵ郭遺物 49～61　　Ⅶ郭遺物 82～181

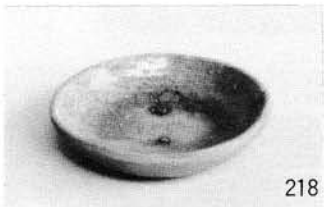
（1：3）

192

194

197

214


218

211

249

223

231

265

232

234

209

235

237

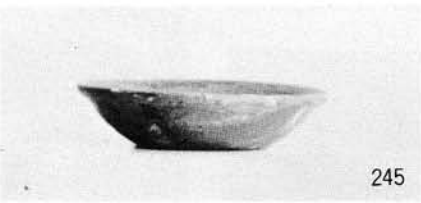
241

238

239

242

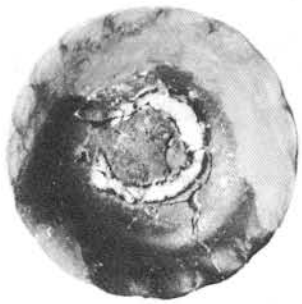
241


245

246

Ⅶ郭遺物 192～265

（1：3）



252

255

253

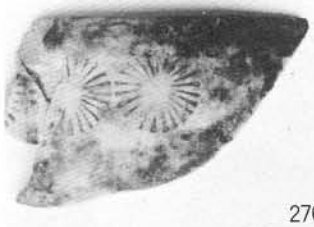
259

247

221

248

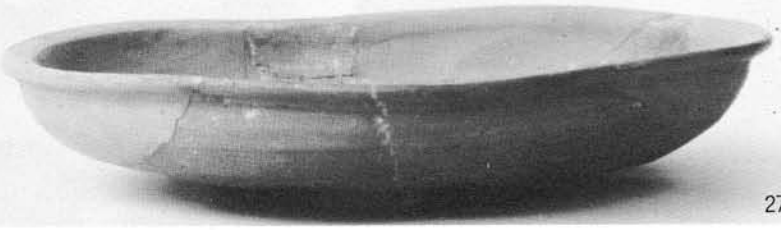
266



276

269

272



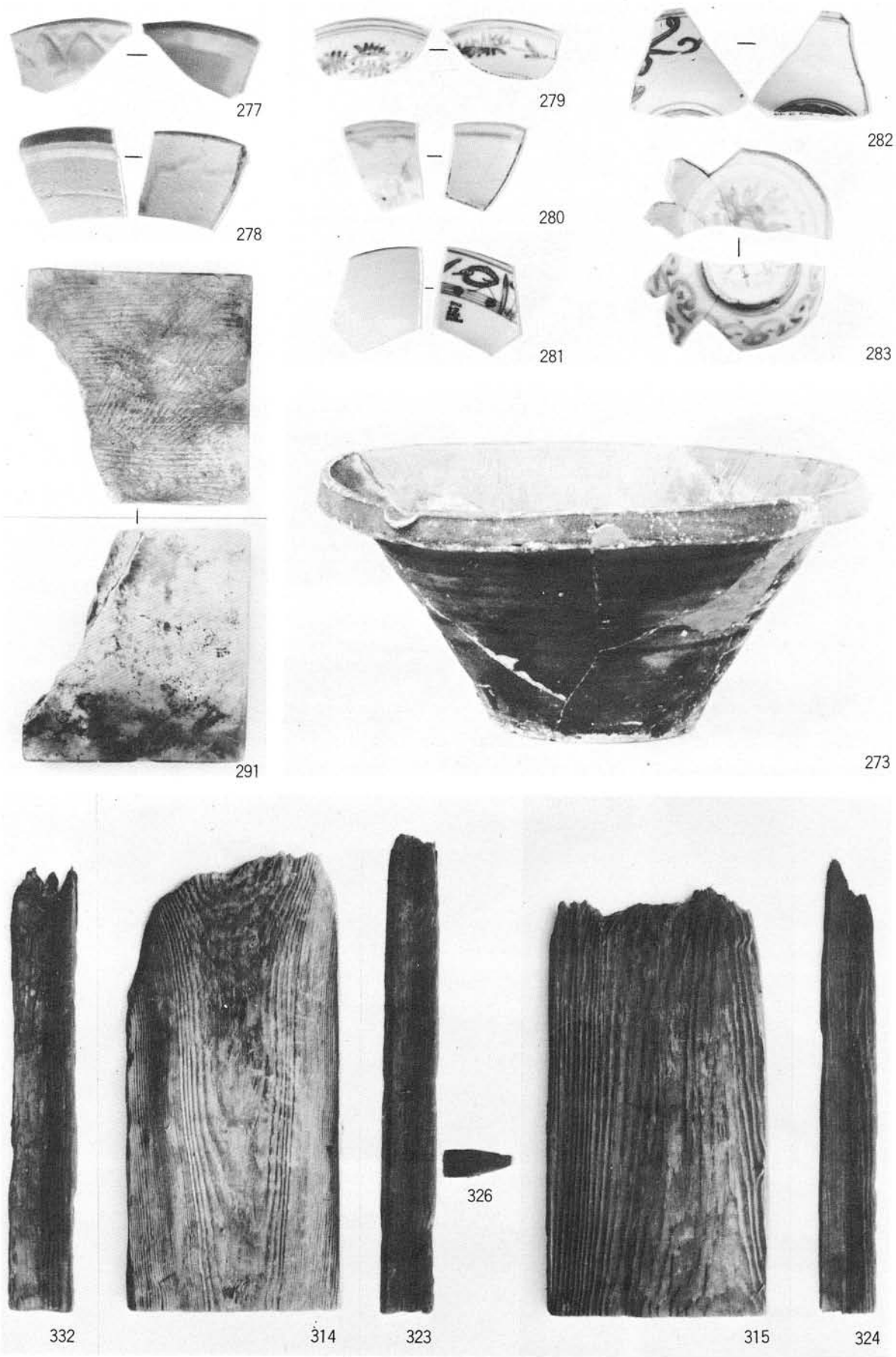
270

284

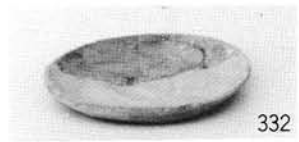
271

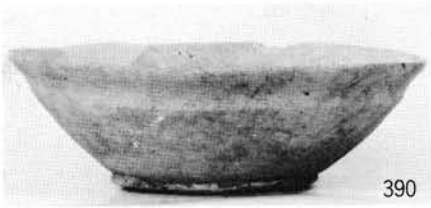
Ⅶ郭遺物 221～284

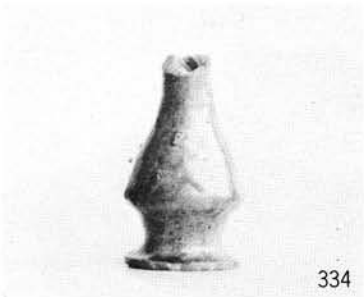
（1：6）

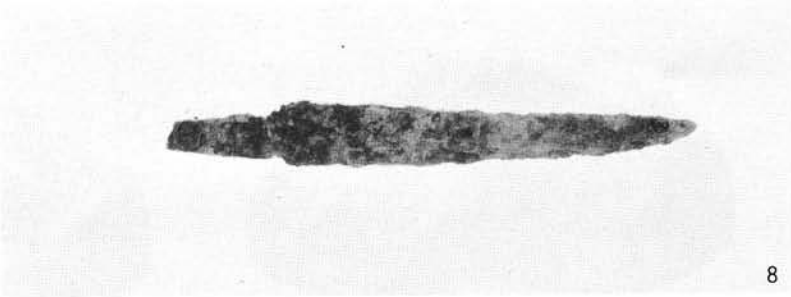


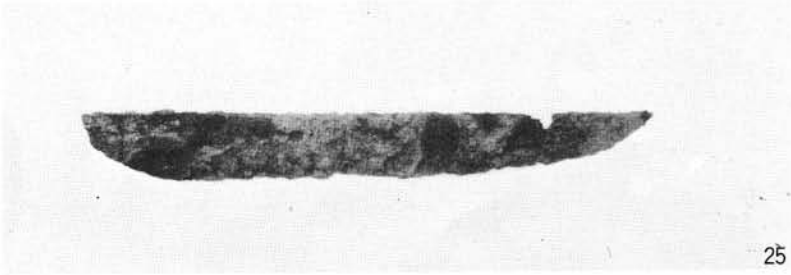
Ⅶ郭遺物 277～326　　（1：3、314～324 1：6、326 1：2）

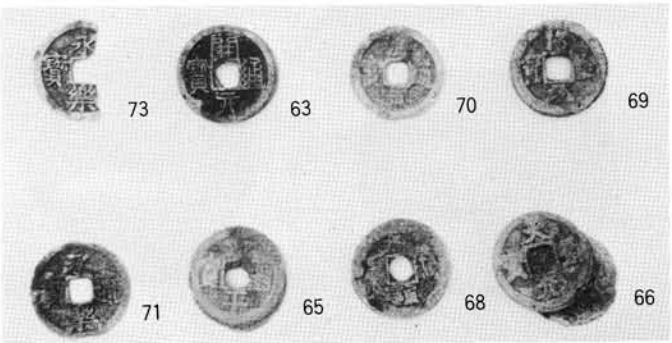


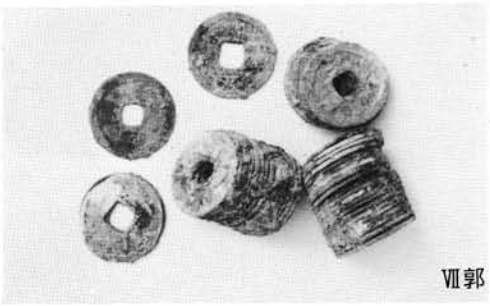




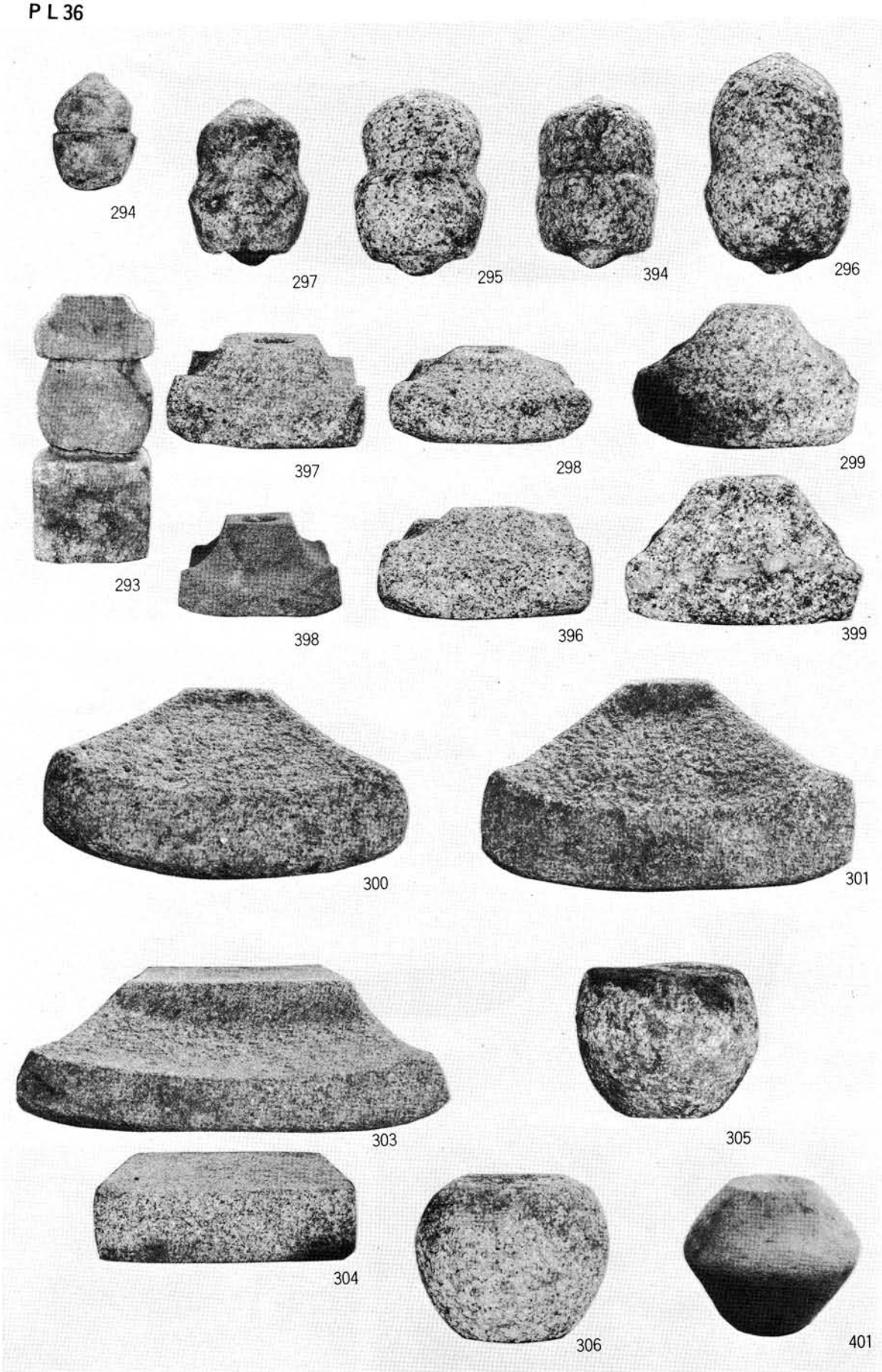




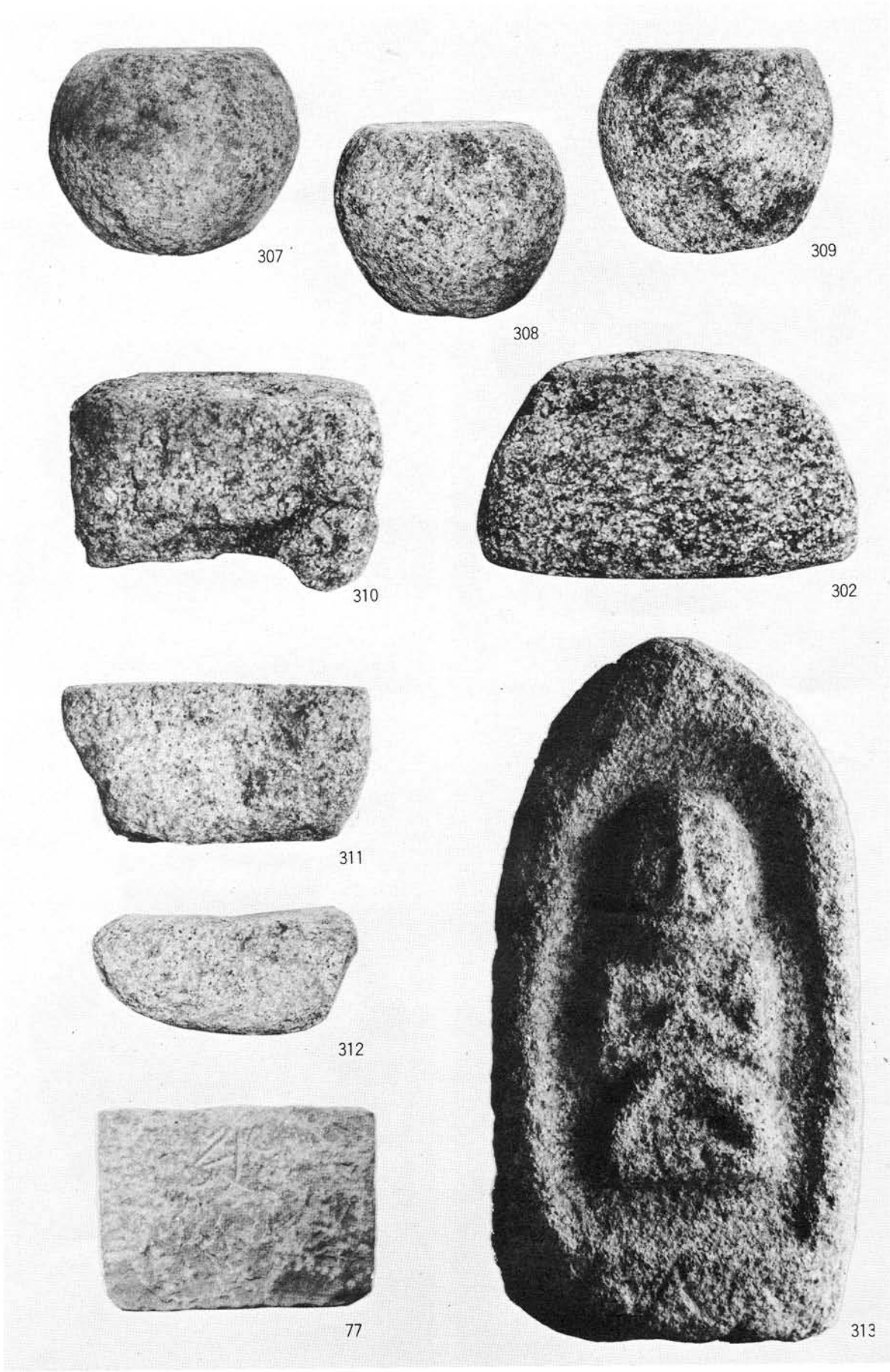




Ⅷ郭遺物 330～359　Ⅸ郭遺物 372　Ⅹ郭遺物 385～391　（1：3、銭貨1：2）
Ⅰ郭遺物 8：25　Ⅱ郭遺物 65～73　Ⅶ郭一括出土銭貨

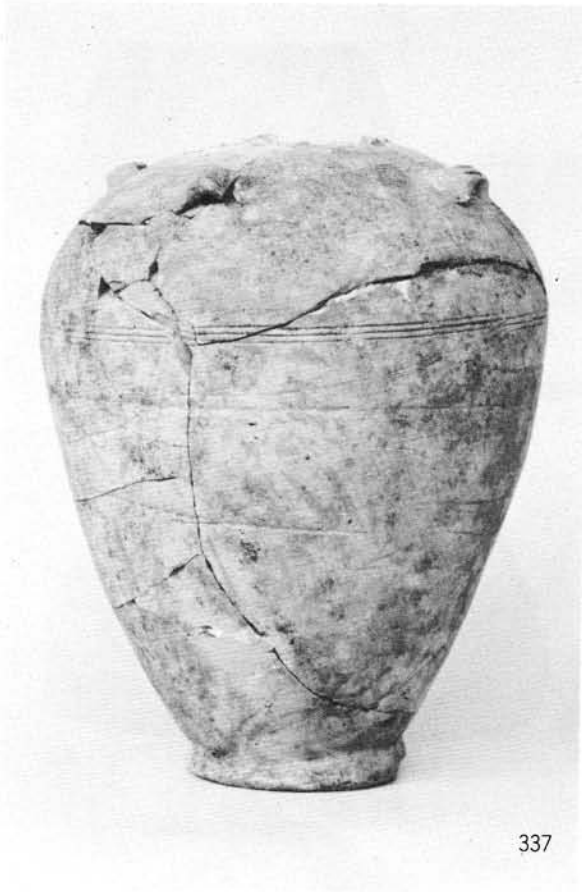


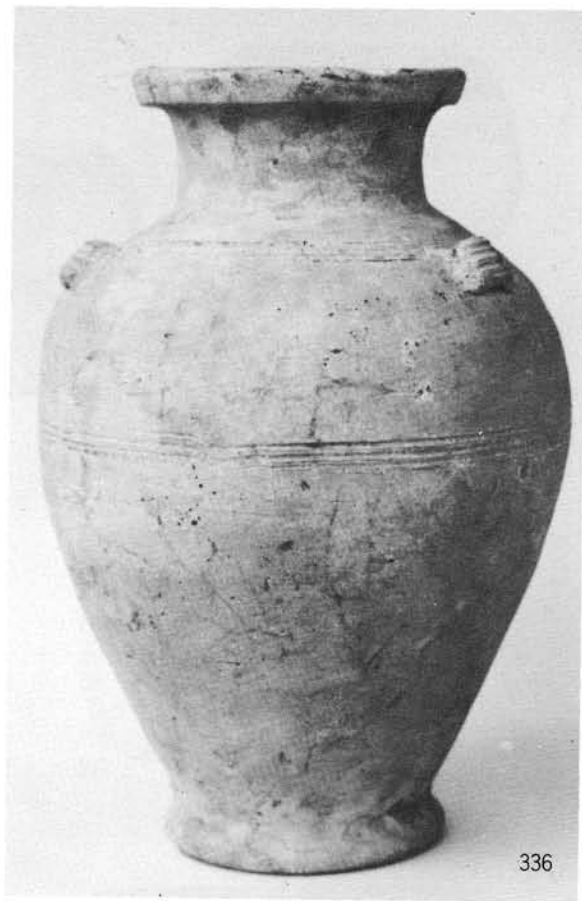
Ⅶ郭遺物 293～306　Ⅸ郭遺物 397　Ⅹ郭遺物 394～401　（1：4）



Ⅵ郭遺物 77　Ⅶ郭遺物 307～313

（1：6、313　1：4）


337


336

338

339

昭和60(1985)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告70

丹生川上城跡発掘調査報告

昭和60年3月

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　東海印刷株式会社